日本キリスト改革派教会　大会教育委員会

# 教会学校教案誌

church school curriculum

Church School Curriculum Since 2001

vol.59
2015年10-12月
「子どもと親のカテキズム」
に基づく二年サイクル　第１年

【巻頭説教】子どもたちを妨げない …… 長田詠喜
アメリカの教育事情（１）…… 望月　信
子どもへの証し …… 保田広輝
【教会学校教師のための神学講座】
全生活にわたる感謝　～十戒を生きる（３）…… 吉田　隆
【日曜学校・教会学校訪問】徳島教会のご紹介

# 2015年10〜12月カリキュラム（第59号）

―『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル　第1年―

| 月　日<br>教会暦・行事 | 主　　題 | カテキズム | 参照教理問答 |
|---|---|---|---|
| | | 聖 書 箇 所 | 暗 唱 聖 句 |
| | 単 元 の 目 標 | | |
| 10月4日 | 人間・神と人と共に | 問17 | ウ小10 |
| | | 創1:26〜28、黙21:3, 4 | 黙示録21:3, 4 |
| | 神の子どもとして神と共に、他者と共に生き、愛し合う幸いを求めよう。 | | |
| 10月11日 | 人間の使命 | 問18 | |
| | | マタイ5:43〜48 | ヨハネ一4:7a |
| | 神とその御心を知る事は、人間の使命と目的を知り生きる事。喜んで仕えよう。 | | |
| 10月18日 | 人間・罪の起源 | 問19 | ウ小13、ウ大21〜23 |
| | | 創世記3:1〜12 | ローマ5:19 |
| | 神の怒りと悲しみ、憐れみの眼差しの中でアダムと自分の罪を重ね、見つめよう。 | | |
| 10月25日 | 罪とは何か | 問20 | |
| | | ルカ15:11〜24 | ルカ15:21 |
| | 福音の赦しの恵みの中で、みことばを破るすがたを見つめ、救い主をたたえよう。 | | |
| 11月1日 | 罪人の悲惨 | 問21 | ウ小19、ハイ７〜11 |
| | | 創世記4:1〜16 | 申命記6:15b |
| | 赦しの光の中でこそ、悲惨を見つめることができる。罪を憎み、光を求めよう。 | | |
| 11月8日 | 罪人の歩み | 問22 | ウ告6:4、ウ小18, 19 |
| | | ホセア4:1〜3 | エフェソ2:3 |
| | 罪は具体的な悲惨へと突き進ませる。世界と自分の究極の問題であると知ろう。 | | |
| 11月15日 | わたしの罪<br>神の怒りと裁き | 問23 | ウ大24, 25、ウ小14, 18 |
| | | サムエル下12:1〜15 | ローマ3:23, 24 |
| | 自分の罪を認められるのは、聖霊の恵み。赦された罪人である事を感謝しよう。 | | |
| 11月22日 | 完全な堕落<br>キリストの贖罪 | 問24 | 問82 |
| | | ルカ22:54〜62 | ローマ7:19 |
| | 自分で自分を救う事は全くできない。キリストの完全な贖いに感謝しよう。 | | |
| 11月29日<br>（待降節） | 救い主の約束 | 問25 | ウ小20 |
| | | マタイ9:9〜13 | マタイ9:13b |
| | 私たちは御子による選びの中に定められている。父なる神の揺るがぬ愛に賛美。 | | |
| 12月6日<br>（待降節） | 二性一人格 | 問26 | ウ小22、ハイ16, 17 |
| | | ヨハネ1:14〜18 | ヨハネ1:14 |
| | 定められていた救い主イエス。キリストによる世界の救いを知らせ、共に喜ぼう。 | | |
| 12月13日<br>（待降節） | キリスト・真の神 | 問27 | ウ小21, 22、ハイ16〜18 |
| | | ガラテヤ4:4〜7 | コリ一1:19 |
| | 真の神でなければ、罪を完全に償い神との交わりを回復し神の子にし得ない。 | | |
| 12月20日<br>（降誕祭） | キリストの降誕 | （問26） | ハイ15 |
| | | ルカ2:1〜7 | ヨハネ一4:14 |
| | 降誕物語を通して、地上に来られ、人となられた幼子イエスさまを、賛美しよう。 | | |
| 12月27日 | キリスト・真の人 | 問28 | ウ小22 |
| | | ローマ5:1〜11 | ローマ5:9 |
| | 真の人でなければ、人間の身代わりになれない。主イエスの憐れみを感謝しよう。 | | |

日本キリスト改革派教会大会教育委員会　2015年10・11・12月号
教会学校教案誌　第59号

# もくじ

2015年10・11・12月カリキュラム
まえがき……相馬　伸郎　……4
巻頭説教……長田　詠喜　……5
分級展開例の新しい試み……安田　直人　……8
子どもたちの学校生活を通して見た
アメリカの教育事情 (1)……望月　信　……9
日曜学校・教会学校訪問
　徳島教会教会学校のご紹介……徳島教会教会学校教師会　……14
徳島教会 Happy Kids ……寺内　実和　……17
絵本に心を耕されて
　「ありがとうのえほん」……望月　鈴子　……20
教師の声
　主イエスに導かれて……渡辺　史朗　……22
　教会そして教会学校について……齋藤　厚子　……24
子どもメッセージ……保田　広輝　……26
全生活にわたる感謝～「十戒」を生きる (3) …吉田　隆　……28

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……33
　10月 4日 ……34
　10月11日 ……40
　10月18日 ……46
　10月25日 ……52
　11月 1日 ……58
　11月 8日 ……64
　11月15日 ……70
　11月22日 ……76
　11月29日 ……82
　12月 6日 ……88
　12月13日 ……94
　12月20日 ……100
　12月27日 ……106

2016年1・2・3月カリキュラム……112
2015年度年間カリキュラム ……113
救済史に基づく二年サイクル……115
「子どもと親のカテキズム」案内 ……117
執筆者よりひとこと・あとがき……118

まえがき

# 新しい教会像・信徒像とその原動力

相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）

## 新しい教会像を描きだす課題

創立70周年を目前にする今、私どもの国とそこに遣わされた教会は、おそらく戦後最悪とも言うべき政治的状況におかれています。確かに、戦後のキリスト教会は敗戦によってもたらされた「信教の自由」に保障され、当初、さかんな伝道が始められました。しかし、日本基督教団に束ねられ、深い真実の悔い改めをないがしろにして再出発した教会はもとより、戦前の歴史を自覚的に担う意識の比較的少なかった新しい教派の移植や伝道によって出発した福音派までも、いわゆる伝道の不振にあえいで久しいと思います。しかも、このどちらのあり方にもなびかずに、堅実に改革長老主義の教会を建てあげようと志した私ども自身もまた同様です。本来、このような時こそ、俄然、光を放つべきでありましょう。残念です。

しかし、嘆いていても始まりません。70周年をひとつの転機にしなければならないと思います。新しい教会像、信徒像を描く努力、議論を深める必要があるのだろうと思います。改訂された「信徒の手引き」や何よりも「70周年記念宣言」がそのひとつの役割を担うものとなるだろうと思います。もとより大会教育委員会も、そして弊誌もまた微力ではありますが、貢献しなければならないことを思います。

## 教会の働きの固有の視座からの考察と統合

よき議論のためには、結論を急ぎすぎたり、自分の意見に固守する態度は避けなければならないはずです。その上で、私ども教会にとって、あらゆる議論の審判者であり結論は、聖書を通して語られる聖霊とそこに証された主イエス・キリストご自身でいらっしゃいます。主の模範に根拠を据えるべきことは絶対的な前提です。聖書が明らかにする教会の働きには、礼拝、伝道、交わりそしてディアコニア等、多様です。それぞれに固有の役割と意味を持っています。同時に、それらすべては神の国とその主でいらっしゃるイエス・キリストを証するという点において統合されるものです。そもそも、唯一のキリストの働きを今ここで担うのが教会です。そしてまさにそれゆえに、担い手としての私どもの原動力は、主イエスを突き動かされた「秘密」にその源を持つものです。

## 原動力としてのスプランクニゾマイ

新約聖書の中で神の愛をあらわす特別の言葉に、「憐れみ」と訳される「スプランクニゾマイ」があります。「はらわた痛む」とも訳され、「内臓に激痛を生じさせるほどの感情のほとばしり」を意味する、神の人への愛をあらわす言葉です。

目の前に病に苦しむ人々がいれば、主イエスは、はらわたが痛まれるほど激しい感情を伴う強烈な愛に捉えられました。主イエスのお働きはすべて、この極みまでの愛に突き動かされてなされたものだと言えます。この聖なる愛の発動によって神の国は地上に始まり、証しされて行ったのです。

キリスト者とは、誰でしょう。それは、今ここで、主イエスのスプランクニゾマイ（憐れみ）の対象とされている者であることを知り、その喜びと感激に生きる者、生かされている者です。弊誌の営みも、皆さまと共に、この愛の業の教育の場における展開でありたいと願っています。

巻頭説教

マルコによる福音書10章13〜16節

# 子どもたちを妨げない

長田詠喜（新所沢伝道所宣教教師）

マルコによる福音書10章13〜16節

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

イエスさまが子どもたちを近くに招かれたと言うこのエピソードは、福音書の中でも有名なエピソードの一つでしょう。歴史的に正確かどうかはともかくとして、絵画に描かれている情景を多くの人々が思い浮かべることができるでしょう。

「イエスに触れていただくために」と言われていますが、これはもちろん、ただ触ってもらおうとしたということではありません。今日の箇所の最後には、イエスさまが連れて来られた子どもたちに「手を置いて祝福された」とあります。また同じ話を伝えておりますマタイによる福音書は最初から、「手を置いて祈っていただくために」と書いております。親たちはイエスさまに手を置いていただくことで祝福を祈ってもらおうと願って子どもを連れて来ておりました。

しかし、弟子たちは、子どもを連れて来た人々を叱りました。福音書は弟子たちが叱った理由をはっきりとは書いていませんので想像するしかないのですが、当時、子どもというものは決して今日のように大切にされていたわけではありませんでした。子どもは律法を十分に身に付けていない者、理解力の足りない者として、せいぜい半人前の存在か、人数に数えられない存在でした。この時、おそらくいつものようにイエスさまの周りには、沢山の人々が教えを聞きに、また病を癒していただきに詰め掛けていたことでしょう。その中で、教えを聞いても判らない、深刻な病気という訳でもない子どもたちは後回しにして、もっと価値ある、もっと緊急性の高い人を優先しなければならないというのが弟子たちの判断だったのでしょう。そもそも、みんながイエスさまの話を聞こうという時に、静かに聞いていられない、大して理解できない子どもたちは邪魔だと思ったのかもしれません。ルカによる福音書では「乳飲み子までも連れて来た」とありますから、おとなしくできる子どもたちばかりではなかったであろうことは、想像に難くないわけです。

ところが、この弟子たちの振る舞いに、イエスさまは憤られるのです。イエスさまが憤られると言うのは、聖書の中にそんなに多く出て来るわけではありません。理不尽な扱いを受けて怒って当然だと思えるような場面でも、イエスさまは怒ることなく、むしろ穏やかにしております。それだけにこのイエスさまの憤りは、驚く事だったでしょう。しかしそれ程、弟子たちの振る舞いは許すことのできないものだったのです。

ちょっと横道にそれますが、イエスさまが憤

られる、怒られる場面はあまりないと申しましたが、全くないわけではありません。またイエスさまが泣かれる場面、涙を流す場面も福音書の中に一カ所出てきます。ところがイエスさまが笑われたという描写は、聖書の中には一度も出て参りません。そこでかつて、イエスさまは笑ったのかということが神学上の重要な議論のテーマだったそうです。今聞くとナンセンスな議論のように感じるかもしれませんが、実はこれはこれでそれなりの意味がある話です。と言うのも、私たちはイエスさまについて、聖書に記された所を信じています。では聖書からイエスさまについてどこまで知ることができるか、逆に知ることができない事は何か、聖書に記されていないイエスさまについて、私たちはどこまで想像し補う事が許されるのか、聖書からイエスさまの姿を見出すための真剣な議論である事に間違いはありません。

その議論はともかくとして、確かに、聖書の中にはイエスさまが笑われたことについて何も記されておりません。しかし今日の箇所でイエスさまは、弟子たちに憤った後に「子どもたちをわたしのところに来させなさい」とおっしゃり「子どもたちを抱き上げ、手を置いて祝福された」と、子どもたちを連れて来た人々の願いにお応えになっています。イエスさまはその時どんな顔をなさっていたでしょうか。弟子たちに対して怒った時そのままの顔である筈はありません。子どもたちに優しい満面の笑顔を向けていた筈です。イエスさまは本当に心から、目の前にいるこの子どもたちをご自分の近くに招き寄せようとなさった。本当に心の底から、この子どもたちを愛して祝福しようとなさった。その思いを隠そうとせず振る舞われたのです。その時には当然、その心が表れるような、愛に満ちた満面の笑みを浮かべていた筈なのです。人を救おうとなさるイエスさまは、義務感や敵対心や苦しみからなさるのではありません。、本当に心の底からその人に向き合い、その人を愛し、救おうとなさいます。誰かを招き、その人を祝福できるならば、心からの喜びに溢れて、迎え入れてくださるのです。ですからイエスさまは、この地上の生涯に於いて、絶えることなく笑顔でおられた筈なのです。冒頭で私たちがイメージしました必ずしも歴史的には正確ではないイエスさまの姿は、いつの時代でも子どもたちを心から迎え入れようとするイエスさまの救いの姿勢を表すものでした。たとえ聖書に描写されていなかったとしても、人々を招き、救おうと願われるイエスさまの思いが実現する時、イエスさまは心から笑顔であったに違いないのです。

「子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」。これは、まさにご自分を求める人々を全て救おうとなさるイエスさまの深い愛から出る正直な思いであったのでしょう。しかし、更にイエスさまは、その教えに深みを与えて参ります。「神の国はこのような者たちのものである」。

先程申しましたように、当時の「子ども」とは価値のない者、見下されている者であり、更には人々から嫌われ、疎まれている者を表しておりました。しかしここでイエスさまは、「子どものように」という言葉にもう少し広い意味を持たせております。

当時の大人たちが、子どもが力の無い、価値の低い者だと見做していた一方、子どもたち自身は、これは当時も現在も変わらず、自分たちが力を持たない存在であることをよく承知しております。子どもたちは自分で何かを成し遂げることができるとは思っていません。常に誰かに頼り、誰か他の人によって自分の必要、自分の生活、自分の命を支える。それがむしろ当然のことであると思っているのです。自分たちがそのような無力な者である事、他人に支えられなければならないことを子どもはよく自覚しております。「子どものように」と言うのは、そ

のような委ねる姿勢を指しています。ここでイエスさまはおっしゃいます。「自分の力ではなく、子どものように神様の力に頼って立つ、そうする者が、神様の国に入ることができる。」

弟子たちは、子どもたちがイエスさまの話を聞く価値がない者であると考えました。それは逆に、自分たちはイエスさまの話を聞く価値がある者であると考えているという事です。確かに子どもたちに比べたら、弟子たちの方が、お話しの間静かに我慢できるでしょうし、行儀良く並んで待つ事もできるでしょう。難しい話を理解することも子どもたちよりはできるでしょう。しかし、それでは弟子たちが、自分でイエスさまの前に立つ力を持っているのか、子どもたちとは明確に区別されるような、神様の救いをいただくための資格を持っているのかと問われるならば、そんなものはないのです。弟子たちを始めとする大人たちも、イエスさまの前では子どもたちと何も変わらない無力な者なのです。そうであるならば、自分の無力さを知っていて、ただイエスさまの祝福に縋ろうとする子どもたちの方が、自分は何かできる筈だ、少なくとも子どもよりはイエスさまにふさわしい筈だと考えた弟子たちよりも、逆にイエスさまにふさわしい、神の国に相応しい者であるということになるのです。

私たちはどうしても、自分の持っている力に縋りがちです。自分はこれだけのことができた。ということを誇りにしがちです。しかしそのような考え方を、イエスさまはとても厳しい憤りをもって否定なさいます。自分が何か能力を持つ者であるかのように考え、それができない人々をイエスさまから遠ざけようとする人は、結局は自分自身をイエスさまの招きから遠ざけているのです。イエスさまは全ての人々を救おうとその思いのすべてを向けてわたしたちを招いていてくださいます。その穏やかな暖かい満面の笑顔に、全く無力な者、ただ頼ることしかできない者としてただ頼っていくことができるように、大人も子どもも全ての人が、救い主の笑顔を喜んでみることができるように願って参りましょう。

# 分級展開例の新しい試み

安田直人（田無教会牧師）

今号から、分級展開例で、新しい試みを始めます。

## 1. 分級展開例で用いられている方法（帰納的方法）

CRJM（基督改革派日本伝道会）は、小グループでの聖書研究が推進されることを願って、多くの教材を翻訳し、またグループリーダーを育成してくださっています（今号の2名の執筆者は訓練を受けたリーダーです）。

この聖書研究では、質問をとおして、子どもたちが自分で聖書本文から御言葉の意味を発見することを手助けします。何かあらかじめ、正解が用意されているわけではありません。あくまでも、子どもたちの目の前にある聖書本文から、子どもたち自身が、答えを発見するのです。

時には、質問から逸れていってしまうこともあるかもしれません。分級を導く教師は、その時には、流れを引き戻さなければなりません。けれども、多くの場合（私の体験からも）、子どもたちは実にユニークな発見をし、ひとつのグループ（分級）での、聖書理解を互いに深めることができます。聖書の広く深い真理に、一人一人が触れる喜びを味わうことができます。

## 2. 用い方

まず教師は準備のために、良く質問を読みましょう。子どもの人数に応じて、分級展開例をコピーしておきましょう。発見を書き出すスペースが少ないと思われたら（まだ小さい字が書けない子どもたちがいる場合も）、何か別の用紙を用意しておくと良いでしょう。

質問を子どもたちに読ませ、そして考える時間、書き出す時間を取りましょう。自分の発見したことを発表することは、子どもたちにとって喜びですし、また自分の発見したことをこそ、子どもたちは覚えるものです。

明らかに間違っている答えを発表しても、否定せずに受け入れ、柔らかい仕方で違う本文へと導きましょう。

書かれている質問以外に、補助的な質問を用意した方が良い場合もあるでしょう。その場合は、単純に「はい」か「いいえ」で答えられる質問ではなく、考えさせること、想像力をかきたてることへと導く質問を用意しましょう。

新しい分級展開例によって、子どもたちが自分自身で聖書を読む楽しさを知ってくれることを祈っています。子どもたちが、説教で語られた御言葉の真理を、自分自身で発見することができたなら、子どもたちは聖書を読む自信を身につけることができるはずです。

ベレアの教会の兄弟姉妹たちのように、「そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた」という生活が、子どもたちの間で始まりますように（使徒17:10以下）。

# 子どもたちの学校生活を通して見た アメリカの教育事情（1）

望月　信（休職教師・カルヴィン神学校）

私たちがアメリカ合衆国のミシガン州に住み始めて、２年が過ぎました。我が家の子どもたち三人は、当地でプライベート・スクール（私立学校）に通っています。編集部より、アメリカのホーム・スクールについて書くようにとのご依頼をいただきましたが、実際にホーム・スクーリングに取り組んでいるわけでもないわたしには、その知識も力も準備もありません。アメリカに居住しているとはいえ、生活しているミシガン州以外の実情はほとんど分かりません。そのため、「(我が家の) 子どもたちの学校生活を通して見た」アメリカの教育事情とさせていただきます。ホーム・スクールについては少ししか触れることができませんが、ホーム・スクーリングの背景としての一般的な教育事情ということでご容赦いただければと願っています。

「ミシガン州以外の実情はほとんど分かりません」と記しましたが、アメリカでは、教育は連邦政府の管轄ではなく、各州の政府にゆだねられています。アメリカに住んで初めて“United States”である実情に触れることができましたが、たとえば道路行政なども各州にゆだねられており、詳細な交通規則は州によって違いがあります（もちろん、大部分は共通しています)。教育行政も、連邦政府ではなく州政府が担当しており、ですから、アメリカでは、連邦政府（国家）が教科書の内容に関与するということは考えられません。いや、それ以上に、教育は基本的に親の務めとして理解されており、学校教育はその方法の一つに過ぎません。親は自らの教育観に基づいて子どもたちに教育を施すべきであり、その一つの手段としてパブリック・スクール（公立学校）が提供されています。また、そのパブリック・スクールはあくまで最大公約数的な教育機関であるに過ぎず、それぞれの教育観に基づいてプライベート・スクールで教育を施すことができるのであり、自ら教育すること（ホーム・スクーリング）もできます。あるいは、自分がよいと考える団体・個人に教育をゆだねることもできます。それらのいずれもが、義務教育の責任を果たすものとして公に認められています。

アメリカに来た二年前、我が家の子どもたちは、日本の学年で、長男が中学1年生、長女が小学4年生、次女が小学2年生でした。当初はパブリック・スクールに通わせることを考えましたが、幾つかの事情から、ルーテル教会に付属する学校（ルーセラン・スクール）に通うことになりました。小規模の学校であり、クラスは1・2年、3・4年、5・6年、7・87年でひとつずつという複式学級で、ひとクラスの人数はおおよそ10～20人です。日本の小学1年がアメリカの小学1年にあたりますが、アメリカでは中学・高校になっても学年を数え直さず、通しで12年生まで数えます。その中で、子どもたちの学校は、１年生から8年生までをカバーし、また、幼稚園(Kindergarten)と保育園(Preschool)を含んでいます。我が家の子どもたちはそれぞれ、7年生、4年生、1年生に入学しました（次女について、学年を一つ落としました。こちらでは、子どもたちの成長に応じて、学年を落とす、上げるということがしばしば行われます。たとえば、早生まれの子は一つ落として入学させ、様子を見てスキップさせて戻す、などということが一般的になされています)。

アメリカでは州政府が教育行政を管轄しますので、義務教育の期間も州によって異なりますが、通常、幼稚園（アメリカでは1年間のみ。小学0年生とも呼ばれ、小学校への準備教育とみなされている）から高校まで、パブリック・スクールに無償で通うことができます。義務教育とは教育を受ける権利が保障されているということであり、そのためにパブリック・スクールが無償で提供される、ということのようです。学年の区切り方（たとえば、学区によって、小学校が５年生までなのか、6年生までなのかが違う）、年度の開始と終わりの時期（8月か9月に開始、6月に終了が一般的）、カリキュラム（教育内容や教科書を含めて）、学期制度（三学期制か四学期制か）などの実際の学校制度は、パブリック・スクールの場合は各学区に、プライベート・スクールについては各学校にゆだねられています。グランドラピッズのパブリック・スクールは行政区域に対応して幾つかの学区に分かれていますが、一般的に１～５年生までが小学校（Elementary school）で、幼稚園が付属します。6～8年生が中学校（Middle School）、9～12年生が高校（High School）になります。

我が家の子どもたちが通っているルーセラン・スクールの場合、幼稚園から8年生までの期間をカバーし、保育園も提供している、ということになります。長男はこの6月に8年生を終えて卒業し、8月末からポッターズ・ハウス・ハイスクールに通います。この学校は改革派系のクリスチャン・スクールです。「ポッター」は陶器師のことで、創造主なる神を意味します。ですから、「創造主の家」という名前の学校です。ポッターズ・ハウスにはほかにも小学校と中学校などがあり、全体では保育園（Pre-Kindergarten）、幼稚園（Kindergarten）、小学校（1～5年生）、中学校（6～8年生）、高校（9～12年生）という構成になっています。これらはプライベート・スクールであり、決して少額ではない学費が必要ですが、家庭の収入や子どもの人数に応じた学費の減免制度があることが一般的です。また、教会がクリスチャン・スクールに通う子どもたちのために学費を援助するファンド（基金）を持っていることが多く、教会は子どもたちをクリスチャン・スクールに送るよう親に熱心に勧めています。

我が家の子どもたちが通っているルーセラン・スクールはルーテル教会（ミズーリ・シノッドに属する教会）の運営する学校です。教派（シノッド）や地域の教会の連合体で運営するのではなく、教会員数にして300ないし400名くらいの一個教会が運営しています。驚くべきことに、多くのルーテル教会が同じように小規模な付属学校を運営しており、そのようなルーセラン・スクール（小・中学校）がグランドラピッズには10箇所以上あるようです。その卒業生の受け皿となる高校も用意されていますが、そちらは一ヶ所に集中させる方式がとられています。昨年、子どもたちがバスケットボールのチームに入ったことをきっかけに、試合のために幾つかの他のルーセラン・スクールを訪問する機会がありましたが、どの学校でもクリスチャン・スクールとしてしっかりした教育が提供されている様子をうかがい知ることができました。

生徒の人数は、保育園から8年生までの全体で100名余り、教師・スタッフの人数は20名弱です。複式学級でクラスの数は少ないのですが、保育園から8年生までをカバーし、クラスを補助する教師、チャプレン、事務員もいるため、教師・スタッフの人数は決して少なくありません。そして、非常に興味深いことですが、音楽や体育、美術などについては、パブリック・スクールから教師の派遣を受けています。このあたりがアメリカの学校の制度設計の興味深いところですが、プライベート・スクールは、自前ですべての教師をそろえなければならないのではなく、基本となるところを押さえておけば、必要に応じてパブリック・スクールのリソース

を利用することができる、ということのようです。教師が派遣されますし、学校として独自に提供できないがパブリック・スクールのものが利用できるということで紹介される教育プログラム、教材などがあります。ほかに、スクール・バスもパブリック・スクールのものが提供されています（そのため、プライベート・スクールには学区はないが、バスについては、学校の所在するパブリック・スクールの学区内のみでの利用に制限される）。

この点でホーム・スクーリングに少し触れますと、ホーム・スクーリングをしている子どもは、パブリック・スクールやプライベート・スクールに申し込んで、必要とする授業に部分的に参加したり、フィールド・トリップ（学外授業、遠足など）に参加したりすることができます。これは、パブリック・スクールは税金で運営されており、親は納税者であり、それゆえその子どもはそのリソースを利用することができる、という考えに基づいているようです。基本的に、パブリック・スクールのリソースは、だれでもが利用できるものとされているのです。そして、プライベート・スクールもそれに準じて、また、将来の生徒になる可能性もあるでしょうから、ホーム・スクーリングの子どもたちを積極的に受け入れることが多いようです。ほかにも、ホーム・スクーリングの子どもたちには、税金から教材を購入する費用やピアノや水泳などのレッスンに通う費用が補助されます。これも、納税者である親に対する還元としての意味を持つそうです（ホーム・スクーリングの子どもたちの分、パブリック・スクールは施設維持費、人件費などを減らすことができます）。

もう一つ、これは二年を過ごしてみて気がついたことですが、年度の終わりが近づくと、学校から、「来年もこの学校に戻ってくるか？」という問い合わせが来て、「戻る」と答えると、あらためて入学手続きの書類の提出が求められます。子どもたちが仲良くさせていただいている親の方から、「来年はどうするの？」と聞かれたこともありました。パブリック・スクールの場合は分かりませんが、プライベート・スクールの場合、審査はないものの、毎年、入学手続きが必要とされるようです。そして、少数ですが、実際に、引っ越しということではなく、別の学校に移る子どももありました。ですから、子どもたちも、友だち同士、「来年、また会えますか」と、年度末に話しています。その意味で、学校は一年区切りで考えられています。もちろん、継続して同じ学校に送る親が多いのですが、あくまで一年区切りで学校を評価し、検討した上で、継続して送っています。そして、送った以上、親には学校への貢献が求められ、学校の諸活動に積極的に参加しなければなりません。日本の学校以上に、アメリカの学校は親の参加が求められる行事が多く、とりわけ小規模なプライベート・スクールは、親の協力がないと成り立たないと言うことができます。

子どもたちの学校の場合、ルーセラン・スクールであり、ルーテル教会の信仰に基づいて運営されていますが、公同的な信仰に立つのであり、ルーテル教会に所属する子どもだけでなく、多くの信仰的立場に立つ子どもたちが通っています。カルヴィン神学校の多くの留学生が子どもたちをこの学校に通わせています。ほかにも、改革派・長老主義系の学校が多くあります。ローマ・カトリック教会の運営する学校もあります。これらの学校は、基本的に、その信仰に基づいて教育を施すという特色を打ち出して、生徒を集めています。また、ポッターズ・ハウスの場合、改革派を土台とするキリスト教信仰というだけでなく、マイノリティーの民族的背景を持つ子どもたちに教育機会を提供してきた歴史を持ち、ですから、民族的多様性を特色の一つとしています。ポッターズ・ハウスには、南米系、アフリカ系、またアジア系の子どもたちが多く通っています。長男の入学に際して、校長先生（フィリピンで宣教師をした経験

がある方）は、「新しく日本人を迎えることができて嬉しい」とおっしゃっていました。そのほか、現在のアメリカの数学教育に対して批判的で、インドネシア式の数学を採用することを特色とする学校があり、また、小学生の低学年から、ギリシア語・ラテン語を教えることを特色としている学校もあります。これは、何も神学者を育てようということではなく、英語の本当の習熟のためには古典語としてのギリシア語・ラテン語が必須であるという考えに基づくそうです。ほかには、難関大学への合格を目的とする勉強に集中する学校もあるようです。親たちは、そのような特色を考慮し、また、その学校の教育方針に賛同して、子どもたちをプライベート・スクールに送り出します。

日本に比べて、アメリカでは学校が非常に相対化されていると感じます。学校は、日本で感じられるような絶対的な存在ではありません。日本では、学校に通えないこと、不登校ということが、とても大きな問題に感じられますが、アメリカでは、そのような感覚はありません。何か問題があって学校に通えないとしても、学校はあくまで一年区切りであり、終わりがはっきりしています。パブリック・スクールから、一年だけプライベート・スクールに切り替えることができますし、ホーム・スクーリングに切り替えて、フィールド・トリップなどだけに参加させることもできます。一つのパブリック・スクールの中から別のパブリック・スクールに切り替えること、プライベート・スクールから別のプライベート・スクールに切り替えることもできます。この点で、日本で私立の小・中学校と言うと、厳しい受験を勝ち抜いてようやく入学できるところですが、アメリカでは、そのような意味での試験はありません。プライベート・スクールの入学審査は、おもに親の経済事情の審査です。我が家の子どもたちのように、3年生から、6年生から、といった途中の学年での入学も一般的です。プライベート・スクールやホーム・スクーリングのためにはある程度の費用がかかりますが、免除や補助を受けることができます。また、アメリカでは、家族が学校、職場、地域だけではなく、教会などの宗教団体、スポーツクラブ、あるいは民族的背景に基づく交流団体など、何らかの社会的連帯の中にあることが多く、子どもたちもたとえ学校で友だちができなくても、何かほかの場で友だちを持っていることが多いと思います。こういうわけで、学校に通えないということに対する切迫感はほとんど感じられません。

ホーム・スクーリングは、アメリカの場合、不登校に対応するため受動的にということではなく、むしろ、目的をもって積極的に採用することが多いと思われます。たとえば、北米キリスト改革派教会（CRC）の場合、子どもの通うことのできる範囲内にクリスチャン・スクールがない家庭に対して、キリスト教信仰に基づくホーム・スクーリングに取り組むよう奨励し、その家庭をさまざまな面で支援するよう各個教会に求めています。補助的な科目やフィールド・トリップなどはパブリック・スクールを利用しながらも、キリスト教信仰に基づく教育を施すために、ホーム・スクーリングを行うのです。一般的に、アメリカは国土がとても広大ですから、自分の求める教育観、教育方針にかなう学校が身近にあるとは限りません。その場合の手段として、ホーム・スクーリングが選択されます。ですから、ホーム・スクーリングの教材は内容的に比較的高度で、ホーム・スクーリングに取り組む親の社会的地位も比較的高く、収入もしばしば非常に高額であることが推測されます。それは、教育観、教育方針に基づいて積極的に選択するものであるからです。

以上、まとまりがありませんが、筆者の経験し、見聞きした中で理解してきたアメリカの教育事情について簡単にまとめてみました。誤っているところ、言葉の足りないところ、理解の足りないところがあるかもしれません。ご指摘

いただければと思います。日本の状況と単純に比較はできず、また、日本に持ち込むことも簡単にはできませんが、日本の現状を見つめ直す一助になればと願います。

日曜学校・教会学校訪問

# 徳島教会教会学校のご紹介

徳島教会教会学校教師会

## 1. 徳島教会について

徳島教会は、徳島市中心部にあり、佐古駅から徒歩6分、徳島駅からも徒歩15分と便利な場所にあります。

1951年3月野田辰夫先生により伝道開始されました。1967年4月に教会設立し、古口嗣郎先生が初代牧師として就職されました。1970年7月から2004年6月まで山崎謙二先生が牧会してくださいました。2005年7月に首藤正治先生が代理牧師として就職され、2007年に退職されました。3年間の無牧の期間を経て、2010年7月に片岡継先生が来てくださり、南アフリカよりの協力宣教師として、デベット宣教師（2012年1月まで)、ステファン宣教師が奉仕してくださっています。現在の現住陪餐会員は29名、礼拝出席者は35名くらいです。

## 2. 教会学校沿革

山崎先生のお子さんが小さいころは、たくさんの子どもたちがいて、教会学校も活発でしたが、その子どもたちが大きくなり、生徒が減ってしまいました。長老のお子さんが大きくなると、生徒がいなくなり、休校となってしまいました。山崎先生引退後、当時客員だった2人の子どもを生徒として、執事さん方が、礼拝後に聖書の学びをしてくださるようになりました。2005年7月から首藤先生が教会学校を担当、子どもたちの母親が補佐をするようになりました。2007年10月から長老が教会学校長として担当してくださるようになりました。首藤先生の案により、2006年度から教会員のために、クリスマスカードを教会学校で作成しています。現在では、イースターカードも作成していますが、広く会員外の方にも伝道を兼ねて差し上げています（昨年より大人の方にもイラストを募っています)。生徒が2人のみという期間が何年も続きましたが、教師は、長老2名・女性1名の3人体制となり、CS成長センターの「成長」を使用していましたが、大阪で教会学校奉仕をされていた姉妹が戻って来られてからは4人体制で独自のカリキュラム（アダムからイエスさままで系図をたどる等)で行っていました。

## 3. 教会学校現状

2012年から、ハワイ出身の3兄弟が出席するようになり、他にも3名加わって、生徒が8名と安定した学びをすることができていました。卒業や引っ越しなどもあり、現在は5名の生徒となっています。

(1) 教師4名

長老（校長)、片岡継牧師（2013年より)、女性2名

(2) 生徒5名

高3男子、中3男子、中1男子、小3男子、小2女子

(3) 陪席4名

ステファン宣教師、保護者、大2女子、2歳女児

(4) 時間

毎主日9時30分～10時

(5) テキスト

日本キリスト改革派中部中会教育委員会発行「日曜学校教案誌」

(6) 礼拝プログラム

開始前にゲーム等を行い、賛美、祈祷、パワーポイントを用いた学び（説教）を担

当教師により行っています。子どもたちに献金当番をしてもらい、感謝祈祷の後、主の祈りで終わります。

(7) 対外献金

2013年　アフリカ支援献金、仙台教会修改築献金

2014年　南アフリカの子どもたちへ献金、東北ヘルプ献金

(8) 2014年以降の行事等

原則として、第2主日に教師会を行っています。行事等のためにできないことが多いのが悩みです。

2014年4月から1回出席毎に魚の形（Jesusと書いてある）のカードを渡し、4枚溜まると、コインの形のカードと交換できます。夏祭りで使用（1枚で一つのゲームか食べ物に使用）することとしました。

イースター祝会でパワーポイントによる紙芝居「イエスさまものがたり」と賛美を実施しました。

8月は、ハッピー・キッズと合同で夏祭りを行いました。クレープ、焼きそば、射的、輪投げ、お菓子釣り、ヨーヨー釣りを行い、大人も含めて43名の参加がありました。子どもたちは各コーナーでお菓子やジュースをもらって、楽しそうでした。教会学校の生徒は各コーナーの担当もして、小さい子どもたちのお世話もしました。

12月のクリスマス祝会で、パワーポイント紙芝居「くつやのマルチン」（朗読劇）と賛美を行いました。

2015年4月の進級式で初めて記念品として聖書を送りました。子どもたちが、皆とても喜んで、大事に使ってくれています。

## 4. 恵み

子どもたちが成長するにつれ落ち着きも出て、聖書輪読がしっかりできるようになりました。学びの時の問いかけにも、年長者はすぐに答えてくれるようになり、聖書のお話が根付いていることがわかり、教師たちにとっても喜びとなっています。

音楽やイラストの賜物を持った中学生は、行事のイラストを描いてくれたり、礼拝のワーシップソングの箱ドラム（カホン＝たいこ）をたたいてくれたりしています。2015年3月には弟と一緒に、所属するミュージックスクールの発表会の中で、ゴスペルソング「君は愛されるため生まれた」を披露しました。スクール全員での演奏だったので、他の方々にも歌詞を覚えてもらえて感謝でした。そのスクールの先生が、イースター祝会でその兄弟が歌う「アメージンググレース」「君は愛されるため生まれた」などの伴奏をしてくださるなど、広がりを見せています。

## 5. 課題

生徒が契約の子どもたちのみですが、続けられていることに感謝しています。中高生になると、部活で日曜日に出席できないことも出てきています。家族で他の教会に出席される時があり、教会学校に生徒がいなくて、教師会に代わってしまう時もあります。

今後、ハッピー・キッズ（幼児クラス）から子どもたちを受け入れることも考え、連携をどのようにしたらよいか、教会全体で模索しているところです。

CS の様子

イースター祝会

夏祭りの様子

クリスマス祝会

夏祭りちらし

イースターカード

# 徳島教会 Happy kids

寺内実和（徳島教会信徒）

Mission Japanの多くの方々のサポート、また教会の皆様の祈りに支えられ、2010年8月22日〜11月15日まで約3か月間、南アフリカに滞在し、多くの恵みの中、すばらしい子供伝道の学びの時が与えられた。

## 1. 子ども伝道の学び

南アフリカでは、クリスチャンの中で、4歳から14歳までの間でイエス様の救いを受け入れる人の割合が85％と言われている。また15歳以下の人口の割合が南アフリカは34％、アフリカ全土では50％を占めている。そして何よりも神様の御心として、多くの方々が子ども伝道に重荷を持ち、その生涯を捧げている。多くの教会が子どもや若い青年達に目を向け、新しいミニストリーを始めている。また多くの教会で、年齢別に合わせたカリキュラムや教材を独自に作り、用いられている。しかもその年齢は、ほとんどは3歳位から。ある所では0歳から。小学生以上のCSしか見た事のない私にはとても衝撃的でもあった。でも聖霊なる神様は年齢の枠を超え、豊かに働かれる。例えば３歳から６歳の子ども達は大人よりも自然に信じる事ができ、また神様を認識する事もできるとも言われている。

そして子ども伝道で何よりも大切な事は、子どもたちと信頼関係を築く事。教会学校に来る子ども達は「まず初めに、自分の先生を愛する事を学び、次に自分の愛する先生の聖書を愛する事を学ぶ、そして自分の先生の神様を愛する事を学ぶ。」もし先生が子ども達に愛されなければ、後には何も続かない。子ども達は繊細で、鋭く、そしてとても正直である。私の子ども伝道の学びは、子ども達の特性をよく知る事、そして自分自身をよく知る事。自分と神様との関係を深く考える事から始まった。私の今持っている心の傷や神様やイエス様に対する考え方など、すべてが子ども達に投影されるのだ。だからこそ神様と日々よい交わりを持ち、御言葉により愛・恵み・いやしを経験し、霊肉共に健全である事が何よりも大切だという事を知った。そして子ども達との関係作りのキーワードは「遊び」とも言える。遊びは子どもの言葉。そしてコミュニケーション手段。子ども達の世界は遊びでできている。遊びを通して、人を信頼し、心を開き、言葉を発するようになる。南アフリカのプレトリアの一番大きな教会モラレタパークの子ども伝道（1年に600人程の子供達を導く）に携わるスタッフの方が言われた「子どもにとって教会は楽しい所でなければいけない。」という言葉が印象に残る。遊びや制作活動をうまくカリキュラムに取り込み、大人達が1時間半程礼拝を守っている間、子ども達は喜んでＣＳを受けている。　又メッセージも年齢ごとの子ども達の特徴を捉え、字のない絵本で知られる、金（神様）黒（罪）赤（イエス様の十字架の購い）白（清め）緑（成長）を基本としたわかりやすい聖書の学び方を取り入れ、視覚教材や五感を用いた記憶しやすい物になっている。

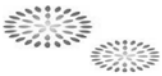
## 2. 学びの実践
### 〜徳島教会での子ども伝道の歩み〜

私が南アフリカへ訪問する前は、小学校の子ども達へのミニストリーに携わる事が多く、その学びを期待して望んだのに、現地に行き、一番多く学ばされたのは、幼児―就学前の子ども達のミニストリーだった。そして帰国後、教会にいる幼児といえば、宣教師夫妻の子ども達2人。学んだことを実践するにも……と不安を

抱えつつ、宣教師夫妻と共に2011年9月から幼児向けの礼拝を開始した。求道者の子ども（4歳）も加わり、宣教師夫妻の子供たちの3人のために、南アフリカから持ち帰ったテキストを翻訳し、礼拝と同じ時間帯にCSルームを借りて行ったが、最初は子ども達も集中せず、騒音も気にしつつ、試行錯誤しながらの実践。子どもたちの好きな歌、ダンス、ゲーム、お話、工作、そして沢山の視覚教材を用いて行っていくうちに、少しずつでも子ども達の成長が見ることができ嬉しかった。でも半年後その求道者親子の突然の引っ越しがあり、また宣教師家族との礼拝となった。そして自然な流れで宣教師夫妻の子ども達の英語教育も考え、南アフリカのテキストを翻訳せずそのまま用いるようになった。そして同じ頃、3人の外国の方が教会に送られ、スタッフとして加えられた。子どもたちは2人にスタッフ6名という時もあったが、時間と共にどんどん英語に興味のある求道者やクリスチャンの親子が徳島教会に送られるようになった。そしてHappy kidsという名前で本格的に英語と日本語訳での幼児礼拝が月2回継続して行われるようになった。

### 3. 現在のHappy kids

帰国してから4年半……神様のなさることは時にかなって美しい。今は神様の計画の素晴らしさや、自分の思いを超えて、神様は何よりも必要なものを与えてくださる事がわかる。教会の方々にも子供伝道に対する思いが与えら

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Happy kids<br>Calendar<br>2015 | Date: 18th Jan<br>Theme :<br>Unwrapping the Greatest Gift<br>No lunch | Date: 1st Feb<br>Theme : Valentine story<br>The place where love grows<br>We have lunch | Date: 15th Feb<br>Theme:<br>Created by love<br>No lunch | Date: 1st March<br>Theme:<br>God is looking for you<br>We have lunch | Date: 15th March<br>Theme:<br>God's tears<br>No lunch |
| Date: 28th March<br>Happy kids Easter<br> | Date: 5th April<br>No Happy Kids.<br>But please join an Easter celebration at Tokushima Church<br>We have a special lunch | Date: 19th April<br>Theme:<br>Count the stars<br>No lunch | Date: 3rd May<br>Theme:<br>No Happy kids | Date: 17th May<br>Theme:<br>The Gift of Laughter<br>No lunch | Date: 7th June<br>Theme:<br>Here I am<br>We have lunch |
| Date: 21 s t June<br>Theme:<br>Climbing up<br>No lunch | Date: 5th July<br>Theme:<br>Surprise Gifts<br>We have lunch | Date: 19th June<br>Theme:<br>Ten Love rules<br>No lunch | Date: 2nd Aug<br>Holiday<br> | Date: 16th Aug<br>Holiday<br>  | Date: 6th Sep<br>Holiday<br> |
| Date: 13th Sep<br>PM: Picnic<br>No lunch | Date: 20th Sep<br>Theme:<br>The Red Rope<br>No lunch | Date: 4th Oct<br>Theme:<br>The little Things<br>We have lunch | Date: 10th Oct Sat<br>Open Church<br> <br> <br>(Concert .<br>Café& Bazaar) | Date: 18th Oct<br>Theme:<br>Looking at Things Inside Out.<br>No lunch | Date: 1st Nov<br>Theme:<br>Bowing down<br>We have lunch |
| Date: 15th Nov<br>Theme:<br>Tuming Around<br>No lunch | Date: 6th Dec<br>Theme:<br>The Gift<br>We have lunch | Date: 12th Dec Sat<br>Happy Kids<br> <br>Christmas | Date: 21th Dec<br>No Happy Kids.<br>But please join the Christmas Service at Tokushima Church<br>We have a special lunch | | |

カレンダー

れ、何もない状態であっても、神様を信じて一歩踏み出す時、神様は必要な場所、人、アイデアさえも与えてくださる。そして今は10畳ほどのCSルームに溢れる程の親子が集まっている。第1,3日曜日のHappy Kidsには20〜30名ほどの親子が、そしてイースターやクリスマスのイベントの時には60名〜70名ほどの親子が集まる時もある。南アフリカでの学びは豊かに用いられ、持ち帰った3冊のテキストを経て、今年の1月からは、新カリキュラムとしてAnne Voskamp著のイエスキリストの系図に沿った旧約聖書の学びである「Unwrapping the greatest Gift」を参考にし、Eicon Bible art 社のパワーポイントを使用し、聖書のメッセージ、聖書の中の言葉を用いたアルファベットの発音レッスン、メッセージに関連した歌やゲーム、工作など。多くの子どもたちがHappy Kidsを楽しみにしてくれており、またノンクリスチャンの保護者の方々も少しずつ聖書に興味を持ってくれている。持ちよりの食事会を通して、教会のメンバーや他の保護者の方との交わりも豊かなものになってきている。昨年は土曜日のイベントとして夏祭りやオープンチャーチなども行った。Happy kidsに定期的に来ているお母さん方がその友人を誘ってきてくださったり、オープンチャーチのバザーや展示会に積極的に出品し、喜んで参加してくださったりと、教会の垣根も低くなりつつある。その保護者の方々が今後教会の礼拝に益々繋がり、救いにあずかること、そして幼児の子ども達が主を愛し主に愛される子どもとして成長して、教会のCSにも繋がってくれることを期待しつつ祈っている。

イースター

クリスマス

絵本に心を耕されて

# 「ありがとうのえほん」

（作／フランソワーズ・訳／なかがわ　ちひろ・偕成社）

望月鈴子（浜松伝道所信徒）

浜松伝道所では、絵本に関心のある方や子育て中の方々を対象にした“絵本塾・おはなしのへや”という集会を月に一度開き、幼子と一緒に遊んだり、子育てや自分育てについて語りあっています。今年の1月の例会で取り上げたのがフランソワーズの「ありがとうのえほん」で、語り合いのテーマは「ありがとうをいっぱい言いましょう」でした。

朝目覚めた時に「ありがとう」の気持ちで起きると、一日の始まりはきっと気持ちがいいだろう、夜のおやすみに「ありがとう」の気持ちで床に入ると穏やかに眠ることが出来るに違いない、なによりも「ありがとう」の気持ち・心・言葉がいっぱいあるところには優しさ・労わり・思いやりなどが満ちているだろう……と単純に考えていました。新年に当たり、「絵本塾・おはなしのへや」に集う方々のこれからの一年の歩みが、「ありがとう」の言葉に取り囲まれているといいなと思って選んだ絵本、決めたテーマでした。

ところが、このフランソワーズの「ありがとうのえほん」は、わたし自身がとんでもない思い違いをしていることをはっきりと示し、とてつもなく大切なことへの気づきを与えてくれました。その気づきは、「ありがとう」の対象は、創造主でありつつ、独り子を人間の罪からの救いのために遣わされた神さまであり、父である神さまの御心をよく知って、十字架上に死んでくださったイエス様であるということです。

「ありがとう」の言葉がスッと出てくる人もいれば、素直に言えない人もいることでしょう。

言葉に出さなくても目で、雰囲気で「ありがとう」を表しているかもしれません。「ありがとう」の言葉はどんな状況の時、どんな場面で発せられる言葉でしょうか。何か品物をいただいたとき、何かしてもらった時など、自分にとって益になるような事柄の時、場面ではないかと思われます。喜びや悲しみの時を共に過ごし、寄り添ってくれる心には、言葉に表しきれない「ありがとう」があるでしょう。人が“よかれ”と思ってしてくれたことでも、そのことを受け入れてなかったり怒りに満ちている心には、当然「ありがとう」の心も言葉も生まれません。

「ありがとう」について想いを巡らし、何冊かの絵本をめくって「ありがとう」がどんな時に言われるのかなと探してみました。そして気づいたのは、「ありがとう」は究極的には〈命〉の源であるお方・創造主への感謝の言葉だということでした。

フランソワーズの「ありがとうのえほん」は、朝の目覚めの時の「ありがとう」から始まり、夜、眠りにつく前の神さまへの「ありがとう」

のお祈りで一日が閉じられています。パステルカラーの柔らかい色合い、単純でやさしく、美しい響きの言葉が、頑なな心を柔らかく溶かしていくような感じで、「ありがとう」がスッと心の中に入ってきます。

コケコッコー！
おはよう　おんどり
ありがとう
きょうも　ぱっちり　めが　さめた
あさごはんには
ゆでたまご
かわいい　めんどり
ありがとう

にこにこ　おひさま
ありがとう
ぽかぽか　おてんき
うれしいな

ありがとう
きれいな　おはな
ありがとう
やさしく　うたう　ことりたち

こんなに　すてきなものを
いっぱい　くれた
かみさま
ほんとに　ありがとう

フランソワーズは、〈わたしのせかい〉をささえてくれる〈命〉あるものへの「ありがとう」の世界をあたたかく、穏やかに、またやさしく紡ぎだしています。人の手が作り出した物ではなく、創造主である神さまが〈命〉を吹き込まれたものによって私たちは養われ、育てられていることを「ありがとう」の言葉は示していました。勿論、神さまが人に与えられた知恵、知識によって産み出された技術、文化などあらゆる良きものを享受して私たちは生活していきます。しかし、人の手によって産み出されるものの全ての源は創造主にあります。今更ながらなのですが、「ありがとう」の言葉は、究極的には命の源である創造主・独り子イエス様を罪に満ちたこの世にお遣わしになった神さまへの感謝の言葉だと気づかされたのでした。

ハイデルベルク信仰問答の序の部分で、わたしの生死を貫いて希望をとなるただ一つの慰めは、体も魂も真実の救い主イエス・キリストのものとなっていることだと教えられます。更に、ただ一つの慰めの中に喜びに満ちて生き死ぬためには、わたしの罪と悲惨の大きさを知り、罪と悲惨から救われる道を知り、キリストのものとなったわたしはどのように感謝して生きるのかを知ることであると教えられます。そして第三部・感謝について　で救われてイエス・キリストのものとなった者たちが、全生活にわたって感謝の生活をする道が具体的に示され、教えられています。こんなにはっきりと神さまに感謝して生きることが教えられているのに、わたしの普段の生活が、神さまへの感謝の意識にしっかりと立っていないことを「ありがとうのえほん」は露呈したのでした。

「ありがとう」は〈わたし〉〈この世〉に命を与え、イエス様を与えて愛して下さる神さまへの感謝の言葉。私たちの日々の生活は、「ありがとう」よりも不平や不満がとめどなく噴き出す状態になりがちですが、キリストのものとなった私たちは、心を神さまへの「ありがとう」の思いで満たしましょう。神さまへの「ありがとう」が満ちているところでは、何よりも神さまの「愛」を満ち満ちて感じることが出来るのではないかと思います。　(望月鈴子)

教師の声

# 主イエスに導かれて

渡辺史朗（名古屋岩の上教会信徒）

名古屋岩の上教会の渡辺史朗と申します。この度、相馬伸郎編集長より「教師の声」の執筆依頼をいただきました。感謝をもって筆をとりましたが、このテーマの主旨と異なるものを記してしまったかもしれません。主イエスに捉えられたひとりの奉仕者の「声」として受けとめていただければ幸いです。

私は、小学1年生のとき母につれられて教会に初めて行きました。教会は自宅から徒歩で15分程のところにありました。玄関に入るとすぐ礼拝室という、小さな教会堂でした。私も慣れてくると日曜学校（子どもの教会）にかよいました。司式、奏楽、説教は多くの場合、牧師婦人がなさっていたように思います。B紙に書かれた賛美歌をめくりながら大きな声で賛美していた先生の姿をよく覚えています。紙芝居もとても新鮮でした。誕生日会には「生まれる前から」を賛美しました。しばらくして、私が初めて真新しい新約聖書、子ども賛美歌を手にしたときの喜びは今でも覚えています。何か勉強している気分……そんな感じが嬉しかったのを覚えています。礼拝式後には聖句付きのカードを毎週いただきカード帳に貼りました。糊でガビガビになったカード帳は礼拝出席の励みとなりました。しばらくは大人の礼拝式には出席せず帰宅するのが常であったように思います。帰宅途中は、今ではお目にかかれない、セスナ機での空中宣伝がガンガンかかっていた時代でしたから、私にとって礼拝とともにこれを耳にするのが日曜日の午前中というイメージでした。ときには大人の礼拝式に出席し、とにかく静かにしていないといけないと思っていました。そのうち礼拝の順序を覚え、「ここまできたら、もうすぐ終わるな」と思って過ごした礼拝時間でした。小学校6年の頃でしたか理由はわかりませんが母とともに他教派の教会へと変わっていました。この教会は駅前の本屋の2階にありました。以前の教会よりは広く感じました。そこでの分級の時間は、教会を離れ自転車で牧師宅まで行きました。当時は男性教師と男子3,4名のクラスでした。紙に印刷された讃美歌を賛美したのが印象的でした。なぜだかわかりませんが、今でもこの情景は明るく楽しいものとして心に残っています。食べたり、ゲームしたりしたことはありません。ただただ、男子数名が床に座り膝を付き合わせてモソモソとした分級が忘れられないのです。その後、この教会は痛みを抱え種別変更をし、「伝道教会」として新たな地で歩みが始まりました。

私は1985年4月、19歳のイースターに受洗しました。洗礼入会式に際、証をさせていただきました。母の涙に私も涙。止まりませんでした。本当に委ねることのできる主イエスがおられる。それを知った喜びでした。受洗後まもなく私は中学科の補助教師として働きを与えられました。

1987年6月第4主日、私にとって忘れられない出来事が起きました。この日は講壇交換日で交換先の牧師が早朝からお見えになっていました。当日、私のクラスの主任教師が欠席となったため急遽私が代役として分級を務めることとなりました。そのような事情があり講壇交換の先生が私どもの中学科に陪席してくださいました。分級は賛美、説教の感想、まとめの意味で「成長」ワークブックを使っていました。ワークブックを進めているうちに先生は言われまし

た。「渡辺さん、それはシモベと読むのではないですか？」私はすぐに意味が分かりました。「僕」という字を「ボク」と読んでいたのです。しかも何度も連呼していました。実を言いますと私はこの日を迎えるまでに全くの予習をしていませんでした。「なんとかなる」という思いが強かったのです。それにしても「シモベ」を「ボク」と読み間違えるか？ 教師補助者とか若気の至りでは済まされない……。自分がまるで「先生」のように語っていることがありえない。陪席していただいた先生には私の準備態度がどのようなものであったかわを悟られてしまったな……。この時ばかり心底、自分が情けなくなり脚のほうからズルズルと穴があったら入りたい思いでした。その後は、フェイドアウトするように声も小さくなりどのように締めくくったかも覚えていません。その日はずっと後悔です。そして、その後悔の仕方が、誠にタチが悪かったのです。自分の体裁ばかり気にしていました。こんな自分なら「先生」と呼ばれる存在ではないから、担当を外してもらおうと考えていました。子どもたちにも申しわけない。そんな思いがいつまでも続きました。神に目をむけることをせず、自分のことだけを考えていました。私は、この経験を通して「教師」という立場、主に仕える奉仕、そして何に向かって語り、準備しているか。様々なことを学びました。この体験は今でも教案誌を開くと鮮明に思いだします。今思いますとこのことがあったからこそ、私は緊張感をもって奉仕に与らせていただいていることを思います。しかし、それでも常に完璧というわけではありませんが、主イエスの声として今も響いいています。

私は今年で50歳を迎えます。人間的に振り返れば紆余曲折な教会生活だったかもしれません。名古屋岩の上教会に加入して14年目です。それまでは制度的に整えられた「教会」という経験がありませんでした。会員数、十数名の群ればかりの教会生活でした。

しかし、振り返れば私は、心の底から「嗚呼この教会生活で本当によかったな！」と、文章を読まれている方に申し訳ないほどに思っています。なぜなら、私の教会生活は、冒頭の「日曜学校」から始まり現在の「子どもの教会」の奉仕に至るまで、主イエスがいつもいてくださったことを実感できるからです。その生活はとにかく暖かい道のりでした。私が、「教師」として子どもたちに話すことができることは、この言葉に出来ないほどの主イエスとの歩み、温もりを子どもたちに伝えることです。子どもたちの前に立つときは、まず自らの悔い改めと御言葉の福音にふれて喜びを噛み締めることから始めています。思うように行かない、失敗のほうが多分多いです。しかし、そこからまた、教えられ励まされ、気づきをいただきながら奉仕を捧げられています。再度申し上げますが、これまでの子どもたちとの歩みは私にとって宝物であります。本当にこのような人生でよかったと主イエスに心から感謝したいものです。

私が「教師の声」として最も伝えたいことは、主イエスが与えて下さった生活は、これほどにも素晴らしく、あたたかな交わりの教会生活を備えてくださるということです。主イエスに従う道を子どもたち教会員のみなさまと歩めましたことを、最大限の喜びと神への感謝とさせていただきます。

教師の声

# 教会そして教会学校について

齋藤厚子（浜松伝道所信徒）

教会の歩みは教会学校の歩みです。

浜松教会の歩みを見ると、神様の御手の中にあり神様の御業を感じます。今もこの地に浜松教会があることは神様のご計画です。心から感謝致します。

1971年、浜松教会が現在の場所に建てられ植木牧師が牧会をされていた当時、教会学校は開かれ子供達の声が響いていました。その後は、根来牧師、安田牧師と牧師家庭の子供たちが核となり、教会学校が開かれていました。しかし、2002年3月に安田牧師が浜松教会を去られた後、2004年8月に金牧師が来られるまでの間、浜松教会は牧師不在の教会となります。この時代は教会には子供の姿は無く、教会学校もありませんでした。信徒の数も少なく午後に行われる礼拝を守ることが第一でした。
また牧師不在という事で、人間的な思いで教会が流されないように、礼拝後に説教の分かち合いなどをして御言葉中心となるように教会生活を守ってきました。

2004年に金牧師が来られてから再び教会が教会として動き始め、それと同時に教会学校も再開されました。金牧師から、「礼拝を第一とし、御言葉を深く学び、御言葉を中心として霊的交わりの中でお互いを愛し合い、共同体として教会生活を行っていくこと。そして日曜日だけでなく毎日が教会生活である」という事を教えていただきました。毎週礼拝後、皆で昼食の交わりを持ち、午後には御言葉を学びあう。教会全体で、近隣への伝道や教会学校などの奉仕を行っていました。

この間、神様は未信者の子供達を浜松教会へ送ってくださいました。この子供達は今も引き続いて教会学校につながっています。また教会員の結婚・出産で子供達が与えられ教会に子供の声が響いていました。

しかし、2011年金牧師が浜松教会を去る時が来ました。今度はいつ牧師が与えられるのかわかりません。そんな中、伝道所委員会から、牧師不在の間の教会学校について問われました。

私は、一人でも子供がいるのならば、たとえもしその一人の子が教会学校礼拝に来られない日があったとしても教会学校の門は閉じるものではない。教会の門＝教会学校の門は開かれているものだと考えていました。私一人がそのように思っていても教会学校はできるものではありません。祈りながら他の2名の教師にも相談したところ2人とも同じ信仰でした。そこで教師側から、伝道所委員へ教会学校を続ける意思を告げ、それと共に委員含め教会員の方々へ、教会学校奉仕の協力をお願いしました。

無牧の教会の主日礼拝は、中部中会の他教会の牧師が礼拝を終えてから浜松に来てくださるため、午後2時半に始まります。教会学校は午後1時からにしましたが、教師・奉仕者・子供も含めて11時に教会へ集まり、教会学校礼拝の説教箇所の黙想会を行い、子供達と共に昼食を取り、また遊んだりして交わりの時を持ちました。

その後2012年5月に望月牧師を迎え、再び牧会者がいる教会となりました。引き続き信徒同士の霊的交わり・奉仕は続いています。また次のステップに成長するため、教会設立などについて望月牧師より学んでいます。子供達の元気な声も響き渡っています。今年は墓地取得が叶

えられ、また新しい試みとして「絵本塾・お話の部屋」を月1回開いています。浜松教会はこの地で、今も神の国の完成を目指して成長途中です。

私は、この証を書くにあたって浜松教会の歩みを振り返ってみた時、この御言葉を思い出しました「何よりもまず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」。(マタイ6:33)

すべては神様のご計画です。確かにその通りですが、この世で教会を守り続けていく為に、信徒は神様に対してすべきことがあります。まず神の国と神の義を求めることです。すべては神様の摂理だと信頼し感謝し、主日礼拝を守りそして毎日を神様の子共として歩む事です。そして神様の子供として歩むということは聖書からイエス様の姿を学ばなければ歩めません。また主日礼拝も形式的に礼拝を守るのではなく、心から神様のみを追い求め、悔い改めて神様の元へ立ちかえり感謝する、そのような礼拝を捧げる事だと思います「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を神よ、あなたは侮られません」。(詩編51:19)

浜松教会の歩みの中で、霊的に弱まり、気が付かないうちに神様に背いたことや罪を犯したこともあったかもしれません。しかし神様のとりなしの祈りの中で、浜松教会は、神の国と神の義を求める信仰の灯を消すことなく、灯を次世代へ次世代へと繋げていきました。神様はこの浜松教会の姿をご覧になり、心にとめて下さり憐れみをもって多くの恵みを与えて下さったのだと思います。感謝をもってこの恵みを受け入れ、信仰の灯を未来に繋げていくように、祈りながら歩んでいきたいと思います。

「わたしたちの主、救い主イエス・キリストの恵みと知識において、成長しなさい」(ペトロⅡ3:18)

最後に個人的な事になりますが、私は子供達に「救い主イエス様を伝えたいっ!!」という強い思いがあります。それは教会学校に対する経験があるからです。

私は未信者の家庭で生まれましたが、幼稚園から小学校3・4年ぐらいまで日曜学校へ通っていました。そこは教会ではなく公民館でした。どこの教派なのか、そして牧師の名前も憶えていません。(1970年代です) 私にとってこの公民館で開かれた日曜学校の思い出は、「罪・イエス様の十字架上での死・主の祈り」この3つです。他は何も覚えていません。

その後私は教会から離れましたが、折に触れ「罪とイエス様の死、主の祈り」が心の片隅に浮かびあがりました。それだけこの3つは強烈に私の心の中に残っていたのです。

30歳を過ぎたころ聖書を学びたいと強く思い教会へ行きました。ルカ8:42～の長血の女の箇所を学びました。長血の女が絶望の中、病を癒してもらいたい一心で、必死にイエス様の服の裾に触った途端、体が軽くなり病が治ったことを感じ嬉しくなった。それと同じように私も荒れ果てて枯渇した私の心を、直して欲しいその一心で教会へ行き、御言葉に触れた途端、私の心が軽くなり嬉しくなった。

その時感じたことは、「イエス様は、ずっと私の側にいてくださったのだ！」という嬉しさでした。

私はイエス様を拒否し続け、見ようともしなかった。しかしイエス様はずっとそばにいて下さったのだと。このイエス様の愛の大きさ深さ広さ……再びイエス様と出会えた事は、あの日曜学校の3つ思い出があったからです。

子供の心はとても柔らかです。イエス様と共に歩む人生がどれだけ心強く幸せなことか、そしてどれだけ大切なことか。私達は知っています。だから何よりもまず、救い主イエス様の愛を子供達に伝えていきたいと願うのです。

これからも私自身が、まず神の国と神の義を求め続けるように祈りながら奉仕をしていきたいと思っています。

# 子どもメッセージ

保田広輝（長丘教会信徒・神学校聴講生）

**【自己紹介】**

24歳の保田広輝です。

改革派 長丘教会の会員です。

デュシェンヌ型筋ジストロフィーという治療法のない生まれつきの難病を抱えています。

寿命は残り10年と余命宣告されています。

手の指以外は動かせない身体で、電動車椅子と24時間ずっと人工呼吸器を使いながら生きています。

余命宣告を受けた難病の人生を通して、講演会や教会の集会などで、難病の人生で豊かにあらわされる神様の愛について、「命」そして「生きる」ことについて、まっすぐな想いを語ることをライフワークとしています。

**【説明】**

園田教会の5月24日の主日礼拝の中で、通常の礼拝プログラムの子ども説教の時間に、子どもたちの前で5分ほど証しを話しました。

なるべく子どもたちの目を見ることや、子どもたちに車椅子と人工呼吸器を観察してもらえるように心がけました。

みんな、こんにちは。

はじめまして。

僕は神学校で勉強している24才の保田広輝と言います。

みんな、僕の体を見て、どう思うかな？

(ひとりひとりの子供の目を見る)

僕はね、筋ジスっていう病気なんだよね。

僕はみんなのように歩けないし、親指しか体が動かないから、車椅子に乗ってるの。

ただの車椅子じゃなくてね、こんな風に親指だけで動かせるんだよ。

（ここで電動車イスを少し動かす）

あと、僕はね、呼吸ができないんだよね。

みんなは鼻から、口から、空気を吸って呼吸ができるよね。

呼吸ができないと、人間は死んでしまうの。

僕はみんなのように呼吸ができないから、呼吸を助ける機械を使って（ここで子供たちに人工呼吸器を見せる)、こうやって呼吸をしているんだよ（下記の写真)。

僕は手が親指しか動かないから、服の着替えもトイレも、人にしてもらわないと何もできないし、ご飯も人から食べさせてもらわないといけないんだ。

みんな、僕のこと、赤ちゃんみたいと思うかもね～。

僕は生まれた時から病気なんだよね。

小さい頃は、みんなのように元気だったけど、病気のせいでね、こういう動かない体になったの。

僕はみんなのように元気じゃないし、親指しか動かないから、とても辛かったんだよね。

なんで神様、僕をこんな病気にしたんだ！ みんなのように元気になりたい！ 歩きたい！

着替えもトイレも食事も、自分で出来るようになりたい！ ってね。

病気を治してください、助けてください、何年も神様にお祈りし続けたんだ。

でも、どんどん病気は悪くなって、僕はあと11年で死ぬってお医者さんから言われてしまったんだよね。
本当に、すごく辛かったよ。
この時に、僕は神様から愛されていないんだ、僕は神様から捨てられたんだ、って思ったんだ。

でも、日曜日はいつも教会に行って、毎日ね、聖書を読んで、お祈りしていたら、「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。」っていう聖書の言葉を通して、心の中で、神様が僕にこう語りかけてくれたんだよね。

「あなたが生まれる前から、神様があなたを病気の人生に選んでいたよ。だから、どんなことがあっても大丈夫！ あなたは病気の人生にチャレンジしていけるよ！」って、心の中で神様が語ってくれたんだ。

そしたらね、辛い気持ちがすべて無くなって、僕は前向きに生きていけるように変えられたんだよね。
この時に、僕は神様から愛されているんだ、病気の僕は神様の失敗作じゃないんだ、って思ったんだよね。

こんな動かない体の僕が、あと11年で死ぬ病気の僕が、神様を信じて、前向きに明るく生きていくことで、神様の素晴らしさをみんなに伝えていけるんだ、と思えるようになったんだ。

僕は病気の体であることが、すごく辛かったのに、神様の言葉で、生まれ変わったように前向きになれたから、不思議だなぁと思う。

すごく辛いことがあってもね、日曜日はいつも教会に行って、毎日、聖書を読んで、お祈りしていれば、心の中で神様が語りかけてくれる。聖書の言葉を通してね。そして、神様が語りかけてくれたら、辛い気持ちが無くなるってこと、を今日みんなに覚えてほしいです。

じゃあ、お祈りしましょう。

僕たちの神様。
すごく辛いことがあっても、僕たちは神様の言葉で生まれ変わることができます。
どんな時も神様は僕たちのそばにいてくれるんですね。
本当にありがとうございます。
すごく辛いことがあっても、僕たちが神様から離れないで、これからも神様を頼りにして生きていけるように導いてください。
イエス様のお名前でお祈りします。アーメン

教会学校教師のための神学講座

# 全生活にわたる感謝～「十戒」を生きる (3)

吉田　隆（甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

## 5. 神の名前（第三戒）

### 第三戒

「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれない。」

### 名をあらわす神

出 3:14,15、34:5、ヨハネ 17:6、詩編 83:19、イザヤ 12:4、エレミヤ 33:2。

あなたのお名前は何ですかと問うたモーセに、神は「わたしはあるという者。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主」と、御自分の名を明らかにされました。ところが、その“主”という名をみだりに唱えてはならないという戒めを文字通り守っているうちに、元々の発音それ自体がわからなくなってしまったというお話は有名です。YHWH という四つのヘブル文字で表された聖四文字（テトラグラマトン）を、今日、多くの学者はおそらく“ヤーウェ”と発音するのだろうと考えています。

しかし、本当に使ってはならないような名前であれば、神様は御自分の名を決して明らかにはされなかったことでしょう。名をお知らせになったのは、御自分を私たちに知らせようとなさったからであり、むしろ私たちがそれを用いるためなのです。大切なことは、その名前や発音が何かということではなく、それを「みだりに（＝むなしく）」用いないということ。逆に言えば、神様の御名を正しく生き生きと用いることなのです。

### 神のリアリティー

申命 4:7、28:58、詩編 75:2、イザヤ 50:10、エレミヤ 23:24、マタイ 12:34、ヤコブ 3:2 - 12、レビ 24:11。

名は体を表すと言われますように、名前はその人全体を表すものです。たとい本人がいなくとも、名前を聞いただけでポッと赤くなったり震え上ったりするのは、最たる例です。逆に、他人の名前を冗談に使うのは、その人自身をおとしめていることにほかなりません。つまり、「神の名」とは、神に属するすべてのこと・神の御存在そのものということです。そして、その御名を軽々しく口にするということは、要するに見えない神に対する畏れの欠如ということなのです。

それは、神のリアリティーの問題と言ってもよいでしょう。しかもそれは、礼拝といった特別な時や場所の問題なのではない。私たちが「唱える」という、極めて日常的な場面における私たちの心の姿勢の問題です。なぜなら、心にあふれていることを口は語るものだからです。口の罪ほど軽々しく犯されやすい罪はありません。この戒めに、あえて「罰せずにはおかれない」という威嚇の言葉が加えられているのは、そのためでしょう。

人が見ていない時、誰にも気づかれない場所で、私たちがなおも神の御前にいるとの信仰をもって歩むことができるか。そのことが問われています。

### 主の名を呼ぶ

ウ大 112、創世 4:26、詩編 50:15、ヨエル 3:5、マタイ 1:21、使徒 4:12／マタイ 6:9、ヨブ 1:21、ヨハネ 16:24、詩編 8:2、63:7、ヘブ 13:15／申命 6:13、使徒 18:18／ウ大

113、エフェソ5:4、マタイ5:16、7:21、10:32,33、ロマ1:16、黙示3:8、ヤコブ2:7。

ただ漠然と神がいるというのと、名前のある神がおられるのとでは、存在感が違います。他とは区別された二人といない特別な存在となります。さらに、そこに呼びかける者との人格的な関係も生まれます。わたしはあなただけに名を明かした「あなたの神、主」なのだから、他の名を呼ぶな、わたしの名を呼べ！ とお命じになっているかのようです。

主の御名を呼び求めるのは、告白や賛美や祈りや誓約など、神の御臨在を特に喚起する必要のある場合。あるいはまた、真理や愛や正義や誠実さなど神の御性質を表す必要がある場合です。そうして、神の名と神に関わるすべてのことを、思いや言葉や行いを通して、神の栄光のためと私たち自身や隣人の幸せのために用いるのです。

**【告白】** 主の御名を告白することは、人類最初から、礼拝行為そのものでした。しかし私たちの主は、御自ら「苦難の日にわたしを呼べ」と言われます。それは、私たちが救われるため、悲しみから立ち上がるためです。私たちの主は、その名も“イエス（＝救う者）”と神によって命名された方です。私たちが救われるべき名は、天下にこの名のほかにはありません。すべて主の名を呼ぶ者は救われるのです。

**【賛美と祈り】** 「御名をあがめさせたまえ」と祈るように、主はお教えになりました。御名を賛美することが、人間の究極の姿であり幸いに他ならないからです。順境の時も逆境の時も、どんな時でも万事を益としてくださる主が共にいてくださることを信じればこそ、私たちは御名をあがめるのです。

そればかりか、主は、何事であれわたしの名によって祈れとも言われました。主イエスによって、私たちが神の子どもとされたからです。罪に汚れた私たちの祈りが、主の御名のゆえに、香りよき捧げ物として聞き届けられるのです。昼も夜も、御名によって願いましょう。「そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる」。

**【誓約】** 誓約自体を、聖書は必ずしも禁じてはいません。しかし、洗礼式であれ結婚式であれ、およそ“神と教会の前で”誓うことは、まさに神の御前で誓っているのだということを覚えるべきです。礼拝の場であれば、なおさらです。誓約という行為は、その場限りのことではありません。むしろその後の生活全体において、誓約の姿勢が貫かれているかが問われます。

**【生活】** キリスト教の用語や儀式がギャグや冗談の種となることは、日本のような異教国でもよくあります。それらは往々にして、元々の性格をゆがめ、自分たちのレベルにまで神を引き下げる世俗主義の現われです。

他方で、御名を厳粛に唱えることが敬虔さの証になるわけでも親しく呼びかけることが不敬虔なわけでも、必ずしもないのです。私たちの神は、ユーモアを解さない方ではありません。要するに、主の御名をどう用いるかは、その人と神様との関係にかかっているのです。大切なことは、何が主の御名をあがめ何が損なうことなのかをわきまえ知ることでしょう。

主の御名が「みだりに」用いられないために、必要なことが二つあります。主への愛と隣人への愛です。人々の前で御名を恥じない勇気と、主の御名のゆえに敵をも愛する愛です。その時、主の御名は、私たちのみならず、多くの人々によってあがめられるようになるでしょう。

――私たちの日常は、しかし、それとは程遠い自分の罪を日々露呈するばかりです。けれども、そのような時になお、いえ、そのような時にこそ、呼び求める名があることの幸いを覚えるのです。

## 名を呼んでくださる神

イザヤ43:1、ヨハネ10:3、黙示2:17、14:1。

ちょうど神の御名が神御自身を表したよう

に、私たちの名前もまた私たち一人一人の存在を表すものです。名前が剥奪されたり忘れ去られたりすることは、その人の存在が消されるのと同じです。逆に、戦没者や被災者のメモリアルに一つ一つの名前が刻まれているのは、その人々の存在を想起するためです。

御自分の名を明らかにして私たちの主となってくださった方は、私たち一人一人の名前（存在）をも、心を込めて呼びかけてくださる羊飼いです。“ザアカイ”“シモン”“マリア”とお呼びになる主の御声の、何と愛情に満ちていたことか！

最後に、私たちには、今や永遠に消し去ることのできない名が刻まれていることを覚えましょう。私たちには神の小羊イエスの名が刻まれているのです。たとい、すべての人から忘れ去られたとしても、なおこの方には覚えられています。私たちは、生きるにしても死ぬにしても、永遠にこの方のものであり続けます。何と言う慰め！

**ディスカッションのために：**

1.「名前」にまつわる思いを分かち合う。
2. 主の御名を用いる様々な場面について論じてみよう。礼拝において、日常生活において。

## 6. 安息の日（第四戒）

**第四戒**

「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」

安息日と主の日

出 31:13 ～ 17、ネヘ 13:17,18、イザヤ 56:2 ～ 7、マタイ 12:8、使徒 20:7、黙示 1:10、ウ小 59。

時の流れを七つの日に区切り、しかも七日毎に休むという習慣は、おそらく旧約聖書に端を発する人類最古の習慣の一つです。

安息日は、神とイスラエルとの関係を規定する、根本的に重要な契約のしるしでしたが、後に世俗主義と厳格主義の間を揺れ動き、本来の意図は失われていきました。そのような安息日理解を根本から問い直され、本来の意味を回復されたのが、主イエスでした。この方こそ「安息日の主」です。

やがて、十字架と復活によって罪と死の力から解放してくださったイエスを救い主と仰ぐ人々は、イエスが出現された週の初めの日（＝日曜日）に誰からともなく集まっては礼拝をささげ、その日を「主（イエス・キリスト）の日」と呼ぶようになりました。それは掟によるのでなく、福音への応答の結果です。

キリスト教会の歴史において、その後、日曜日を「主の日」と理解する立場と「安息日」として理解する立場とが現れました。しかし、私たちにとって大切なことは、神が本来意図し、イエス・キリストによって回復された戒めの“心”を理解し、そして従うことです。

**聖別せよ**

創世 2:1～3、ウ大 120,121。

十戒は、この第四戒に至って初めて、私たちの神が創造者であることに言及します。六つの日にわたって天地万物を創造された主は、第七の日に安息なさり、こうして万物は完成されたと創世記は語ります。ここには、万物と時間をつかさどる神の主権が、明瞭に描かれています。第四戒が教えているのは、何よりもまず、このこと。すなわち、私たちの人生のすべての時間も、その中で与えられる労働も家族も仲間も財

産も、一切は主のものだということです。それらをあたかも自分のものであるかのように錯覚する私たちが、安息日を聖別する（＝神のために捧げる）ことによって思い起こすのです。

別に言えば、六日の間は働くことを通して主の恵みを味わい、七日目は休むことを通して主の主権を仰ぐということでありましょう。すべての日が主のものであるのに、一日しか主張なさらない主の慈しみを覚えます。

### 息子も、娘も、男女の奴隷も

申命 5:15、出 22:20、マタイ 12:1 ～ 14、ウ大 118。

興味深いことに、第四戒にはもう一つ別の理由が申命記に記されています。

「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである。」

これは、私たちが休むことの理由なのではなく、男女の奴隷たちを休ませねばならないことの理由です。荒れ野での放浪生活とは違って、約束の地カナンに入れば戦利品としての奴隷の数は飛躍的に増加します。また、定住生活ともなれば当然食べて行くための農作業が欠かせません。そうした中で、何があっても丸一日を休むことの困難は、荒れ野時代と比較になりません。仮に自分は休んでも、女や子ども・奴隷たちを休ませることなど論外、というのが当時の感覚でしょう。ところが、私たちの主は、彼らをも休ませよとお命じになるのです。

なぜか。それは、あなたもかつては同じように奴隷であったのに、わたしが解放したゆえに今を生きているからだ、と主は言われます。つまり、主は創造者のみならず救済者としても、私たちの生に主権を持っておられるということなのです。男や女、大人や子ども、主人や奴隷、敵や味方といった、あらゆる区別は問題ではない。生きとし生けるものすべてを憐れみ、弱い者・苦しむ者をお救いになる方が私たちの主であられることを、謙遜になって思い起こす日なのです。

### 祝福の日・休みの日

創世 2:1 ～ 3、詩編 118:24、マルコ 2:27、出 23:12、ロマ 8:21。

このように安息日を有無を言わさず守るようにお命じになるのは、主が私たちを祝福なさるためです。主は、第七の日を祝福のためだけに費やされました。私たちの世界も人生も、神の祝福なしに成り立ち得ないことは、聖書に無数に出てくる“祝福”という言葉が指し示すとおりです。神の祝福とは、まさに万物が良きものとして存在し続けるための根拠です。ですから第七の日は、何かをすることによってではなく、極めて良い世界の中でただ憩うことによって喜ぶ日、祝福を味わう日なのです。

そこには弱い肉体を持つ私たちが疲れ果てないようにとの創造者の思いやりがあります。まして家畜や家畜並みに働かされる人々に休みを与えよとの命令は、万物の命を育む神の大切な御心です。神のエコロジーとでも言えましょうか。

それだけではありません。何より私たち人間が、人間として回復されるために休むことは必要です。この世の営みに流される中で、家庭や人生の意味を見失い、非人間化していくことのないように、休みが必要なのです。「主が休まれた」と言われるのは、私たちが休むためです。神は休む必要などありません。私たちが休むために神は自ら模範を示されたのです。主に倣う者は幸いです。

### 永遠の安息に至るまで

ヘブ 4:1 ～ 11、60 周年、マタイ 11:28、ハイデル 103、ヨハネ 5:17、黙示 14:13、ヘブライ 10:24,25。

人の罪によって無に帰した神の祝福は、終わりの日に再び完全に回復されます。その日、私たちは地上の安息ではなく、永遠の安息・栄光の御国へと新しいヨシュア（＝イエス）によって導き入れられるのです。私たちが地上にあって、主の日ごとに集まるのは、この永遠の安息を先取りする言わば練習なのです。

この日、私たちは主を仰ぎます。私たちを造り、私たちを愛し、私たちを今また造り変えてくださる主を仰ぎます。私たちの人生の主が自分自身ではないことを思い起こし、すべてを主にゆだねて休むことを学びます。

この日、私たちはこの世の業から解放され、主のうちに憩う喜びと平安を味わいます。罪の世界で心傷つき、この世の重荷に倒れそうな私たちに「休ませてあげよう」と語りかける主の御言葉に慰められます。

この日、私たちは男も女も、大人も子どもも、奴隷も主人も、共に神の子としての自由を味わい、共に主に仕える喜びを味わうために礼拝に集い、主にある交わりを祝います。

こうして、私たちは再びこの世の六日間の働きへと押し出されて行きます。創造の業を休まれた主は、世の救いのために今もなお働き続けておられます。御父も御子もただ私たちのために働いておられるのです。どうして私たちだけがあぐらをかいていられましょう。

世にある限り、私たちは、この創造のリズム・主の救いのリズムを魂と体に刻み込んで生きるのです。労苦を解かれ、永遠に憩う安息の完成まで、互いに励まし合ってまいりましょう。

**ディスカッションのために：**

1. 自分にとって主の日はどういう意味を持っているか。平日との関係はどうか。
2. 主の日は喜びとなっているか。そうでないとしたら、それを阻んでいる理由は何か。
3. あなたにとって「安息」とは何か。

# 聖書黙想・説教展開例・分級展開例

## 10月4日　人間・神と人と共に　聖書黙想

テキスト　創世記1章26〜28節、ヨハネの黙示録21章3,4節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問17
参照教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問10

問17　神さまはどのように人間をお造りになりましたか。
答　神さまは、ご自分のかたちに似せて、神さまの子どもとして神さまと共に歩むように、また男と女に、人間をお造りになりました。

**〈カテキズム解説〉**

**1.「ウェストミンスター小教理問答との関係で」**

このカテキズムの大きな特徴の一つは、「神さまと共に歩む」という信仰者の生きた営みです。

ウェストミンスター小教理問答も結局はそのことを言っているのではないでしょうか。

問1「人のおもな目的は、何ですか」
答「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠の神を喜ぶことです」
問2「神は、私たちに神の栄光をあらわし神を喜ぶ道を教えるため、どんな基準を授けていてくださいますか」
答「旧新約聖書にある神の御言葉だけが、私たちに神の栄光をあらわし神を喜ぶ道を教えるただ一つの基準です」
問3「聖書は、おもに何を教えていますか。」
答「聖書がおもに教えている事は、人が神について何を信じなければならないか、また神は人にどんな義務を求めておられるか、ということです」

「神の栄光をあらわし、永遠の神を喜ぶ」とは、言いかえると、「神さまの子どもとして神さまと共に歩む」ということでしょう。そのために、主イエス・キリストによる救いが用意され、神の御心に従う応答の歩みが、ウェストミンスター小教理問答、問1〜3と問39〜問107で展開されていきます。このウェストミンスター小教理問答書全体が言おうとしていることを、子どもたちに「生活化」させたい。それが、今回のこの「子どもと親のカテキズム」の大きな狙いの一つです。今回はこの大きな狙いと、「神に似せて造られている」ことの関連で、子どもたちと一緒に、「神さまの子どもとして神さまと共に歩む」という「神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶこと」の「生活化」に取り組んでみたいと思います。

**2.「なぜ神のかたちに」**

このカテキズムの問17では「ご自分のかたちに似せて」人を造られたことと、いわばその目的が記されています。その目的は、「神さまの子どもとして神さまと共に歩むように……」です。

神さまと共に歩めるようにと、人は神のかたちに似せて造られました。では、神のかたちとは何でしょう。前回も触れましたが、このカテキズムの問8でそのことのヒントが記されています。

問8 聖書が語っているまことの神さまはどのような方ですか。
答　目には見えない霊なる方で、「あなた」と呼んで、お話しできる神さまです……。

この問8の表現はとても優れていると思います。神さまとは、目に見えないお方です。すなわち、「霊なるお方」です。しかし、どこにいるのか手応えのない、頼りないご存在ではありません。打てば響く確かな実在です。それが、「『あなた』と呼んで、お話しできる神さまです」という表現で、明瞭に語られています。これは、子どもたちにもよく理解できる表現ではないでしょうか。

「あなた」と呼び、「子よ」と答えてくださる。これが契約の民の大きな「恵みの実体」です。そもそも、「あなた」と神さまに向かって呼びかけ、神さまからの「子よ」という応答を受けることができるのは、「神に似せて造られている」からです。

### 3.「神さまと共に歩むように」

このように、神さまの呼びかけに反応できるようにされているのは、神さまに似た者として造られているからです。また、神さまの喜ばれる御心に従えるようにされているのも、神さまに似た者として造られているからです。神さまのお言いつけを聞くことができるようにされている。しかも、神さまと親子の間柄の中で、共に歩むことができるようにされている。ここに、神さまに似た者として造られた人間の最大の喜び、光栄、特権があります。

## 〈聖書テキストの解説と黙想〉

### 1. 創世記1章26～28節

まずは、神さまに似た者として造られた光栄を確認することが大切です。そのことについては、創世記1章26～28節で再確認したいと思います。神さまに似た者として創造された人間の幸いは、神さまの御心を知り、その御心を受け止め、それに喜んで従うことです。それが、「神さまと共に歩む」人間の光栄です。光栄であると共に、それは特権であり、さらには、責任も伴うことを子どもたちに教えてもいいかもしれません。光栄・特権・責任は、切り離すことはできないからです。

もし、神さまのかたちに似た者として造られていなかったとします。そうしたら、神さまのおっしゃることを理解できず、神さまに喜んでいただける道も知ることができません。そうすると、神さまと共に歩むことはできないのです。

創世記1,2章では、まだ罪が人類に入る前でしたので、人間は、神さまのおっしゃること、神さまが喜ばれることを、良く理解することができました。理解するだけでなく、神さまの御心に従って歩むこと、すなわち、神さまと共に歩むことを最大の喜びとしていました。

しかし、創世記3章に入って、人間が罪を犯してからは、神さまとの関係が崩れてしまいました。神さまとの親しい間柄を失い、神さまから離れてしまいました。ですから、神さまの御心を知ることができなくなりました。

神さまの御心を知ることができなくなっただけではありません。たとえ神さまの御心を聖書を通して知ることができたとしても、その御心に従うことができなくなってしまいました。

神さまに応答するための、「神さまに似たかたち」は完全になくなったわけではないのです。「神さまに反抗する」という仕方で、「神さまに似たかたち」は変形して応答するようになってしまいました。とても残念なことです。せっかく、神さまと共に喜んで歩めるようにと、神さまのかたちに似せて、神さまに正しく応答できるようにと造られたのですが、罪によって、神さまに反抗してしか生きられなくなってしまいました。

### 2. ヨハネの黙示録21章3,4節

しかし、神さまの方では、私たちが神さまから離れて、神さまと共に歩めなくなるままに放置されませんでした。私たちに近づき、私たちの罪を赦し、罪を拭い取って、新しい心を造ってくださいました。神さまの御心を正しく聴き取って、その御心に従って生きていきたい、という新しい心を造ってくださったのです。それを私たちは「イエスさまによる救い」と呼んでいます。

救われた私たちは、もう一度、神さまと一緒に歩むことができるようにされます。神さまの御心を知って、それに従って、神さまに正しく応答して、神さまと共に歩むことを喜びとすることができるように造りかえられました。

でも、まだ、完全に神さまと一緒に歩むことができるようになったわけではありません。まだまだ、自分勝手に神さまが喜ばれないことをして、神さまと一緒に歩めないことがたくさんあります。

そんな私たちですが、やがてイエスさまが再びおいでになるとき、私たちの罪が完全にきよめられます。神さまと私たち人間が、完全に一緒に住むことができるようになります。それは、神さまと共に歩むことにおいて完成される、ということです。私たちの「神さまの形に似せて造られた心・魂」が、イエスさまと同じように完全に造りかえられるのです。そして、いつまでも神さまと一緒に住み、完全に神さまと共に歩めるようになります。その完成に向けて私たちは今、神さまと一緒に歩む道を毎日一生懸命練習しているのです。

（芦田高之）

## 10月4日　人間・神と人と共に　説教展開例

テキスト　創世記1章26〜28節、ヨハネの黙示録21章3,4節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問17

**〔単元のねらい〕**

人間が神のかたちに似せて造られたのは、神さまに従い、神さまと共に歩めるようになるためだったことを確認したい。しかし、罪赦されてはいても、今なお罪人の私たちは、完全に神さまに従い、神さまの子どもとして、神さまと完全に一緒に歩むことはできない。そんな私たちが、やがては神さまと共に永遠に住むことができる。言い換えると、神さまの子どもとして、完全に神さまと共に歩めるようになる時が用意されている。そこに向けて私たちは、力の限り、毎日、神さまと一緒に歩む練習をしている。そのことを子どもたちと一緒に確認し合いたい。

# 神と人と共に

**【人間の光栄】**

みなさん、だれかからあなたのお名前を呼ばれたら、どうしますか？　あなたの名前が太郎君としますね。だれかがあなたに向かって、「ねえ、太郎君……」と呼んだら、あなたはどう答えますか？

「はい、なんですか？」と答えるかもしれませんね。「なーにー？」と答えるかもしれません。

とにかく、名前を呼ばれると答えてしまう。それが私たち人間です。名前を呼ばれても、知らんぷりをするかもしれません。それも、「無視する」という明確な応答ですね。とにかく、私たちは、名前を呼ばれると、何らかの応答をしてしまうのです。それが人間です。

神さまと私たちの関係も同じです。私たちが神さまに向かって、「神さま……」と呼びかけると、神さまは必ず、私たちの呼びかけを聞いて、「なーに？」と、答えてくださいます。

神さまからも、私たちに呼びかけてくださいます。「いえいえ、わたしは、ぼくは、神さまからの呼びかけなど、聞いたことない」と言うかもしれませんね。たしかに、私たちの、この二つの耳で、神さまからの呼びかけを直接に聞くということはありません。でも、神さまは今も私たちに語ってくださっています。聖書の言葉をとおして、神さまは、今も私たちに語ってくださっています。

「〇〇くん、〇〇さん、わたし、主なる神は、あなたを造ったんだよ。それも、わたしとそっくりに、あなたを造ったんだよ」と、語りかけてくださっています。聖書の言葉をとおして語ってくださっています。

「神さまとそっくりに造ってくださるって、どういうことなのですか？」と、あなたは言うかもしれませんね。神さまはおっしゃいます。「聖書の言葉を読んで、神であるわたしのことを知って、わたしに向かって、『神さま』って、呼びかけることができているでしょ。それは、あなたが、わたしの言うことが分かり、わたしに向かって、『神さま』って話しかけていることなんだよ。わたしとあなたは、お話ができるようにされているのです。これが、あなたが、わたしにそっくりに造られている、っていうことなのです」と。

神さまは、ほかにもいろいろと語りかけてくださっています。「〇〇くん、わたし、主なる神は、あなたがわたしの言うことを聞いて、それに従うことができるように造ったのです」と。

あなたはこう質問するかもしれません。「神さま、あなたに従って生きるって、どういうことなんですか？」と。神さまはこうお答えになります。「わたしの言うことをちゃんと聞いて、わたしといっしょに、喜んで生きることなんだよ」と。

神さまのおっしゃることを聞くことができ、そ

れを理解することができる。理解するだけではなく、神さまに喜ばれるように生きることもできる。これは、とってもすばらしいことです。人間にだけ与えられた、すばらしいことなのです。

**【神さまと共に歩む】**

では、神さまと一緒に喜んで生きるって、どういうことなんでしょう。それは、神さまのお言いつけに、喜んで、したがって生きる、ということです。あなたは、「神さまは、どんなお言いつけを私にしておられるのですか？」と、言うかもしれませんね。

それはたとえば、「神さまとの関係を一番にして生きていきなさい」ということです。あなたが生きていく中で、大事にしたいことがたくさんありますね。お友達との関係とか……、学校での評判とか……、まわりの人にどう見られているか……とか、学校の試験でよい点数を取るとか……。たくさん、たくさん、大事なことがありますね。みんなみんな大切なことです。

でも、一番大事なことは、神さまとの関係を一番大切にすることです。神さまとの関係を一番大切にするっていうのは、神さまが喜んでくださることを一番大切にするっていうことです。

べつの言い方をすると、神さまが喜んでくださることを、一番に選び取っていくっていうことです。神さまが喜んでくださることのとても大きなことは、次のことです。「ほかの人のことを大事にして生きる」ということです。このことを神さまは、とても喜ばれます。

悲しんでいる人がいたら、そばに寄り添って、いっしょに居てあげるとか……、困っている人がいたら、「ぼくに、わたしに、何か助けられることがあるかなあ……」ときいてあげる。そして、できることは何でも、困っている人、悲しんでいる人、さびしい人にたいして、してあげる。私たちがそうしたら、神さまは、本当に喜んでくださいます。神さまは、ものすごく喜んでくださいます。

「それが神さまといっしょに生きる、ってこと？」って、あなたは言うかもしれませんね。そうです。それが、神さまといっしょに生きる、神さまの喜んでくださる道を、神さまといっしょに歩む、ということです。私たちが、このように、神さまといっしょに歩むことができるようにと、神さまは、私たちを、神さまと似たものとして造ってくださいました。神さまとおんなじことを喜び合えるようにと、神さまは、私たちを、神さまと似たものとして造ってくださったのです。

**【神さまの喜びと私の喜び】**

神さまが喜んでくださることを、私が一生懸命、がんばってやってみる。これは、たいへんなことのように感じるかもしれませんね。でも、神さまが喜んでくださることを、たいへんでも、一生懸命やってみると、不思議なことです。私の心の中に、喜びがあふれてくるのです。本当に不思議です。神さまが喜んでくださることをやってみると、私の心の中にも、喜びと、なんとも言えない満足感がみちあふれてくるのです。神さまといっしょに喜ぶということでしょうか。そんな喜びこそ、私たちの本当の喜びなのです。

**【神と共に】**

神さまといっしょの喜びを、神さまといっしょに、わかちあう。こうして生きることを、「神さまと共に生きる」と言います。神さまと共に、神さまの喜びを、私もまた自分の喜びとして生きる。そう生きられるようにと、神さまは私たちを神さまのかたちに似たものとして造ってくださいました。

でもどうでしょう。私たちは、神さまと同じ喜びを、私の喜びとして生きているでしょうか。なかなか難しいですね。だけど、神さまは約束してくださっています。イエスさまがもう一度いらっしゃるときには、私たちは、神さまの喜びを、全く私たちの喜びとすることができる。そして、いつまでも、神さまといっしょに生きることができるようにされると。それが、神さまのお約束です。

（芦田高之）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネの黙示録 21章3,4節

見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。
神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。

## 10月4日　人間・神と人と共に　小学科下級

**そうせいき1:26〜28をよみましょう。**

①かみさまは人をなにににせてつくられましたか？

②かみさまはひとをなにとなににつくられましたか？

③かみさまが人にしはいさせようとしたのはなんですか？

④かみさまのごめいれいにしたがって、わたしたちにもできることはありますか？

**ヨハネのもくしろく21:3,4をよみましょう。**

⑤大きなこえは、人がだれといっしょにすむ、といっていますか？

⑥「かれらの目のなみだをことごとくぬぐいさってくださる」とは、どんなことでしょう？

## 10月4日　人間・神と人と共に　中学科

**創世記1:26～28を読みましょう。**

①人は何に似せて造られましたか？

②「神にかたどって」とはどういうことですか？

③人が造られた時に与えられた役目は何でしたか？

④　今、私たちはこの役目を果たしていますか？

**ヨハネの黙示録21:3,4を読みましょう。**

⑤神の幕屋（新しい天と地）では、人はどのような状態ですか？

⑥新しい天と地では、何がなくなると約束されていますか？

⑦「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」とは、どんなことでしょうか？

⑧聖書の最初と最後の記事を読んで、気付いたことはなんですか？

# 10月11日　人間の使命　　聖書黙想

テキスト　　マタイによる福音書 5章43〜48節
教理問答　　子どもと親のカテキズム 問18

「子どもと親のカテキズム」問18は、人間の使命について以下のように語る。

問18　神さまのかたちに似せて造られた人間は、どのように歩むのですか。
答　　神さまを礼拝し、神さまを喜び、家族や友だちを愛し、神さまがお造りになったものを大切にして、神さまに仕えて歩みます。

わたしたちはイエス・キリストによって贖われ、命を得、罪ゆえに失われていたすこやかな神のかたちを回復させられた。神が創造のみわざにあって付与してくださっていた幸いな人間へと、キリストにあやかることによって立ち返ることを得たのである。そこにおいて、神のもとにある人間の使命ということをあらためて確かめることができるであろう。

キリストの恵みによって新しくされた人間の使命ということについてはいくつかの点から考察することができるが、今回は愛に生きる人間という視点から考えてみたい。テキストはマタイによる福音書5章43節以下の「愛敵の教え」である。

主イエスは敵を愛せよと言われる。味方を愛することならどんな人でもしているではないか、わたしを信じて生きる者たちよ、あなたがたは敵を愛する愛に生きなさいとお命じになるのである。

この御言葉を聞いて、人はどのように感じるであろうか。これは人間には不可能なことだ、あるいは現実を考えない理想論にすぎない、言葉でこのように言うことは簡単だけれども、実行するのは無理に決まっている、そういう反応が返ってくるかもしれない。

そうであっても無理はないと思う。敵はわたしたちを傷つけ、わたしたちから奪い、わたしたちの命をおびやかすために存在している。世の人びとは、敵は打ち倒さねばならないと考えている。その意味では、敵を愛せよとの主イエスの御言葉はまさに天地が覆るような、驚くべき言葉にちがいないのである。

しかし一方で思う。もし敵を愛することができたなら、それはすばらしいことではないか。敵同士が愛し合う、それは夢物語かもしれない。幻想かもしれない。けれども、もしもそれが現実に起こったなら、この世から争いはなくなるのである。戦争もなくなるのである。揺らぐことのない平和が実現するのである。

主イエスは、敵を愛することは決して夢物語でも幻想でもないとはっきりとおっしゃる。わたしたちも敵を愛する愛に生きることができる。そこに実現する驚くべき喜びと幸いに生きることができる。それが御言葉の約束である。

敵を愛する愛。わたしたちはどうしたら、この愛に生きることができるのだろうか。

この愛に生きるために、わたしたちはまず、人間はだれもが自分中心の思いを宿しているという事実を知る必要がある（神が教え示してくださることである）。わたしたちの内には、自分はいかなるときにも正しいという思いがある。そして、この自分中心の思いが敵をつくる。神が敵をつくるのではない。天の父は「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(45) お方である。

敵をつくるのは人間である。人間の中の自己中心の思いが、お互いを敵と見なし、憎しみをつのらせ、争いを引き起こし、果てはお互いの命を奪い合うまでになるのである。この憎しみの連鎖、争いとねたみの鎖から解き放たれないかぎり、わたしたちは幸せにはなれない。世界は平和をうちたてることができない。戦争はやむことがない。民族同士の対立も消えない。

この憎しみと争いの鎖をうちやぶるものこそ、敵を愛する愛である。この愛を聖書がさし示している。この愛をイエス・キリストが身をもって教

え示してくださっている。イエス・キリストは十字架にかかられることで、この愛を示された。敵を愛する愛とは、十字架の愛である。

キリストこそまことに正しいお方、いささかも罪なきお方であられた。このキリストが、自分こそ正しい人間であると信じて疑わなかった者たちの手によって、死刑囚に仕立て上げられ、十字架につけられ、殺された。冤罪という言葉があるが、キリストの十字架こそ冤罪の中の冤罪である。罪のない方が罪人のたくらみによって犯罪人に仕立てられ、殺されたのだからである。もしもわたしたちがそのような目に遭ったなら、どうであろうか。おそらく捕らえた者への憎しみをつのらせ、そのような目に遭わせた相手に対して報復の思いさえも抱くのではないだろうか。

十字架につけられた主イエスはどのようになさったのか。あのように不当なふるまいをした者たちを正当に罰してほしいと言いたてられたのではなかった。ご自分を十字架に追いやった者たちを憎み、復讐心にかられたというのでもなかった。ルカによる福音書によれば、主イエスは十字架の上で、断末魔の苦しみの中でこう祈られた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ23:34）。

ここに敵を愛する愛がある。ここでこそ、人間の愛の限界は打ち破られている。この愛こそ人間のすべての憎しみとねたみを争いを終わりにして、この世と人間にまことの和解と平和とをもたらす愛である。

主イエスはわたしたちのために十字架に死に、わたしたちの罪を贖い、わたしたちを新しい人として生まれ変わらせてくださった。罪ゆえに失われていた神のかたちを取り戻してくださるため、神を愛し、隣人を愛して生きる（マタイ22:37～40）幸いへと招き入れてくださるために、主はかつて敵であったわたしたちのために死んでくださったのである。

この愛を受け、この愛をいただき、この愛に生かされることによって、わたしたちもまた敵を愛する愛に生きることができる。この大いなる愛を証しして生きるところに、神の恵みによってすこやかな、幸いな人間にしていただいた者たちの使命があるのである。（木下裕也）

10月11日　人間の使命　　説教展開例

テキスト　　マタイによる福音書 5章43〜48節

**〔単元のねらい〕**

「聖書黙想」で触れたように、キリストの恵みによって神のかたちを回復された人間の使命ということについてはいくつかの点から考察することができるが、今回は敵を愛する愛に生きるという視点から学んでみたい。子どもたちの一人一人を、信仰によって愛の証人として生きる喜ばしいつとめへと押し出したい。

# イエスさまの愛をいただいて

イエスさまはわたしたちにお命じになります。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(44節)。

この御言葉を聞いて、皆さんはどう思いますか。むずかしいご命令だ、と思うのではないでしょうか。敵は、わたしたちからさまざまなものを奪います。わたしたちに悲しみや失望をもたらします。この世の多くの人びとは、敵とは打ち倒すべきものだと当たり前のように考えています。敵を愛するなどというのは愚かなことだと言う人もあるでしょう。また、言葉で言うのはやさしいけれども、それを実行するのは無理に決まっていると言う人もあると思います。

しかし、イエスさまはあなたの敵を愛しなさい、あなたを迫害する者のために祈りなさいと言われるのです。これは神さまのご命令です。それはわたしたちがこの命令を守り行うとき、神さまがこの世に、わたしたちの間に大きな喜びと幸せを与えてくださるということです。もし敵を愛することができるなら、それはすばらしいことです。敵であった者同士が仲直りをし、愛し合うということがほんとうに起こるなら、この世から争いはなくなり、平和が実現するのです。

イエスさまはわたしたちにできないことをお命じになるお方ではありません。敵を愛せよ――これは驚くべきご命令ですが、わたしたちはこの御言葉に生きることができるのです。なぜでしょうか。イエスさまが、そのための道を開いてくださったからです。

敵を愛する愛に生きる。そのことを考えるときにまず問わなければならないのは、敵とはだれなのかということです。わたしたちの目の前に、敵が立っています。敵と敵とが向かい合っています。ここで、よく理解したいのです。わたしたちにとってだれかが敵であるというときには、わたしたち自身も相手にとっては敵にほかならないのです。人はだれもが自分こそが絶対に正しいというはかりを生まれながらに宿しています。このはかりに照らすなら、いつも自分が正しく、相手がまちがっているということになります。もちろん、このはかりそのものが（自分に都合のよいしかたで）曲がってしまっているのです。

この思いが敵をつくります。よく覚えておきたいのです。神さまが敵をつくるというのではありません。人間同士が敵をつくるのです。天の父なる神さまは「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(45) お方です。すべての人間を愛しておられるお方です。

しかし人間は自分を絶対とするはかりを振りかざし、おたがいを敵と見なし、憎しみをつのらせ、争い合っています。これがこの世の、人間の罪のすがたです。この憎しみと争いの鎖から解き放たれないかぎり、わたしたちは幸せにはなれません。世界に平和は訪れません。

神さまはわたしたちをこの敵意の鎖から解き放ってくださるために、御子イエスさまをわたし

たちのところに遣わしてくださいました。イエスさまは十字架につけられて死なれ、三日目に復活されました。それは罪に支配されたわたしたちの古い人を葬り、わたしたちを新しい人として生まれ変わらせてくださるためです。生まれながらの古い人にあって、わたしたちは敵をつくるばかりでした。憎しみと争いの鎖に縛られ、不自由でした。

そのわたしたちが、イエスさまの愛にあやかって生きる幸いな人に生まれ変わることを得たのです。おたがいに赦し合い、愛し合い、手を取り合って平和を実現する喜ばしい人間に変えられたのです。

イエスさまは十字架の上で、ご自分を十字架に追いやった者たちのために祈られました。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ23:34)。

これが敵を愛する愛です。わたしたちもこの愛に生きることができます。イエスさまからこの大きな愛をいただくからです。この愛をいただくとき、わたしたちはすべての憎しみと争いを終わりにして、愛と平和の喜びに生きることができるのです。

神さまは人間をご自身のかたちに似せ、神さまを愛し、隣人を愛して生きる幸いな者としてお造りになりました。しかし人間は最初の人アダムにあって罪におち、この神さまのかたちを失いました。

神さまはすばらしいお方です。そのわたしたちをイエスさまによって贖い、罪ゆえに失われていたすこやかなすがたへと立ち返らせてくださったのです。イエスさまにあって、失われた神さまのかたちが戻ってきたのです。

問　神さまのかたちに似せて造られた人間は、どのように歩むのですか。

答　神さまを礼拝し、神さまを喜び、家族や友だちを愛し、神さまがお造りになったものを大切にして、神さまに仕えて歩みます。

(子どもと親のカテキズム問18)

イエスさまを信じる者たちは、敵を愛する愛に生きることができます。世界の歴史の中で、事実多くのクリスチャンたちがすばらしい愛の証人として、多くの愛の奇跡を起こしてきました。わたしたちもその一人となることができるのです。イエスさまの大いなる愛を証しし、豊かな愛の実りを結んで生きる、そのようなつとめを担って歩むことができるのです。それはイエスさまの恵みによることです。　(木下裕也)

---

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネの手紙一 4章7節a

愛する者たち、互いに愛し合いましょう。

---

# 10月11日　人間の使命　　小学科下級

**マタイ5:43〜45をよみましょう。**

①イエスさまは、だれをあいし、だれのためにいのりなさいといっていますか？

②それは、なんのためですか？

③てき、はくがいするもの、とはどんな人ですか？

④かみさまはわるい人、ただしくない人になにをされますか？

**マタイ5:46〜48をよみましょう。**

⑤なぜ、じぶんのきょうだいだけにあいさつするのではいけないですか？

⑥わたしたちのお手本はどなたですか？

⑦かみさまはどんなおかただとおもいますか？

## 10月11日　人間の使命　　中学科

**マタイ5:43～45を読みましょう。**

①弟子たちが一般的に理解していた教えは何でしたか？

②それに対してイエス様の教えられたことは何でしたか？

③一般的な教えとイエス様の教えの違いは何ですか？

④「敵、自分を迫害する者」とはどんな人のことですか？

⑤父なる神様は、正しい者と正しくない者、善人と悪人をどのように取り扱われますか？それはなぜですか？

**マタイ5:46～48を読みましょう。**

⑥なぜ、自分を愛してくれる人を愛するだけでは不十分なのですか？

⑦私たちが目指すお手本はどなたですか？

⑧そのお方はどんな方ですか？

## 10月18日　人間・罪の起源　　聖書黙想

テキスト　創世記 3章1〜12節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問19
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問13
ウェストミンスター大教理問答 問21〜23

問19　最初の人間は、創造された時のすばらしい祝福の状態にとどまりましたか。
答　いいえ。アダムとエバは、神さまの言葉に背き、罪を犯しました。

**〈聖書テキストの解説〉**

創世記の「蛇」という単語はもともと「竜」という意味も含む。天地創造の初めからいた蛇だから、黙示録という世の終わりの世界では「年を経た蛇」すなわち「竜」といわれる（黙12:9)。この蛇が「悪魔とかサタンとか呼ばれるもの」(同)といわれているので、私たちはあの創世記の蛇を悪魔、サタンと考えてよい。(ウェストミンスター大教理問答問21も「蛇」を「サタン」と同定している)。その悪魔・サタンがまず何と説明されるかというと「全人類を惑わす者」(同)。これが一つ。サタンは私たちをどう惑わすのか、そこにこれから着目する。そしてもう一つの説明は「告発する者」(12:10)。これがサタンという言葉の本来の意味。この「告発」を受けて「弁護」するのが弁護者キリストだから、サタンとキリストとは対決する者同士。この、私たちを昼も夜も告発するサタンは私たちにどのように関わってくるのか。サタンは世の終わりに初めて天から投げ落とされるわけだから（12:9)、そのときまでは私たちを惑わし続け、告発し続ける。この「サタンの惑わし」、そして「告発」が私たちにどう関わってくるのか、この二点に着目して創世記を読みたい。

サタンは実に巧妙な言葉によってエバを神の言葉から逸らせる。神の言葉は「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」という明快なものだった（創世記2:16,17)。しかし、サタンはそれをねじ曲げて、「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」と問う（3:1)。サタンにねじ曲げられて問われ、エバは「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神さまはおっしゃいました」と答えた（3:2,3)。もとの神のご命令から比べるとずいぶん言葉数が多い。そして正確な御言葉からずいぶん離れてしまっている。人間の言葉の口数が多くなればなるほど、御言葉がどんどん曖昧に不正確になっていく。そのようにして私たちは御言葉からもぎはなされてしまう。神の言葉とのブレを生じさせてくる。こう仕向けるのがサタン。

そして、サタンはすかさずそこを突き、「決して死ぬことはない」と言ってくる。神は生物として死ぬことを言われていたのではない。それをサタンはすり替えて、生物としては死にはしませんよ、とすり替える。これが惑わし。そうするとここで問題は、善悪の知識の木の実を食べても私たちは生き物としては死なないのだが、どういう意味で死ぬと神は言われているのか、ということ。その御言葉の意図を正確に知ることが大切になる。

サタンは「神のように善悪を知るものとなる」誘惑をエバに仕掛ける、つまり自らを神と同等とすることをそそのかすのである。根源的な誘惑。だから3:6の反応を見よ。「見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ……」。これが神のようになりたい人間に対する根源的な誘惑の強さ。これがやがてバベルの塔を建てて神に届こうとする、人間の神への挑戦になる。人類全

体が惑わされる姿になる。ここで大事なのは、神のようになろうとする私たちの惑い、それが善悪を知ろうという惑いと一体に考えられていることの意味。私たちがよく聞くのは、善悪の判断なしに生活も社会も成り立たないではないかという問い。しかし待て、その問いがサタンの惑わしの始まりだった。そんなふうに問わせることによってサタンは私たちを御言葉の真意からもぎ離す。そのようにして、善悪の知識によってあなたは必ず死ぬという神の言葉を無効にしてしまう。私たちはそんな惑わしに乗らずに、聖書に書いてあるとおりを明快に理解したい。

エバがこの誘惑に屈したとき、直ちにアダムもこれに屈する。善悪の知識の木の果実を食べたことの帰結はどうなるのか。読者の注意はアダムへと移行する。神に追及されたとき、アダムはこう答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」と。「この人のせいだ」。目の前の人への批判。目の前の人を「告発」する。私たちの善悪の知識など、せいぜい人を批判することに現れるのが落ちだ。こういう鋭い人間観。自分の目の中の丸太に気づかずに人の目のおが屑を追求して「人を裁く」ことの起源がここにある。これが神の言葉への最初の背きであり、「命の木」からの逸脱なのである。私たちは善悪の知識をどう用いるかというと、自分は悪くないと自己防御し、悪いのはこの人の方だ、と人を「告発」する。「告発者」は誰だと言われていたか。人を告発するのがサタン。このときアダムはサタンになっている。善悪の知識は私たちをサタンにする。人を批判してばかり。口数が多くなればそれだけ人への批判ばかりが出て来る。そのとき私たちはサタンになっている。それを神は、死んでいることだと言われた。サタンに唆されて、神のようになっていること、つまり裁き主になっていること。そしてそれは告発者サタンになっていること。そこに命があるわけがない。その人は死んでいる。だから神は善悪の知識の木の実を食べると必ず死ぬと言われた。

しかし私たちは今や、キリストという命の木に繋がっているはず。私たちの本性とは違う、命の木の実の養分が私たちの体には流れ込んでいるはず。だったら私たちは人を裁く言葉を言うのはもうやめて、自分の言葉をキリストの言葉で満たすべき。目の前にいる罪人に対する私たちの思いに、罪人に対するキリストの思いが取って代わらなければならないだろう。それが私たちが園の中央にある命の木イエス・キリストに繋がっていること。私たちは「告発者」にではなく、「弁護者」の側につきたい。

誘惑に陥ってしまったアダムだが、このアダムに対しても「どこにいるのか」と呼び掛けておられる神の声がある。罪の人間に対しても、みすぼらしい「いちじくの葉」(3:7) の腰覆いに代えて「皮の衣」(3:21) を与えてくださる、私たちには分不相応な神の憐れみがあることを忘れまい。

### 〈子どもカテキズムの解説〉

問18で見たように、神のかたちに似せて造られた私たちは、神を礼拝し、神を喜び、家族や友だちを愛し、神がお造りになったものを大切にして、神に仕えて歩むことによって、神のすばらしい祝福を味わいながら生きるべきだった。しかし、逆に、神を裏切ってしまった。それは神の言葉に背いてしまったことによる。神の言葉に従わないと、自分が神のようになり、神を避けて隠れるようになり、家族や友だちが悪いと思ってしまうようになる。

### 〈子どもたちに対して〉

悪いことを指摘されたとき、すぐ人のせいにする。これは、子どもたちの中に顕著に見られる。子どもといえども、サタンの誘惑に陥ったアダムの罪を免れ得ている人は一人もいない。いや、子どもだから、矯正されていない罪の姿があると言った方がよいかもしれない。だからこそ、この箇所を真剣に子どもたちのために説き明かし、そこからの救いを真剣に祈り求めるように促し、その祈りに応えて救い出してくださる神の恵みを、しっかりと伝えたい。　(赤石純也)

## 10月18日　人間・罪の起源　　説教展開例

テキスト　　創世記 3章1〜12節
教理問答　　子どもと親のカテキズム 問19

**〔単元のねらい〕**

「善悪を知る」「神のようになる」という罪の悲しみを知る。
私たちがいかにサタンの誘惑に陥りやすいかを知る。
それ以上に、そのような罪に陥りやすい私たちを赦し、生かしめてくださる神の憐れみ深さを知る。

# サタンの誘惑に陥ったアダムとエバ

蛇（サタン）がエバに言いました。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」。これが誘惑の始まりです。2:16〜17a を見てください。「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう』」。神さまのご命令は２つです。園のすべての木から取って食べなさい、ということと、善悪の知識の木からは食べてはいけない、ということです。わかりやすいですね。

でも蛇は、このわかりやすい神の言葉を変なふうにねじ曲げてエバに問いかけてきました。みんなも、教会に来ていないお友だちから、「聖書にこんなことが書いてあるんでしょ？」と、ちょっと不正確に聞かれたことはありませんか？　本当は聖書にはこう書いてある、ということをちゃんと説明できますか？　サタンはこうやって教会に来ているみんなのことを惑わしてきます。お友だちはサタンではありませんが、サタンはいろんな人に入って、教会に来ているみんなのことを惑わし、聖書の言葉からみんなを引き離そうとします。そういう引っかけ問題を、サタンは私たちにいっぱい仕掛けてきます。

エバが答えます。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです」これは正しい答えですね。次はどうでしょう。「でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神さまはおっしゃいました」。ずいぶん言葉数が多くなっています。同時にずいぶん不正確になっています。「園の中央に……」と言っていますが、待ってください、創世記2:17は「善悪の知識の木からは」と言っていたはずですね。それに、園の中央にあるのはこの木だけでしたか？　2:9を見てください。命の木もあるんでしたね。エバの言い方では命の木からも食べてはいけないかのようになってしまいます。不正確ですね。さらに「触れてもいけない」と神さまはおっしゃったとエバは言っています。本当ですか？そんなことは命じられていませんでしたよね。それからそれから？「死んではいけないから」？　それも神さまはおっしゃっていません。「食べると必ず死んでしまう」と言われたんですね。エバの言い方では神さまのおっしゃったこととは違いますね。

エバは一生懸命説明しようとしたのですが、言葉数ばかりが多くて、正確な御言葉からうんと離れてしまいました。神さまの言葉をちゃんと聞いてしっかり心に刻んでいないと、人間は言葉数を多くして、御言葉をどんどん曖昧に不正確にしてしまいます（これは、日曜学校の先生も気をつけなければいけないことです！）。サタンはそのようにして私たちを御言葉からもぎはなそうとしてくるのです。

サタンはねじ曲げた質問をして、エバの御言葉理解をそんなふうに曖昧にさせておいて、エバの言葉尻を捉えて御言葉と正反対のことを言ってきました。「決して死ぬことはない」。本当ですか？神さまは2:17で「必ず死んでしまう」と言われ

ました。

皆さんもここでだまされないでください。アダムとエバは木の実を食べましたが、「うっっ」となってその場で死にませんでしたね。あれ？神さまはアダムたちが絶対に食べないようにウソを言って脅したのでしょうか？

神は「必ず死んでしまう」とおっしゃったとき、生き物として死ぬことを言われていたのではありません。それをサタンはすり替えて、生き物としては死にはしませんよ、とすり替えてきたのでした。そうすると、神さまはどういう意味で「必ず死んでしまう」とおっしゃったのでしょう？ それを考えながら、蛇の次の言葉を見てみたいと思います。

「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとな」れるぞ、と蛇は言いました。みなさんは、「自分が一番偉くなりたいなぁ」、「みんなが自分の言うことを聞いてくれたらいいなぁ」と思うことはありませんか。それが「神のようになる」ということです。人間はみんな、神さまのようになりたい、とどこかで思っています。そこをサタンは狙って誘惑してくるのですね。3:5「神のように善悪を知るものとな」れるぞ、と。

ここで大事なのは、神のようになるということと、善悪を知るということが、一緒にされているということです。神さまは善悪の知識の木の実を「食べると死んでしまう」とおっしゃいました。それはどういう意味かというと、善悪の知識によってあなたは必ず死ぬ、それはつまり、神のようになろうとすると、あなたは必ず死ぬ、という意味なのです。どうして神のようになろうとすると死ぬのでしょうか。さきほど、生き物として死ぬのではないと教えられましたが、善悪を知るようになると、何が起こるのでしょうか。

3:12を見てください。神さまに「食べたのか」と聞かれたアダムは、非を認めてただ「食べました」というべきだったのに、「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」と言いました。エバのせいです。それだけではない。神さま、あなたのせいです、とまで言っています。目の前の人を批判し、神さままで批判してしまっています。

「〇〇のせいだ！」皆さんも、言い合いになったときや、大人にしかられたとき、こんなふうに言って、自分は悪くない、悪いのはこの人だ、と自分を正当化していませんか。私たちの善悪の知識など、せいぜい人を悪く言うことに現れるのが落ちです。私たちは善悪の知識をどう用いるのかというと、自分は悪くないと自己防御する、そして悪いのはこの人の方だと人のせいにする。これは神さまの子どものすることではありません。善悪の知識は私たちを、神のようにするのではなく、サタンの側につくものにしてしまうのです。人を批判してばかり。口げんかが激しくなればなるほど、相手を悪く言う言葉ばかりが口から出て来ます。それを言ったあと、いい気持ちがしますか？とてもいやな気持ちになるのではありませんか？これを神さまはあなたが死んでいることだと言われているのです。それはあなたがサタンにそそのかされて、神のようになったつもりが、正反対にサタンになってしまっているということです。そこにあなたの命があるわけがありません。あなたは死んでいる。だから神さまは、「善悪の知識の木の実を食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と言われた。この言葉は本当だったのです。

神さまの子どもは、善悪の判断を自分でしてしまわないで、私たちの王であるイエスさまにお任せすることが求められています。「あの人が悪い、って言っちゃえばいいんだよ」というサタンの誘いの声が聞こえてきたら、どうしたらいいと思いますか？「我らをこころみに遭わせず（陥らせず）悪より救い出したまえ」と祈りましょう。

（赤石純也）

---

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙 5章19節

一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、
一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。

---

## 10月18日　人間・罪の起源　　小学科下級

**そうせいき3:1〜5をよみましょう。**

①へびはなんといって女にはなしかけましたか？

②かみさまはたべものについてどんなごめいれいをしていましたか？

**そうせいき3:6,7をよみましょう。**

③女はかみさまのごめいれをまもりましたか？男はどうしましたか？

④なぜ、たべてしまったとおもいますか？

⑤たべたあと、どうなりましたか？

**そうせいき3:8〜12をよみましょう。**

⑥かみさまがちかづいてきたとき、二人はどうしましたか？

⑦なぜ、かくれたのですか？

⑧アダムはかみさまのごめいれいをまもらなかったわけを、なんといいましたか？

# 10月18日　人間・罪の起源　中学科

**創世記3:1〜5を読みましょう。**

①蛇は何と言って女に近寄りましたか？

②女は何と答えましたか？

③神様のご命令（2:16,17）と女の言葉の違うところはどこですか？

**創世記3:6,7を読みましょう。**

④女は神様のご命令をまもりましたか？男はどうしましたか？

⑤なぜ、神様のご命令に背いたのでしょうか？

⑥食べた後、二人はどうなりましたか？

**創世記3:8〜12を読みましょう。**

⑦主なる神が近づかれたことに気付いた時、二人はどうしましたか？

⑧それはなぜですか？

⑨アダムは禁じられていた果実を食べた理由を何と説明しましたか？

⑩アダムの態度は正しかったでしょうか？

# 10月25日　「罪とは何か」　聖書黙想

テキスト　ルカによる福音書 15章11〜32節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問20

**〈罪の教理〉**

牧師となって25年余、未だかつて、個人伝道した相手から「わたしは罪深い人間ではない」と言われたことは一度もありません。むしろ皆、「そう言われれば、わたしも罪深いものであることは間違いない」と受け止められます。しかし、そこで言われる「罪」の理解と聖書が示す「罪」とは違います。ごく稀ではありますが、自分の「罪」の問題で良心の呵責を訴えられる方もおられます。確かに、優れた宗教家たちは、自分の「罪業(ざいごう)」を掘り下げ、そこからの救済の道を探究しました。しかし、それでもそこからもたらされる良心の呵責も罪の意識も、聖書が示す罪がもたらすものとは異なります。罪の問題もまた、聖書からのみ学ぶことができるのです。罪についての教え、つまり罪の教理は、救いの教理において不可欠なのです。

**〈子どもの発達心理と罪の教理〉**

子どもたちもまた罪人です。罪を犯し、罪を知っています。たとえば嘘を言ってはいけない、人のものを横取りしてはいけない、こ言葉やふるまいで乱暴なことをして人を傷つけてはいけない……等など、子どもたちなりによく理解します。しかし、それはいわば倫理や道徳の領域のなかでの認識です。同時に、子どもたちの精神的、宗教的発達段階によって何を罪と感じるのかは異なって来ることは、研究者たちが指摘しておられるとおりです。私たちの課題と責任は、それらの「意識」を神さまとのかかわりの中で扱うことにあります。ある教派は、幼児（小児）洗礼を認めません。その代り、幼児や小児の自覚的回心、信仰の決心を促します。そのために、教師（説教者）は、子どもたちがどれほど罪深く、そのままでは神の怒りを受けて滅びてしまうかを説くこととなります。いわば、繰り返し伝道説教を行うわけです。そして、イエスさまを信じて天国に行きたいと決心した子どもたちに、信仰告白に基づく洗礼、つまり成人洗礼を施すわけです。しかし、私たちのカテキズム教育は、そのようなアプローチをとりません。私たちは、父なる神の愛、主イエスの愛の暖かな光の中で、罪を語ります。それは、結局、この罪の問題は、「人間の救済の願いに基づいて取り扱われる次元のものではない」ことを鮮明にしていくこととなります。つまり、私たちが神の怒りを受けたくない、天国に入りたいとの願いを駆り立てるような、罪認識への導入ではなく、神が私たちの罪を贖い、私たちとの交わりを求め、私たちの救いを願っておられる、その御心を示し続けるアプローチです。人間の罪認識の深まりとは、神の赦しの愛の中でのみ、真実なものとなり、深められてゆくものなのです（ただし、礼拝式で唱える十戒の「キリストへの養育係」(ガラテヤ3:24参照）の効用を否定しているわけではありません)。その意味で、キリスト者は地上にある限り赦された罪人の理解を保持します。しかもそれは、信仰が定まっていない者、つまり救いの確信を持てない力のないキリスト者だと、前述の方々が批判するようなキリスト者を育てることとはなりません。むしろ、罪の赦しを確信し、それだけに十字架における神の愛、主イエスの愛に対する感謝と健康な、言い換えれば、福音的な応答を引き起こすものです。

**〈罪とは何か〉**

答えは「神さまの御言葉に背くことです」。ここで、罪を判定する主体は人間の側にはないことが明示されます。つまり、神のみが罪を判断されるのです。罪とはこの神との正しい関係を破ることに他なりません。それを具体的に示すのが、神の御言葉への違反なのです。神の御言葉とは、神ご自身のこと、その御心のことです。神の御心の規準が御言葉であり、その規準を集中的に示されたのが十戒です。そして、その十戒とは、要する

に「神を愛し、人を愛する」二つで一つの愛に生きることです（問58,59参照）。

### 〈してしまった罪としなかった罪〉

「神さまの御言葉に背く」罪の中には、してはならない事をしてしまう罪、いわば、積極的に犯す罪が示されています。しかし、神がもっとも望んでおられるのは愛することです。それゆえ、愛「さない」こともまた等しく罪です。むしろ、いわばこの消極的な罪こそ、もっとも真剣に顧みなければならない罪なのです。ウェストミンスター小教理問答の問14では、「神の律法に少しでも【適合しない】点があること」と言います。これは、神の「しなさい」との御心に合致しない、応答しない罪です。小教理問答がこの罪を第一に数えているのは、ふさわしいことだと思います。

### 〈罪の本質〉

人はそもそも神の像に似せて造られた最高傑作です。「極めてよいもの」としての人間の本質は、神との交わりに生きる存在です。神との交わりによって人は人となることができるのです。反対に、この「いのちの交わり・人格的交わり」が失われたなら、人間は、野獣より不幸な存在に転落してしまうのです（ジュネーブ教会信仰問答問4参照）。アダムとエバは、神が善悪の知識の木の実を食べてはならないと禁止した掟を破り、神に背きました。要するに自分が神と等しいもの、神のようになりたくなったのです。神が、せっかくご自身との交わりへと招いてくださった愛を裏切ったのです。神から離れることこそ、自由であり、幸いであると考えたのです。罪とは、人間が本来の人間であることを不服とし、神のようになろうとする思いと行動です。神にもとづく善悪の規準を自分中心、自分本位で改変することです。

### 〈全的堕落〉

アダムによって犯された罪は、その後生まれたすべて人間に影響を与えることとなりました。それを上手に説明することは極めて困難ですが、人は、事実、放っておけば必ず神に背き、自己中心の思いと言葉と行いへと傾斜します。すべての人間が例外なしに、自分の力で罪を克服し、神の御言葉を守り、ふさわしく応答する能力を完全に喪失しているのです。

### 〈キリストを信じない罪〉

ヨハネによる福音書16章8節以下で、主イエスは、聖霊が降臨されるとき、罪についての誤解が明らかにされると預言されました。「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」(9節）とおっしゃいました。イエスを信じないとは、罪からの救い主でいらっしゃることを信じないことです。それゆえ、イエスさまを信じない人には、贖いの恵みを受けられず、神との交わりを回復する術がなく、神の子とされる道は閉ざされたままです。また、イエスさまを信じないとは、愛さないことであり、従わないことです。そのとき、私たちの罪は永遠に残ってしまいます。

### 〈放蕩息子の罪〉

放蕩息子は、父の遺産を、父の存命中に受け継ごうと企てました。つまり、父を（自分の中で）殺しているのです。人間は、神がおられるのに(自分の中で）無視し、自分を神であるかのようにふるまおうとしています。神と共に生きる、歩むことが不自由だと思い違いをして、豚にも劣る惨めさを味わうのです。しかし、聖霊が働かれます。つまり神からの愛の働きです。こうして、悔い改めて立ち返る恵みが与えられたのです。ここで、大切なのは、「我に返った」という罪の認識は、聖霊の恵みだということです。彼の罪認識は、父親の愛の懐に抱かれ、完全に赦されたときにこそ、いよいよ深まったはずです。赦された感謝と自分の愚かさを悔いる心がないまぜになって、涙にくれただろうと思います。

### 〈子どもたちに〉

「罪を犯さないで良い子になろう」と語るのではなく、「イエスさまを信じ、イエスさまに喜ばれる子になろう」と勧めましょう。その中で、聖霊によって罪を認め、深められるからです。赦しの暖かな光の中で自分の闇を知り、同時に闇から光へと、繰り返し、方向転換させられる信仰の歩みの素晴らしさを証ししたいと思います。

（相馬伸郎）

## 10月25日　「罪とは何か」　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 15章11〜24節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問20

**〔単元のねらい〕**

放蕩息子のたとえ話は、何度も取り上げているテキストです。今回は、罪に焦点を当てます。弟息子が父の家から出て行くことは、父なる神の愛の交わりの世界から出て行くことを暗示します。遺産を要求することは、心の内で神を殺すことです。罪を犯している人間は、それこそが本来の人間の自由であり幸福であると倒錯してしまいます。子どもたちが、自分の内にあるこのような罪、罪の性質を悟る一助として、説教に取り組みたいと思います。罪人であることの自己理解が、神さまに赦され、愛されているといううれし涙の中で深められることを目指して、主イエスの愛を語りたいと思います。

# 罪を犯すってどういうこと？

先週から人間の罪について、学び始めています。これまでも、聖書のお話を聴く中で、罪という言葉や罪人という言葉をよく耳にしてきたと思います。聖書の中に、この言葉がたくさん出てくるからです。

学校で、「つみびと」という言葉を聞くことはありますか。ほとんどないと思います。「罪人」と書いて「ざいにん」と読むことが多いと思います。そして「ざいにん」という言葉の意味は、犯罪者、罪を犯した人のことを言うのだと思います。それなら犯罪とは何ですか。それは、国が定めた法律を破った人のことだと思います。裁判を受けて、「有罪」ですと宣告された人のことだと思います。つまり、僕たち私たちにとって、まったく関係のない遠い世界のことのように思えます。

それならいったい、教会で教える罪人、聖書が教える罪人って、何なのでしょうか。もう一度、問20を読みましょう。

「罪とは何ですか」「神さまの言葉に背くことです。神さまの言葉にひとつでも従わないならば、私たちは神さまの御前に罪人です」。

つまり、聖書が言う罪とは、神さまの御言葉に背くことです。神さまの御言葉にたった一つでも従わない、従っていない点があれば、僕たち私たちは罪人だというわけです。だったら、カテキズムで言われているように、「私は神さまの前に罪人です」と言うしかないと思います。

ここで、繰り返されている言葉があります。それは、神さまです。神さまの前にということです。つまり、聖書が言う罪とは神さまとの関係のことを言っているのです。たとえば、先生と皆との関係は、今、よいですか。隣に座っているお友達どうしの関係は、いい感じですか。友達と仲が良ければ、とても気持ちがよくて、嬉しいです。本当に楽しいです。反対に、けんかをしていたり、意地悪されていたりしたら、もう、本当に悲しくて、つらいです。その場所にいるのが、苦しいと思います。人間は、仲が良い人といられるときが一番幸せなのです。居心地がいいですからね。もう一度、問います。先生と皆の関係は、どうでしょうか。先生は、皆が言うことをちゃんと聞いてくれると、「ああ、みんなといい関係なんだな」と、嬉しくなります。みなさんも、友達どうしで、自分の言うことをちゃんと聞いてもらえたら、同じように嬉しくなると思います。つまり、その人といい関係になっているかどうかは、その人の言葉をちゃんと聞いているかどうか、そこが大切だということです。だったら、神さまと僕たち私たちの関係もまったく同じです。いえ、何よりも神さまと僕たち私たちの関係こそ、神さまの御言葉をちゃんと聴いて、守ることが大切なのです。神さ

まの御言葉は、神さまの御心がまっすぐに示されているからです。しかも、イエスさまは、神さまの御言葉そのものでいらっしゃると聖書に書いてあります（ヨハネ1:1～5）。天のお父さまは、僕たち私たちに神さまの御言葉を聴いて、守るようにお命じになりました。それは、僕たち私たちが神さまの愛の中で、神さまの子どもとして生きていくためにどうしても必要なことだからです。確かに、僕たち私たちも神さまの子どもとされて、天国に行けるようになることを願っているでしょう。けれども神さまは、その100倍も1000倍も強く、いえ、もう比べられないほど強く願っておられるのです。だから、神さまは僕たち私たちが罪人のままでいることが耐えられないのです。何故なら、神さまといい関係になければ、人間は悲しくて、苦しくて、不自由で、不安で……たまらないままだからです。神さまは、僕たち私たちをそんな居心地の悪い生活のまま過ごさせることが、我慢できないのです。

イエスさまは、放蕩息子のたとえ話を教えてくださいました。弟息子は、言いました。「お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」。これは、遺産相続ということです。親が持っている財産は、親が死ぬと子どもたちに相続、つまり受け継がせることができるわけです。ただし、そこには条件があります。それは、親が死んだ後になるということです。つまり、弟息子は、お父さんがまだ生きてぴんぴんしているのに、「お父さん、僕にとってはもうお父さんは死んだことにしていますから、今すぐ遺産をください」と言っていることになります。つまり、この息子は、お父さんを心の中で殺してしまったわけです。

どうしてそんなことを考えてしまったのでしょうか。それは、この弟も僕たち私たちと同じように罪人だからです。罪人は、神さまを信じなくても生きて行けると思っています。罪人は、神さまを信じ、神さまと交わりをもって、神さまに従って生きることがいやなのです。どうしてそう思ってしまうのでしょうか。それは、自分のやりたいことをできなくさせたり、自分の思うとおりにやると叱られたりすると考えるからです。けれどもそれは、大間違いです。むしろ、神さまの御言葉に背く時、人間は、豚の食べるイナゴマメでも食べたいと思うほど、悲しい目に遭うのです。豚さんは、神さまの御言葉を守らなくても立派な豚さんになれます。かわいい豚です。でも、人間は、神さまの御言葉を守って、神さまと共に歩むように造られています。それなのに、神さまに背き、離れてしまうなら、人間は豚よりもはるかに不幸な生き方しかできなくなるのです。

しかし、そんな人間を、天の父なる神さまは放っておけません。何としても、戻らせたいと願われるのです。そこで、天のお父さまはついに御子なるイエスさまをこの世界にお送りくださいました。そして、イエスさまは僕たち私たちの神に対する罪を贖い、償ってくださったのです。罪の罰である神さまの裁き、永遠の死、滅びを身代わりに受けてくださったのです。ですからイエスさまを信じる人は、罪を赦していただけるのです。永遠の命をもらって、神さまと共に歩める神さまの子とされるのです。

僕たち私たちは、今、教会に来て、礼拝を捧げています。どうして教会に来られたのかは、一人一人、違うでしょう。でも、僕たち私たち全員に共通しているのは、天のお父さまが、天から聖霊なる神さまを注いでくださったことです。神さまに呼んでいただいたからです。だったら、今日もこの礼拝式の中で、自分が神さまの御言葉を守れていないことを素直に認めましょう。そして、赦してくださいと祈りましょう。そのとき、天のお父さまはイエスさまの十字架のゆえに、僕たち私たちのすべての罪を赦してくださいます。やさしく抱きしめてくださいます。神さまの子どもとして新しく、元気に、楽しく、喜んで過ごせるようにしてくださいます。今週も、神さまと共に歩みましょう。

（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 15章21節

息子は言った。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。」

## 10月25日　「罪とは何か」　小学科下級

**ルカ15:11～16をよみましょう。**

①下のむすこがおとうさんにしたおねがいはなんでしたか？

②おかねをもらったあと、どうしましたか？

③おかねがなくなったあとは、どうなりましたか？

**ルカ15:17～24をよみましょう。**

④なぜ、おとうさんのところにかえったのですか？

⑤おとうさんは下のむすこをどのようにむかえましたか？

⑥下のむすこはどんなきもちだったとおもいますか？

**ルカ15:25～32**

⑦おにいさんはおとうとがかえってきたことをよろこびましたか？

⑧このおはなしの「おとうさん」とは、だれのことですか？

## 10月25日　「罪とは何か」　中学科

**ルカ15:11～16を読みましょう。**

①下に息子が父親に要求したことは何ですか？その後、下の息子はどんな行動をしましたか？

②財産を使い果たした下の息子はどのような状況になりましたか？

**ルカ15:17～24を読みましょう。**

③下の息子のとった行動は？なぜそうしようと思いましたか？

④誰に対して罪を犯したのですか？

⑤父親は、放蕩して帰ってきた息子をどのように迎え入れましたか？

**ルカ15:25～32を読みましょう。**

⑥兄は何が不満だったのですか？

⑦弟・兄・父親は、それぞれ誰（どんな人）のたとえでしょうか？

## 11月1日　罪人の悲惨　聖書黙想

テキスト　創世記 4章1〜16節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問21
参考教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問19
ハイデルベルク信仰問答 問7〜11

問21　罪を犯した人間はどのようになりましたか。
答　人間は生まれながら悪へとかたむく罪人になってしまいました。
神さまとの交わりを失い、神さまに背いて歩むようになり、神さまの怒りを受け、ほろびの死にさだめられました。

**〈聖書テキストの解説〉**

有名なカインとアベルの物語の箇所であるが、聖書が教える罪について正確に読み取るために、もう一度よく読み直してみたい。

**1節「彼女は身ごもってカインを産み……」**

最初の出産が楽園追放後であるということ。だからすべての人は罪のもとに生まれている。

**4節「アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められた……」**

神はなぜ、アベルの献げ物に目を留められ、カインの献げ物には目を留められなかったか。新共同訳では、わかりにくいが、勝手に想像しないで、聖書に書かれていることから正確に語りたい。

新改訳は4節を次のように訳している。「アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た」。非常に不自然だが、原文では確かに「彼自身」ということが強調されている。「彼自身が持って来た」、という強調とも読めるし、「自分自身をも献げた」という意味の可能性もある。この点は非常に重要である。

新共同訳があっさりと「肥えた初子」と訳した部分については、口語訳では「その群れのういごと肥えたもの」と２つ持って来たように訳されており、どちらか判断がつきかねるが、とにかく聖書が言いたいのは、アベルが献げたものは「初子」であったこと、「肥えたもの（最良のもの）」であったこと、という、最善の献げ物の2要素ともを満たしていた、ということのようだ。

ヘブライ人への手紙11:4によれば、アベルは信仰によってこの献げ物をし、神に正しい者であると証明された。しかも、「アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています」と、その有効性が今にまで至ることが記されている。ということは、アベルの献げ物は、収穫を感謝してその実りを献げるというようなものではなく、神に自分自身を献げ尽くすという、イエス・キリストも示された（ヘブ12:24参照）、人間の本来あるべき神への信仰のあり方をあらわすもの、と言えそうだ。そうなると、カインとアベルの差は、穀物か動物か、などという物質的な優劣にあるのではなく、罪のもとに生まれた者が神に受け入れられること（赦し）を信じて自分自身を献げ尽くしたか否かという点の差であることを思い知らされる。

**7節「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める」**

「罪は戸口で待ち伏せており」の部分は非常に難解な箇所。確かなのは、「正しくないなら、すぐにでも罪を犯すだろう」ということ。「罪」という言葉はここが初出。「求める」は新改訳では「恋い慕う」。そのくらいつきまとってくるもの。「それを支配せねばならない」は新改訳では「治めるべきである」。箴言16:32では「自制」。

**8節「カインは弟アベルを襲って殺した」**

人類が最初に経験した死は、自然死ではなく殺害によるものであった。カインは、7節で神から正しくない心を見抜かれ、罪を犯す危険性を警告されていたのにもかかわらず、神が「正しい」と認めたアベルを殺してしまった。聖書が言及する最初にして最大の「罪」は、「無実の者の血を流すこと」（→エレ26:15、マタイ23:35）。カイン

の罪は原罪よりも重い。神の言葉への違反以上に重い罪。堕落した人間の罪への傾きはこれほどまでに斜度が強い。

**9節「どこにいるのか」「知りません」**

3:9同様、罪を犯すと、神は「どこにいるのか」と問われる。罪の結果をどこにどのように隠しているのか、神は心を探られる。しかしカインは、罪を犯してなお、さらに悪へと堕ちていく。

**10節「何ということをしたのか」**

3:13同様、自分の罪としっかり向き合わない人間に、神はこのように追及してこられる。

**11節「土よりもなお呪われる」**

見逃してならないのは、アダムの違反においては、人に対して神の呪いという罰はなく（呪われたのは蛇と土)、カインの罪によって、初めて人間が神の呪いを受けた、ということ。

**13節「わたしの罪は重すぎて負いきれません」**

一見、罪を認めた悔い改めの言葉のように見えるが、ここで「罪」と訳されてしまった言葉は、7節のとは違い、口語訳では「罰」、新改訳では「咎」と訳されている別の言葉。従ってこれは、「わたしに負わせられた罰は重すぎる！」という、神に対する抗議。続く14節で、カインは、「あなたはわたしを土の面（おもて）から追放なさる。わたしは御顔から隠れ、地上をさまよいさすらう者となる」と言い放っている。赦しを請う言葉はひとこともない。

**15節「だれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた」**

カインの反抗にもかかわらず、神は恵みを示される。神ご自身でさえ、カインを撃たない。

**16節「カインは主の前を去り」**

カインは主の御前に生きることをやめ、主の前を去ってしまった。

**〈子どもカテキズムの解説〉**

「生まれながら」という言葉の出所はエフェソ2:3、「悪へのかたむき」についてはハイデルベルク信仰問答8と思われる。「生まれながら悪へとかたむく罪人」の実例としてカインの物語を読むとよくわかるだろう。カインは「主の前を去り」、神との交わりを失い、神に背いて歩むようになった。「正しい人アベルの血」(マタイ23:35)を流し、神の怒りを受けた。

「ほろびの死」については、アダムにさかのぼる。証拠聖句に挙がっていないが、「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだ」（ロマ5:12)。また、「罪が支払う報酬は死です」（同6:23）と言われているとおりである。

**〈黙想〉**

カインとアベルの物語を読むとき、特に長男・長女の方は（筆者も含め)、カインをひいき目に見てしまう、という危険性に陥りやすい。つまり、穀物か動物かという違いはあったが、兄弟の献げ物には差はなく、神が不公平な扱いをされたのだ、というふうに読んでしまう危険性である。しかし前記のとおり、原文では、献げ物をする段階でアベルの全き姿を明確に表現して、カインとの差を際立たせているし、イエス・キリストもアベルを「正しい人」と評しておられる。カインの罪は神の不公平のせいで生じたのではなく、アダムゆえに堕落した人間の罪への下降性が、カインの中にはじめからあったからなのである。追放されたときも、カインには悔い改めた様子が全くないので、同情の余地がない。

しかし、このカインについて語るとき、私たちは自分が裁き主のようになってカインを断罪してはならない。問答23で学ぶことになるが、私たちもまた罪人であり、カインの道をたどってしまう危険性を持っていることをわきまえて語るようにしたい。

驚くべきことに、神はこのとき、カインの命を即座に絶たれなかった。神の御前を去ったカインに、立ち帰るチャンスを与えようとするかのようである。神は不公平でないばかりか、このように最初から、罪人に対して憐れみを示されるお方であったことを覚えたい。そして、この憐れみ深さを信じていたであろうアベルの心と献げ方に倣いたい。「アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています」と言われているとおり、今も有効な信仰者の模範を示していると言えそうだからだ。

問答21で教えられていることをより深く理解するために、創世記4章の当該箇所だけでなく、ロマ1:18～2:16、5:12～6:23も併せて読みながら、黙想されることをお勧めしたい。

（赤石めぐみ）

11月1日　罪人の悲惨　説教展開例

テキスト　創世記 4章1〜16節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問21

**〔単元のねらい〕**

カインとアベルの物語をとおして、「生まれながら悪へとかたむく罪人」の悲惨さを知り、小さい子どもであってもその萌芽があることに気づきを与えられたい。

また、そのような罪人に対して示される神の憐れみを知り、赦しが与えられることを信じて、立ち帰る道が備えられていることを覚えたい。

# カインの罪

カテキズム問21は、「人間は生まれながら悪へとかたむく罪人になってしまいました。神さまとの交わりを失い、神さまに背いて歩むようになり、神さまの怒りを受け、ほろびの死にさだめられました」と教えています。今日は、本当にそうなってしまった人のお話を聞きたいと思います。

初めに神さまは世界を創られました。そして人間も創られました。最初の人アダムとエバは、エデンの園という楽園に住んでいました。神さまが創られたすばらしいものに囲まれて、平和に暮らしていました。でもある日、悪い蛇にだまされて、二人は、神さまが食べてはいけない、とお命じになった木の実を食べてしまいました。「神のようになれるぞ」という誘惑に負けて、神さまの言いつけに背いてしまいました。神さまに背いてしまったので、二人は神さまを避けるようになってしまいました（創3:8)。皆さんも覚えがありませんか。家族の人や先生やお友だちに「しないでね」と言われていたことをしてしまったとき、バレないように・怒られないように、と思って避けてしまうことがあるのではないでしょうか。皆さんの中にも、残念ながらもう罪の芽があるのです。

神さまの言いつけを守れなかったアダムとエバは、神さまの怒りに触れて、エデンの園を追い出されてしまいました。悪い心を持ったままで永遠に生きることを、神さまは良しとされなかったからです。アダムとエバはいつか死ぬ者となってしまいました。エデンの園にいられたときは、園の中にあるものを食べて生きていましたが、これからは死ぬまで、自分で土を耕して穀物や野菜を作り、それを食べて生きていかなければならなくなりました。

エデンの園を追い出されてしまってから、アダムとエバに子どもが生まれました。カインとアベルという兄弟です。カインはお父さんを手伝って、土を耕す人になりました。アベルは羊を飼う人になりました。土を耕して作物ができるまで、とても時間がかかりますね。その月日を経て、カインは作物の中から、神さまへの献げ物を持って来ました。アベルはアベルで、自分の献げ物をしようと思いました。それで、飼っていた羊の中でも、初子（お母さんのお腹から最初に出てきた小羊）と呼ばれるものの中から、そして、よく肥えていている羊を選んで、神さまへの献げ物としました。皆さんも献金をしますね。皆さんはそれをどんなふうに準備しましたか。家族の人からもらいましたか。それとも自分のおこづかいの中から準備しましたか。神さまに感謝して、神さまのために喜んで献げていますか。もしかして、もったいないなぁと思っていませんか。神さまは皆さんの心をご覧になります。献げ物をするときの心を見ておられるのです。

ヘブライ人への手紙にはこう書いてあります。「信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました」(11:4)。「信仰とは、望ん

でいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」(11:1)。カインもアベルも、神さまの言いつけを守れなかったアダムとエバの子どもです。神さまに背いてしまったので、神さまを避けるようになってしまったアダムとエバの子どもです。でもアベルは、自分自身も神さまの御前に出て、自分で献げ物をしようと思って、そうしました。神さまはアベルのことを喜ばれました。

カインは、自分も献げ物をしたのに、神さまは自分の献げ物に目を留めてくださらなかった、と思ってしまいました。カインは激しく怒った、と書いてあります。神さまに対して怒ったのなら、それは正しくないことです。アベルに対して怒ったのなら、神さまはアベルを正しいと認められたのですから、カインの怒りは正しくありません。神さまはそういうカインにこうおっしゃいました。「正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める」(4:7) と。正しくない気持ちでいると、すぐにでも罪を犯してしまうから気をつけなさい、と警告されたのです。

しかし、カインの心はもう悪い方へ悪い方へと傾いてしまっていました。カインはアベルを殺してしまいました。神に正しいと認められた人の血を流してしまいました。無実の人の血を流すことは、恐ろしい罪です。どうしよう、とんでもないことをしてしまった、と思わなかったのでしょうか。ここでごめんなさい、と言えればよかったのに……。平常心で、他人事と思って見ているときには、そんなふうに思ってしまいますが、感情的になっているときには、皆さんも、素直にごめんなさいが言えないときがあると思います。カインは神さまに「アベルはどこにいるのか」と尋ねられても、知らんぷりしました。

神さまは、「今、お前は呪われる者となった」「土よりもなお、呪われる」とおっしゃいました。「呪われる者となった」ということは、神さまの祝福を受けられなくなったということです。土を耕してももう作物はできないし、ここにずっと住むことはできなくなって、地上をさまよいさすらう者になるのだと、カインは神さまに宣告されました。カインは「わたしに負わされた罰は重すぎます！」と神さまに抗議します。聖書の14節の言葉は悲しそうに見えますが、カインの気持ちは、「神さま、あなたはわたしを追放なさる。わたしは御顔から隠れ、地上をさまよいさすらう者となります！わたしは殺されるでしょうよ！」という感じです。とにかく、ごめんなさいと言いません。

カインはこんなにも神さまに逆らい、抗議し、開き直っています。でも神さまは、カインの最後の言葉に対して、「いや、あなたは殺されないよ」とおっしゃいました。神さまは、カインを殺したら七倍の復讐を受けることになるとおっしゃり、また、カインが撃たれないようにしるしを付けられました。神さまは、その場でカインの命を絶つことはなさいませんでした。

神さまの憐れみによって生き延びられることになったカインでしたが、カインは主の御前にとどまらないで、主の御前を去ることを選びました。神さまから離れて生活するようになってしまいました。命は長らえても、神さまにごめんなさいと言わず、神さまのもとに帰ってこないで、神さまから離れたままでいるのは、「生きている」とは言えません。罪を犯した人間は、死へと滅びていく者となってしまったのです。

今日のカテキズムの最後に「ほろびの死にさだめられました」とありますが、それで終りではありません。実は神さまは、カインにも示されたように、私たち罪人に神さまのもとに帰るチャンスを与えてくださいます。カテキズム問25で学びますが、神さまは、私たち罪人が滅びるままにはしておかれないのです。自分の罪に気づいたなら、神さまが赦してくださることを信じて、神さまにごめんなさいと言い、赦しを得て、神さまから離れずに生きていきたいと思います。(赤石めぐみ)

〔今週の暗唱聖句〕　申命記 6章15節b

あなたの神、主の怒りがあなたに向かって燃え上がり、地の面から滅ぼされないようにしなさい。

## 11月1日　罪人の悲惨　小学科下級

**そうせいき4:1〜7をよみましょう。**

①アダムとエバに生まれた子はだれとだれですか？ どんなしごとをしていましたか？

②カインとアベルはどんなささげものをしましたか？

③二人のささげものはどこがちがいましたか？

④カインはなぜおこったのですか？

**そうせいき4:8〜16をよみましょう。**

⑤おとうとはどこにいるのかときかれて、カインはなんとこたえましたか？ ほんとうはどうでしたか？

⑥かみさまはカインにどんなばつをあたえましたか？

⑦おそれたカインにかみさまはどんなやくそくをしてくださいましたか？

## 11月1日　罪人の悲惨　中学科

**創世記4:1〜7を読みましょう。**

①子どもを産んだエバが言った言葉は何ですか？ そのことの意味は何ですか？

②アダムとエバの息子は誰と誰ですか？ それぞれどんな仕事をしていましたか？

③二人のささげものの違いは何でしたか？（参考：新改訳聖書などと読み比べてみましょう）

④カインは激しく怒りましたが、本当はどうするべきでしたか？

**創世記4:8〜16を読みましょう。**

⑤アベルの居場所を聞かれて、カインは何と答えましたか？ 本当は何をしたのですか？

⑥主はカインに何をされましたか？ それはなぜですか？

⑦カインは何を心配しましたか？

⑧主はどのようにカインを守られましたか？

⑨この箇所を通して、主なる神様をどのようなお方だと思いますか？

## 11月8日　罪人の歩み　聖書黙想

テキスト　ホセア書 4章1〜3節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問22
参考教理問答　ウェストミンスター信仰告白 第6章4節
ウェストミンスター小教理問答 問18,19

問22　神さまに背いた人間はどのように歩むようになりましたか。
答　心が曲がって、偶像を拝むようになってしまいました。
他の人を愛さないで、にくみ、いじめたりするようになってしまいました。
神さまがお造りになったものを大切にせず、自分勝手に用いるようになってしまいました。

**〈子どもと親のカテキズムの解説〉**

問22は、「子どもと親のカテキズム」の特徴が現れた問答です。ウェストミンスター小教理問答には、この問22に対応する問答はありません。ウ小教理では、神との関係（垂直的関係）に重心が置かれた記述がなされており、罪に堕落した人間の状態についても、その点に重心があります(ウ小教理問18,19)。「子どもと親のカテキズム」でも、罪を犯した人間について、神との関係（垂直的・静的関係）でどのような状態に陥っているのかについて、問21で取り上げられています。しかし、それだけに留まらず、神との契約的・動的関係においても展開しているのが、この問答の特徴です。堕落によって、歴史の中で生きている人間の歩みが、どうなったのかが問われています。

このような当カテキズムの特徴は、すでに問1において、神との交わりの中で「神さまと共に歩む」という動的な概念が含まれていることに現されていました。すなわち、神との垂直的で静的な関係だけでなく、「歴史の中で神と共に歩む方向性」が打ち出されているのです。そのことが、人間の堕落についても展開されているのが当問答であると言えるでしょう（第57号「子どもと親のカテキズム」について（3）牧田吉和著を参照)。

そもそも、「神さまのかたちに似せて造られた人間」は、「神さまを礼拝し、神さまを喜び」（対神関係)、「家族や友だちを愛し」（対人関係)、「神さまがお造りになったものを大切にして」（対世界関係)、神に仕えて「歩む」者でした（問18)。しかし、堕落することによって、人間はこのような神が意図する歩みを続けることができなくなりました。神を愛し、神を礼拝するのではなく、「偶像を拝むようになってしまいました」（対神関係の倒錯)。家族や友だちなど「他の人たち（隣人）を愛さないで、にくみ、いじめたりするようになってしまいました」（対人関係の倒錯)。「神さまがお造りになったもの（被造世界）を大切にせず、自分勝手に用いるようになってしまいました」(対世界関係の倒錯)。

対世界関係に言及しているのは、日本キリスト改革派教会創立宣言に記された主張の第一点である「有神的人生観・世界観」の現れでもあります。天地を創造された神は、全世界を所有し、支配しておられます。天と地の一切の権能を持ったキリストの支配が及ばない領域は、この世界にありません。神の子として、神のかたちに似せられた人間は、神の良き支配を体現する管理者として、世界の支配を託されています。堕落した人間は、その役割をふさわしく果たすことができなくなりました。

救われるということは、罪が赦されるということだけでなく、対神・対人・対世界の関係において、創造された状態の人間に意図されていた本来の歩みを回復するということでもあります（問5,問56)。

**〈聖書テキストの解説〉**

**【KEY1 聖書本文を語る】**

〔STEP1〕聖書本文を読む。

ホセア書4:1〜3を繰り返して読む。

〔STEP2〕この個所のテーマは何か？

主が民を告発される。神を知らないこと、隣人に悪を行うことのゆえに。その結果は、地と空と海の荒廃である（カテキズムの内容に沿って）。

〔STEP3〕それをどのように展開しているか？

預言者が、主の言葉を告げ、イスラエルの人びとに警告している。

その告発の内容は、人びとが神を知らない（愛し、従わない）ことであり（偶像礼拝も含まれていることだろう）、主の律法に従うことなく、隣人に対する罪がはびこっていることである。

そのゆえに、地と空と海が荒廃することになる（ただし、このことは、直接的に環境破壊を指すのではなく、主の裁きとして戦乱が起こり、それによる荒廃が起こることを意味しているものと思われる）。

**【KEY2 神の福音を語る】**

〔STEP1〕この個所で神はご自身について何を表されたか？

主は、ご自身を知ろうとしない者たちを告発される。主は、ご自身の律法に従わず、隣人に対して悪を繰り返す者たちを告発される。主は、人間の罪のゆえに、地と空と海にまで荒廃を与えられる。

〔STEP2〕前後の章は、神について何と言っているか？

1～3章では、主に対するイスラエルの背信と、主による裁き、そして主の憐れみによるイスラエルの回復が繰り返して語られている（特に、淫行の女ゴメルをめとるように命じることによって、イスラエルに対する主の憐れみの深さを示されるのが印象深い）。4章以降も、罪に対する告発、裁き、そして主の憐れみによる回復が、広い文脈で繰り返される。

〔STEP3〕聖書全体を通しての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

主は、人間を創造する際、主を知り、主の栄光をあらわし、人を愛して、人に仕えて、神の造られた世界を大切にする管理者とすることを意図された。この個所では、堕落した人間がそのような主の意図を全く実行できていない現実を示す。しかし、主は憐れみ深いお方であり、キリストを与え、主の本来の意図を実現しようとしておられる。

**【KEY3 子どもたちの信仰と生活のために語る】**

〔STEP1〕この個所に登場する当時の人びとの必要は何だったか？

主を忘れ、主の律法に従って隣人を愛することを忘れていた。それゆえに、被造世界にまで荒廃をまねこうとしていた。

〔STEP2〕私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

主の存在をいつの間にか忘れてしまうことがある。そのときには、主が命じられているように周りにいる人たちを愛し、彼らに仕えることができなくなる。意地悪をしたり、うらやんだりしてしまう。ただ、欲望のままに、便利に生きたい、贅沢に生きたいということだけを考えていると、主が創造された世界が破壊されることにも無頓着になってしまう。

〔STEP3〕この聖書箇所の「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

私たちは、本当に罪人。主を忘れ、主の命じられることを忘れてしまう現実から逃れられない。被造世界のために主がゆだねられた役割にも、心を向けることができない。

しかし、このような私たちさえも、主は憐れんでくださって、キリストを与え、罪を赦して、神の子としてくださった。それゆえに、主に感謝して、聖霊の助けを祈りつつ、主が意図された本来の人間のあり方を回復した新しい歩みを始めよう。

（テモテ指導者訓練「聖書的説教」モジュールを参考に項目を立てました）。　（大西良嗣）

11月8日　罪人の歩み　説教展開例

テキスト　ホセア書 4章1〜3節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問22

**〔単元のねらい〕**

「子どもと親のカテキズム」問22は、堕落した人間が、罪の性質を持つだけでなく、現実に多くの罪を犯してしまうことを示す問答です。その現実は、私たちの力では逃れ出ることができないほどの根深さを持っています。その事実に、しっかりと目を向けることが大切ですが、その一方で、それだけでは絶望しかないことになります。福音的な説教とするために、最後のところでは、罪の現実に陥っている私たちを憐れみ、キリストを与えてくださった主の恵みにも、目を向けたいと思います。

# 神も、人も、世界も愛せない

このところ、「罪」についてのお話が続いています。「罪」についてのお話を聞くのは、あまり気分がよくないかもしれませんね。

でも、私たちが、実際のところ、どんなに罪深いかを知ることは、神さまの恵みを深く知るために、とても大切なことです。

**【聖書テキストより】**

先ほど読んだホセア書4章1節から3節では、預言者ホセアが、主である神さまの言葉を伝えていました。「主は、あなたたちを告発される」と言っています。「告発」というのは、悪いことをした人について、どこが悪いのかをはっきりさせて、必要な罰を与えるようにすることです。

イスラエルの人たちが悪いことをしているので、神さまは告発されるのです。

どんな悪いことが告発されているのでしょうか？

ひとつは、「神を知ることがない」と言われています。「神さまを知る」というのは、単に、神さまというお方について「聞いたことがあるよ」ということではありません。「神さまを知る」というのは、神さまを愛して、神さまを信じて、神さまに従うことです。神さまが、世界を造られた唯一の真の神さまだということが、ほんとうに分かったならば、私たちは神さまに従います。私たちのことをも造って、愛してくださるお方だと心から分かったならば、私たちも神さまを愛することでしょう。「神さまを知る」というのは、そんなふうに神さまを愛し、神さまに従うことです。

しかし、イスラエルの人たちは、神さまを愛そうとも、神さまに従おうともしなくなっていました。

そのため、ふたつめのこと。神さまの命じられることに従おうとしないで、「呪い、欺き、人殺し、盗み、姦淫」をはびこらせていました。「流血に流血が続いている」とも言われています。神さまが命じられることに従わず、他の人を愛さないで、人を憎み、相手が嫌がったり、苦しんだりすることを行っていました。

それゆえ、みっつめのことが言われています。「地は渇き」「野の獣も空の鳥も海の魚までも一掃される」。人間の罪のために、神さまがお造りになったものが傷を受けます。罪に対する裁きのために、戦いが起き、農作物が採れなくなり、動物たちが住めなくなるということかもしれません。

**【カテキズムより】**

少し前に、問18で、神さまが人間を造られた時、①神さまを礼拝し、②他の人を愛し、③神さまがお造りになったものを大切にするように造られたことを学びました。けれども、今日のカテキズム問22にあるように、人間は神さまに背いて、①神さまを知らない者となり、神さまではなく、偶

像を拝むようになってしまいました。②他の人を愛さないで、にくみ、いじめたりするようになってしまいました。③神さまがお造りになったものを大切にせず、自分勝手に用いたり、傷つけたりするようになってしまいました。

**【自分たちのこととして】**

このことは、預言者ホセアの時代の人たちだけではなくて、私たちも同じです。私たちも、神さまがいらっしゃることを、いつの間にか、すっかり忘れてしまうことがあります。神さまが他の人を愛するように命じられているのに、すっかり忘れて、人に意地悪をしたり、人のことをうらやんだりしています。便利なこととか、贅沢なことばかりしたいと考えていると、神さまがお造りになった世界をダメにしてしまうことがあるのに気づかないままでいます。

神さまが人間を造った時に願っていらっしゃったことが、私たちは罪のために全くできない者になってしまいました。神さまから見るならば、もはや用はないと見捨てられても仕方がない者です。滅びてしまっても仕方がない者になってしまいました。

けれども、私たちの神さまは、本当に憐れみ深いお方です。私たちの罪を赦すために、イエス・キリストという救い主を与えてくださいました。イエスさまのおかげで、私たちは神さまの子どもとして受け入れていただけます。それだけでなく、聖霊なる神さまを与えてくださって、神さまが最初に願っていらっしゃったように、神さまを愛して、他の人を愛して、世界をも愛して、生きることができるように助けてくださっています。私たちは、まだ、罪を繰り返してしまう弱さを持っていますが、それでも、神さまに似た者に造られた本当の自分を取り戻す生き方をすでに始めることができています。罪深い私たちであるにもかかわらず、私たちを憐れんで、神の子としての歩みに招いてくださった主に感謝しながら歩んでいきましょう。（大西良嗣）

---

〔今週の暗唱聖句〕　エフェソの信徒への手紙 2章3節

わたしたちも皆、こういう者たちの中にいて、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、
肉や心の欲するままに行動していたのであり、ほかの人々と同じように、
生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。

---

## 11月8日　罪人の歩み　小学科下級

**ホセア4:1〜3をよみましょう。**

①さいしょにどんなよびかけがありましたか？

②「このくににないもの」はなんですか？

③このくにでは、どんなわるいことがおきていますか？

④そのために、ちじょうにどんなことがおきますか？

⑤どうしてこのようなわるいことがおきたのでしょうか？

## 11月8日　罪人の歩み　中学科

**ホセア4:1〜3を読みましょう。**

①イスラエルの人々に、何と呼びかけられていますか？

②主はなぜこの国を告発されましたか？

③この国で起きている悪事は何ですか？

④その結果、地上にはどんなことが起きますか？

⑤私たちの周りにも、同じような状態はありますか？

# 11月15日　わたしの罪・神の怒りと裁き　　聖書黙想

テキスト　サムエル記下 12章1〜15節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問23
参考教理問答　ウェストミンスター大教理問答 問24,25
ウェストミンスター小教理問答 問14,18

問23　では、あなたも罪人ですか。
答　はい、私も神さまの御前に罪人です。
神さまの怒りと裁きを受けなければなりません。

**〈聖書テキストの解説〉**

イスラエルの全軍はアンモン人との戦いの最中でした。しかし、王様であるダビデは全軍の指揮をヨアブに任せて、エルサレムの王宮で過ごしていました。ある日の夕暮れ、ダビデは王宮の屋上を散歩していました。その時、一人の美しい婦人が、行水をしている姿を目にします。ダビデは人を遣ってこの女性、バト・シェバを召しいれ、床を共にします。しばらくして、バト・シェバは身ごもったことをダビデに知らせます。王様でありながら、他人の妻と姦淫を行い、子どもまでできたダビデは、その罪の隠蔽工作をしようとします。夫のウリヤを、彼から報告を聞くという名目で前線から呼び戻します。そして妻のバト・シェバと床を共にさせることによって、姦淫の結果をもみ消そうとしたのです。しかし、忠実なウリヤは、神の箱も、戦いに出ている主君も同胞も仮小屋に住んでいるのに、自分だけ家に帰ることはできないと、野営したのでした。ダビデが幾ら細工しても、ウリヤは家には帰りませんでした。

隠蔽工作に失敗したダビデは、ウリヤを殺害する計画を立てることにしました。戦闘が激しい最前線の危険な所にウリヤをやって、ウリヤだけを残して他を退却させ、ウリヤを戦死させるという作戦でした。ダビデは、このことを命じた手紙をウリヤに持たせ、戦地に戻しました。司令官ヨアブは、ダビデの命令に従い、ウリヤを戦闘の激しい最前線にやり、この無茶な戦いによってウリヤだけではなく、他の兵士も戦死することになります。夫の死を聞き、バト・シェバは嘆きます。しかし、喪が明けるとダビデは、バト・シェバを妻に召しいれ、彼女は男の子を生みました。

しかし、ダビデのしたことは主の御心にかなわなかったのです。人びとには隠せたと思っても、神さまは見ておられ、ダビデのしたことは、御心にかなわない罪であると、神さまは預言者ナタンを通してはっきりと語られました。

預言者ナタンは、ダビデに次のような話をしました。ある町に非常に多くの羊や牛を持っていた豊かな男と、非常に貧しい男がいました。貧しい男は自分のお金で買った、たった一匹の小羊の他に何も持っていませんでした。男は小羊を養い、小羊は家族の一員のように過ごし、彼の皿から食べ、彼の椀から飲み、彼の懐で眠り、彼にとっては大切な娘のようでありました。ある日豊かな男に来客がありました。彼は自分の客をもてなすのに、自分の家畜を屠るのが惜しくて、隣りに住んでいた貧しい男のたった一匹の雌の小羊を盗んで、御馳走したのです、と。

この話にダビデは激怒して「そんなことをした男は死罪だ。小羊の償いに四倍の値を支払うべきだ……」と言いました。しかし、ナタンはダビデに言いました。「その男はあなただ……」神さまが、ナタンを通して、ダビデが主の言葉を侮り、神さまの御心に背くことをしたことを告げたのです。ダビデは、無慈悲で卑劣な行為をした死罪に値する犯罪者は、自分であると突きつけられます。ナタンはダビデの罪の一部始終を指摘すると同時に、その報いとして、神さまがダビデの家に起こされる不幸について告げました。ダビデは、罪の事実から逃げることができません。ダビデは、くずおれて神さまの前に、自らの罪を告白しました。

すると驚いたことにナタンは、「その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。しかし主をはなはだしく軽んじたので、生まれて来る子供は死ぬ」と告げました。罪の報いは受けるが、神さまは、ダビデの罪を取り除いてくださるというのです。驚くべき福音です。このように、神さまの前に、罪を告白し悔い改める者は、神さまによって、罪を取り除いていただけるのです。憐れみ深い神さまは、罪人が滅びるのを望まれないだけではなく、罪を取り除くことがおできになるのです。

**〈子どもカテキズムの解説〉**

罪とは、私たちに規範として与えられた神さまのいかなる律法に対してであれ、少しでもかなわないこと、また、違反することです。堕落によって最初の人アダムの罪責が、私たちにもあるのです。神さまが罪の無い状態で造ってくださったにもかかわらず、原義を失ってしまいました。そして、それによって私たち人間の本性は腐敗してしまいました。この腐敗によって、私たちは霊的に善である全てのものに対して全く無気力、無能であるだけでなく、むしろ敵対し、全ての悪に対しては全面的に継続的に傾くようになっています。この原罪から現実のさまざまな違反が出て来るのです。

アダムの堕落以来、私たちは皆、神さまの御前に罪人なのです。律法という神さまの規範に少しでもかなわないなら罪なのです。そして、実際に殺人を犯さなくても、兄弟に向かって腹を立てるなら同じであると、主イエスさまはお教えになりました。私たちが心で思うだけで罪であるということです。それならば、私たちの誰もが「私には罪が無い」ということはできないでしょう。

罪は神さまがお怒りになり、罰せられるのが当然のものです。このように罪から自由になれない私たちは皆本来、神さまの怒りと裁きを受けなければならないのです。

**〈黙想〉**

私たちは、自分の罪より他人の誤りによく気がつくものです。人の罪は厳しく罰したいけれども、自分の罪に関しては、無意識の内に言い訳を考えているのが私たちです。

ダビデの罪は、不倫から殺人へ、貪欲、姦淫、偽証、殺人という十戒の半分近い戒めを破った恐ろしい罪でした。私たちはダビデのような罪を犯してはいないかもしれません。しかし、心の中での罪は毎日犯しています。

聖書は「正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もいない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない」(ローマ3:10〜12) と記します。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」(ローマ3:23) とも記しています。誰しも、そして私たちも、罪人なのです。神さまは罪に対して怒られ、正しい扱いをなさるのですから、私たちは神さまを畏れ、罪を犯さないようにしなくてはなりません。

**〈子どもたちに対して〉**

私たちは誰しも罪人です。もしも心の中で、汚れた性への傾き、神さまを無視すること、敵意、争い、ねたみ、怒り、自己中心な思い、仲間割れ、いじわるな気持ちがあるなら、それは罪人の性質です。しかし悲しいことに、私たちは毎日これらの罪人の性質を示しながら生きています。

しかし、神さまはその罪人の私たちの罪を取り除くことがおできになります。御子イエス・キリストの贖いの御業を通して罪を完全に赦してくださるだけでなく、ご自身の聖なる霊によって、聖なるご自身との交わりを通して、罪を取り除いて清めてくださいます。

私たちは罪人のままであり、罪の報いに苦しみながらかもしれませんが、神さまは共にいてくださいます。神さまの前にその罪を認め、神さまの前に公に言い表す、すなわち、告白するならば、神さまは真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義から私たちを清めてくださる（ヨハネ一1:9）と聖書は語ります。

ローマ書3章23節「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」と書かれているとおりです。この驚くべき、罪からの解放こそが福音なのです。　（袴田清子）

# 11月15日　わたしの罪・神の怒りと裁き　　説教展開例

テキスト　　サムエル記下12章1〜15節
教理問答　　子どもと親のカテキズム 問23

**〔単元のねらい〕**

自分自身も罪人に他ならないことを知る。罪のゆえに、神の怒りと裁きに値する私。
しかし、罪を認めて真実に悔い改めるなら、主がその罪を取り除いて下さることを知る。

## 私も罪人

（先週まで学んできた教理問答の復習をする）

**問20**　罪とは何ですか？

**答**　罪とは、神さまの言葉に背くことです。神さまの言葉にひとつでも従わないならば、私たちは神さまの御前に罪人です。

**問21**　では、罪を犯した人間はどのようになりましたか？

**答**　人間は生まれながら悪へとかたむく罪人になってしまいました。また、神さまとの交わりを失いました。そして、神さまに背いて歩むようになりました。罪を犯した人間は、神さまの怒りを受け、ほろびの死に定められました。

**問22**　神さまに背いた罪人はどのように歩むようになりましたか？

**答**　心が曲がって、偶像を拝み、神さま以外のものを神さまのように大切にするようになりました。他の人を愛さないで、にくみ、いじめたりするようになってしまいました。神さまがお造りになったものを大切にせず、自分勝手に用いるようになってしまったのです。

今日の教理問答は、私たちも罪人だと教えています。「では、あなたも罪人ですか？」「はい、私も神さまの御前に罪人です。神さまの怒りと裁きを受けなければなりません」。

私たちは自分の罪をはっきりと分かる時もあります。また、神さま以外のものを大切にしている時に、たいしたことはないと思ってしたことが、後で大変な結果を招くこともあります。そして、そうなって初めて自分の罪に気がつくこともあります。

**罪を犯したダビデの話し**

旧約のダビデ王様も、恐ろしい罪を犯しました。それは、ダビデが王様になって権力を欲しいままにしていた頃のお話です。王様であったダビデは、全軍がアンモン人との闘いに出ていたのに、自分だけ王宮にいました。そして王宮の屋上から下を見下ろしていますと、美しい女性が水浴びをしているのを目にします。ダビデは人を遣わしてその女性を王宮に召しいれました。そして床を共にしました。この女性は自分の部下、ウリヤの妻でバト・シェバと言いました。バト・シェバは身ごもり、しばらくしてそのことをダビデ王に伝えます。ダビデ王にとってこれは大変な事態です。こともあろうに、模範的で指導者として正しくなくてはならない王様が、部下の妻に手を出したのです。このことが皆に知れ渡れば、民は動揺し、王様の権威は地に落ちるだけでなく、大変なことになります。ダビデ王は罪の隠蔽工作に走ります。まずウリヤを戦地から呼び戻し、妻バト・シェバのいる家に戻らせて夫婦の交わりをするように仕向けることで、自分の罪を隠蔽しようとしました。しかし、ウリヤは忠実な部下でした。ダビデが幾ら勧めても、家に帰りませんでした。神さまの箱を先頭にして全軍が闘いをしている最中に、自分だけそんなことはできないというのです。

隠蔽工作に失敗したダビデは、今度はウリヤを殺害する計画を立てます。ウリヤを戦闘が激しく

危険な最前線に行かせ、敵の手によってウリヤを殺してしまおうという計画です。ダビデはこのことを命じた手紙をウリヤに持たせて、戦地に戻します。手紙を受け取った司令官ヨアブはダビデの望んでいたとおりに、ウリヤを戦死させます。

ウリヤの妻のバト・シェバは夫のために嘆きました。しかし、ダビデは喪が明けると直ぐにバト・シェバを王宮に迎え、自分の妻に召しいれました。子どもが生まれても、これで誰にも怪しまれないと思ったかもしれません。しかし、ダビデのしたことは主の御心にかないませんでした。

**預言者ナタンの叱責**

ナタンはこのような話をしました。ある町に二人の男がいた。一人は豊かで非常に多くの羊や牛を持っていた。もう一人は貧しく自分で買った一匹の雌の小羊の他に何も持っていなかった。しかし、この男はこの小羊を大切に養い、この人のもとで育ち、家族の一員として同じお皿から食べ物をもらい、同じ椀で飲み、眠るときには彼の懐で眠り、この人には娘のように大切だった。

ある日、豊かな男の所に客があった。すると、この豊かな男は客をもてなすのに、貧しい男の小羊を取り上げて、自分の客をもてなすのに用いた。

ダビデは王様として、正しい判定を下します。「そんなことをした男は死罪だ。四倍の償いを払うべきだ。そんな憐れみの無いことをしたのだから」。

その言葉の後ナタンは言いました。「その男はあなただ。神さまはこう言われる。貴方を選んで王様にしたのはわたしである。敵となった主君サウルの手から救い、主君の家を与え、多くの妻たちを与え、イスラエルとユダの家を与えた。足りないと言うなら何であれ与えたであろう。それなのに、なぜ、主の言葉を侮り、わたしの意に背くことをしたのか」。

神さまの目には全てが明らかで、幾ら隠そうとしても、全てが知られています。そして、神さまは、このダビデが犯した罪のために、ダビデが被ることになる不幸に関しても、預言者を通して告げられます。

**罪に気がついたダビデ**

ダビデはこれらの言葉を聞いた後、くずおれて、「わたしは主に罪を犯した」と告白しました。ダビデは自分の欲望のままに振舞った貪欲の罪、そしてバト・シェバへの姦淫の罪、ウリヤを殺害した殺人の罪、その後バト・シェバを自分の妻にした盗みの罪を犯しました。その全てが、主ご自身に対する恐ろしい罪です。やっと罪に気がついたダビデは、自分は主に対して罪を犯したと告白します。本来、イスラエルの王様は、神さまの民を正しく治め、神さまに従うように導くべき立場です。それなのに、神さまを畏れその戒めを守るどころか、反対に恐ろしい罪を幾つも犯し、神さまを侮ったのです。ナタンの言葉でダビデはやっと、自分が神さまに対して罪を犯したことを悟りました。

**悔い改めたダビデ**

ダビデは神さまの前に罪を認めました。そして、その直後、預言者ナタンは、驚くような言葉をダビデに告げています。「その主があなたの罪を取り除かれる」。

**罪を取り除いてくださる主**

私たちは、人の罪には敏感で、ちゃんと裁いて欲しいと願います。自分の事でなければ正しく判断できても、自分のことになると、何とか言い訳を考えて、逃れようとするものです。

神さまは、くずおれて罪を認めた罪人が、滅んでしまうことをお望みではありません。罪を犯してしまったら、罪の報いは避けられません。しかし、神さまは罪人が生きることを望んでおられ、ご自身の御子をお与えになりました。自分の罪を公に言い表すなら、神さまは真実で正しいお方ですから、罪を赦し、あらゆる不義から私たちを清めてくださいます。聖書は、神さまが私たちの罪を取り除いてくださる御方であると語ります。この神さまに信頼しましょう。　　（袴田清子）

---

〔今週の暗唱聖句〕　ローマ人への手紙 3章23,24節

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、
ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。

---

# 11月15日　わたしの罪・神の怒りと裁き　　小学科下級

**サムエルき下12:1〜10をよみましょう。**

①ナタンのはなしにでてくる二人の男はそれぞれどんな人でしたか？

②ゆたかな男はまずしい男にどんなことをしましたか？

③そのはなしをきいて、ダビデはなんといっておこりましたか？

④ゆたかな男とはだれのことでしたか？

⑤ダビデを王さまにしたのはどなたですか？

⑥ダビデはどんなわるいことをしたのですか？

**サムエルき下12:11〜15をよみましょう。**

⑦ダビデはじぶんのつみについてなんといいましたか？

⑧ダビデにあたえられたばつはなんでしたか？

# 11月15日　わたしの罪・神の怒りと裁き　　中学科

**サムエル記下12:1〜10を読みましょう。**

①ナタンがダビデに語った話は、どんな内容でしたか？

②それを聞いたダビデは、どう反応しましたか？

③ナタンの話の二人の男とは、誰と誰のことでしたか？

④神様はここまでダビデをどのように取り扱われてきましたか？

⑤ダビデのおかした罪は何でしたか？

**サムエル記下12:11〜15**

⑥神様がダビデに下した罰は何でしたか？

⑦ダビデは自分の罪を認めましたか？

⑧神様は罪に対してどのように臨まれるお方ですか？

# 11月22日　完全な堕落　キリストの贖罪　　聖書黙想

テキスト　　ルカによる福音書 22章54〜62節
教理問答　　子どもと親のカテキズム 問24
参照教理問答　　子どもと親のカテキズム 問82

問24　自分の力で神さまの怒りと裁きから救われることはできますか。
答　　いいえ、できません。
私たちは、悪へといつも向かってしまい、どんなに良い行いをしても、神さまの御前に自分の罪をつぐなうことができないからです。

**〈聖書テキストの解説〉**

有名な聖書箇所で、受難週等でよく取り上げられる箇所です。受難週に取り上げる場合、受難に向かうキリストの孤独を表すエピソードとして、また福音書の大きな主題の一つである「弟子の無理解」という主題の頂点として語られる事が多いでしょう。今回は、カテキズムとの関係で取り上げますので、それらとは多少異なる角度での扱いになります。

オリーブ山で捕らえられたイエスさまは、大祭司の家に連れて行かれます。他の福音書では、ここで実質的な裁判が行われていますが、ルカ福音書は何も報告していません。この屋敷がその時の大祭司カイアファの屋敷だったのか、舅アンナスの屋敷だったのかも議論があります。明るい時間に行われる最高法院での公的な審判や死刑判決を下す権利を持っているとされる総督ピラトによる審判との関係等、あまり詳細に説明する事は、かえって状況の理解を難しくしてしまうようでしたら、ルカ福音書の示す状況だけを簡単に説明することに留める方が良いでしょう。

マタイ福音書では「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」(26:56) と言われる一方、ヨハネ福音書では大祭司の屋敷に行ったのは「ペトロともう一人の弟子」(18:15) とされていますから、ペトロが特別一人だけイエスさまを心配していたとか、彼だけがイエスさまに従う信仰を持っていたという訳ではありません。ペトロのイエスさまへの思いはペトロだけのものではなく、弟子一般に共通する思いでしょうし、更には信仰者一般に拡大できるでしょう。同時にここで示されるペトロの弱さも、全ての信仰者が陥る弱さです。

ペトロが大祭司の屋敷の中庭にいる人々の中に紛れ込んだ理由ははっきりと記されてはおりません。「従った」(54節) とありますから、イエスさまがいらっしゃる所にはどこまででも行こうする意識はあったようです (ルカ22:33参照)。もしかするとイエスさまを救出しようという希望を持っていたかもしれませんが、それが実際にはほとんど不可能であることも自覚していたでしょう。どちらにしても、イエスさまの弟子としてイエスさまに従い続けようと願い、イエスさまがその働きを続けることができるように助けようと願っていたことは想像に難くありません。主題との関係でこのペトロの「人間であるペトロが救い主の業を支え、補おう」とする意志を持っていたと断定することは可能でしょう。

**〈子どもカテキズムの解説〉**

問24は第一部4項「人間」のクライマックスになります。これまで人間が罪ある存在であることが指摘され、その悲惨さが指摘されてまいりました。その後、問23で一般的な罪の指摘が、個人の罪の自覚と告白へと集中させられます。この転換に続いて本問で「私の罪」が自分自身の力では決して解消されない深刻な問題であることが自覚させられます。問20から問22までで指摘されている人類一般の罪の状態が、子どもたち一人一人の自分自身に当てはまるものであることを確認し、それが致命的なものであること、私たちがその状態に対して全く無力であることが強調される

ことがこの問の目指す所です。

この状態の悲惨さ、希望のなさが強調されればされるほど、救い主に救いを求める思いへと強くうながされ、救いを受けたことへの喜びがより鮮やかに自覚されることになります。

**〈黙想〉**

今日、日本で生活しております私たちは、直接肉体の命の危機に直面することはあまり多くありません。社会は安定しており、その中で安定した生活を送っている場合、極端な絶望に陥って人生をはかなんだり、人生の意味、人間存在の意味に想いを向けたりすることはそれほど多いわけでないでしょう。日常的な生活を続けることにさえ不安を感じてしまうような生活環境を強いられる人はごく僅かと言って良いでしょう。

しかしその一方で、特にここ二十年ほどの日本の状況は、将来の成長や発展を見込むことができず、未来への希望を持ちにくい時代です。人生の本質に思いをめぐらせることもない代わりに、即物的な成長の希望も持ちにくく、現状維持的な小さな希望と安心に留まりがちです。永遠の命や罪の呪いからの救いといったことに思いを向けること自体が無意味なことであると思われがちです。

けれども、改めて自分の存在や自分の命について思いめぐらし、いかに生きるべきかを考えることは必要なことです。そのように考えをめぐらせる中で、自分自身の無力さを思い、全能の神さまに自らを委ねることは大切なことです。教会に通っている子どもたちであれば、人間が罪人であることやイエスさまによって救っていただかなければならないことを知識としては知っているでしょう。その知識を自分自身の人生と重ね合わせて、自身の課題として見つめた時に、本当に罪を悔い、救い主を求める思いを得ることができると思います。

その機会がいつ与えられるかは、神さまだけがご存じです。しかし教会学校の教師は、そのように自分の罪を顧みなければならないことをくり返し語り、また教師自身やそれぞれの親、教会の方々を含めて、多くの信仰者たちがそのように自分自身を顧みて主を求めた経験をくり返し語ることによって、子どもたちがやがて同じ道を歩むことを示し続ける必要があるでしょう。

**〈子どもたちに対して〉**

子どもたちがペトロの弱さを客観的・批判的に見るのではなく、彼の弱さを自分の弱さと重ねて受け取ることができるように語ることができればよいと思います。ルカ福音書では、他の福音書と比べて、女中や他の人々の指摘がはっきりとペトロに向かってなされています。それぞれの人はペトロを「じっと見つめ」(56節)「ペトロを見て」(58節)、「この人も」(56節)「お前も」(58節)「確かにこの人も」(59節) とパウロを名指しします。このような指摘の後に「主は振り向いてペトロを見つめられた」(61節) 時のパウロの無力感、罪意識を感じられると良いと思います。

知識としてでなく、実感として自身の罪の深さと罪に対する時の無力さを覚えることが目的ですから、多少感情的、情緒的な語り口で罪について語ることはむしろ必要かもしれません。

しかし、罪の深さと人の無力さの強調は速やかに神の救いに向かわなければなりません。特に聖書の知識や理解力が弱い子どもたちに対して、罪の指摘だけで話が終ったり、救いについては暗示するだけで終ってしまうと、自己評価の低下や、教会から責められていると感じさせてしまいかねません。罪について、人の無力さについて指摘した後には、ただちに明確に（しかし、主題を妨げることなく)救いの存在を指し示す事が大切です。自己を見直すきっかけになるのと同時に、救いに向かう希望を持つことができればふさわしいでしょう。

(長田詠喜)

# 11月22日　完全な堕落　キリストの贖罪　　説教展開例

テキスト　　ルカによる福音書 22章54～62節
教理問答　　子どもと親のカテキズム 問24

**〔単元のねらい〕**

私たち人間が罪を負う者であり、どんな人であってもその影響を免れないこと、かえってどんな人がどんな努力を払っても自分自身を罪の影響から救うことはできないばかりか、罪を重ねてしまうことを信仰者ペトロの弱さを通して確かめ、その弱さを自分自身の弱さとして実感する。自身の罪に対する無力さを実感することで、救い主による救いの必要を感じられるようにする。

## 弟子ペトロの失敗

イエスさまが十字架につけられる前の晩、最後の晩餐の席で、イエスさまは弟子たちの中にご自分を裏切る者がいるとおっしゃいます。ところが弟子たちは、そのイエスさまの言葉に、「いったいだれが、そんなことをしようとしているのか」(23節）と自分以外の人に押し付けようといたします。更にイエスさまは、一人が裏切るだけでなく、弟子たちがみな信仰を失うほどの危機に会う事を予告し、シモン・ペトロに「あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(32節）と指示いたします。ところがこの予告に対しても、ペトロは「御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」(33節）と言い切っています。ペトロをはじめ弟子たちは皆、自分たちがイエスさまを裏切ったり、離れてしまったりする事など決してないと思っていたのです。

確かにペトロは、最初にイエスさまの弟子になり、それからずっと最も近くでイエスさまの働きを見続け、最も丁寧に教えていただいておりました。むしろイエスさまもペトロの事を信頼しておりましたから、この時ペトロに、他の兄弟たちを力づけるようにと指示されたのでしょう。

しかしペトロは、このイエスさまの言葉が不満でした。これまでペトロがイエスさまに従って来たのは、楽しい時、嬉しい時ばかりではありません。辛い事や困難な事も経験しました。失敗をしたり、イエスさまから叱られたこともありました。それでも、イエスさまに従いつづけ、第一の弟子として他の誰よりもイエスさまのお近くにおり、彼ら数人だけが目撃した奇跡も少なくありませんでした。イエスさまに従いつづけ、そのお姿を見守りつづけ、イエスさまの働きをいちばん助けて来たのは自分であるという自信があったのでしょう。これから先も、たとえ、イエスさまが命の危機に陥っても、必ずついていくことができる。もしかしたら、これまで以上にイエスさまを助ける事だってできるかもしれない。そんな覚悟を口にしたのは、決して嘘ではなく、本当にそうやって従っていこう、お助けしようと願ったのでしょう。

ところが、その夜のうちにイエスさまが捕らえられますと、弟子たちは皆バラバラになってしまいます。ペトロはかろうじて、イエスさまの後をついて、イエスさまが捕らえられている大祭司の屋敷まで行きますが、遠く離れて、ばれないように屋敷の中庭に紛れ込む事しかできませんでした。もし見つかれば、自分もイエスさまと一緒に捕まってしまうかもしれない。そう思うと庭に紛れ込むこと自体とても危険な事でしたが、ペトロは、なんとかイエスさまの様子を探ろうとしておりました。イエスさまの後をついていかなくてはならない。もしかするとイエスさまを助け出すチャンスがあるかもしれない。その時には何としてでも自分がイエスさまをお助けしなければならない。そんな期待も持っていたかもしれません。

ところが、そんなペトロを打ち砕くような出来

事が起こります。夜の闇の中、たき火に照らされて座っているペトロを、人びとが見とがめます。「この人も（あのイエスと）一緒にいました」「お前もあの連中の仲間だ」「確かにこの人も（あのイエスと）一緒だった。ガリラヤの者だから」ペトロは恐ろしくなり「知らない」と言い張ります。三度もくり返して、はっきりと、自分はイエスさまとは関係ない。知らない。分からないとイエスさまを拒絶するのです。つい数時間前には「御一緒になら死んでもよいと覚悟しております」と言っていたその口で、はっきりとイエスさまを知らないと断言したのです。イエスさまが予告したとおり、「鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないという（34節）」そのとおりになったのです。イエスさまはまるでそのペトロの声が聞こえていたかのように振り向いて、遠くから、しかしはっきりとペトロを見つめられました。その時ペトロは気づいたのです。自分はイエスさまに従って来たといいながら、まるでそれが自分の力、自分の手柄のように考えていた。自分はそんな力を持たない、そんなに立派な者ではない事を忘れて、まるで自分の力でイエスさまに従って来たかのように思い、むしろ自分がイエスさまの宣教を支え助けているかのようにさえ思っていた。けれどもそうではなかったのです。ペトロはイエスさまに招かれ、手取り足取り教えられ、ようやくイエスさまの後に従って来ることができたのでした。何も偉いわけでもない、何も優秀なわけではない、ましてやイエスさまの働きを支えたり助けたりなどという事はできるはずがなかったのです。自分がどんなに威張っていたか、自慢していたか、そのことに気づいてペトロは激しく泣きました。本当に反省した時、自分が悪いことが判った時に、大人でも涙を流すことがあるのです。

皆さんは、この時のペトロさんをどう思いますか？　大人なのに恥ずかしいとか、嘘をつくなんてひどいとか感じるでしょうか。けれども、ペトロさんがした失敗は、皆さんも、皆さんだけでなく、私や他の大人の人も、全員がしてしまう失敗です。

私はまじめにお話を聞けるから、お手伝いができるから、嘘をつかないから、だから私は神さまの子どもとして素晴らしいんだ。もし私たちが少しでもそんなふうに思うのでしたら、それはペトロさんと同じ失敗をしています。まじめに頑張ることは良いことですが、その頑張ったことで神さまや他の人に自慢できるか、天国に入れるかというとそんなことはないのです。

先週私たちは礼拝の中で「私も神さまの御前に罪人です。神さまの怒りと裁きを受けなければなりません」と学びました。それは、私たちがどんなに頑張ろうと思っても、もし頑張ることができたとしても、それは何も神さまの助けにならない、自分を救うことにはならないということなのです。

けれども、失敗を叱られてばかりではありません。私たちが本当に失敗して悲しむ時、イエスさまは私たちを見つめてくださいます。ペトロが失敗した時に、イエスさまは、振り返ってペトロを見つめられました。その時のイエスさまは、ペトロを叱っていたのではありませんでした。ペトロが、自分は罪深い人間であること、イエスさまを助けたり、自分を救ったりすることなど決してできないということに気づいた時、イエスさまは優しくペトロのことを見つめてくださいました。失敗ばかりして、罪を犯す人間のために、イエスさまは十字架についてくださいました。自分が罪人であることに本当に気づいた時に、私たちはイエスさまの救いを本当に感謝することができるのです。

（長田詠喜）

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙 7章19節

わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。

# 11月22日　完全な堕落　キリストの贖罪　　小学科下級

**ルカ22:45～62**

①なぜ、ペトロは「遠く離れて」従ったのでしょうか？

②女中に指摘された時の、ペトロの気持ちはどうだったでしょうか？

③ペトロを見つめるイエス様の目はどんな表情だったと思いますか？

④あなたがペトロだったら、人々に聞かれたとき、どうしたと思いますか？

⑤この話を通して感じたことを分かち合いましょう。

**■□案内者のために□■**

案内者の頭の中にはルカ22:31～34がありますが、知らない子どももいることに注意してください。

# 11月22日　完全な堕落　キリストの贖罪　　中学科

**ルカ22:45〜62**

①人々はイエスを捕らえて、どこにつれていきましたか？

②ペトロはその時、どうしましたか？

③なぜ、「遠く離れて」従ったのでしょうか？

④ペトロの３度の答えを挙げてください。

⑤女中に指摘された時の、ペトロの気持ちはどうだったでしょうか？

⑥59節「１時間ほどたつと」とありますが、この1時間、ペトロは何を考えていたと思いますか？

⑦61節、イエス様は振り向かれました。イエス様には、ペトロが人々と話している声が聞こえていたと思いますか？

⑧なぜ、イエス様は振り向いたのでしょうか？

⑨ペトロを見つめるイエス様の目はどんな表情だったと思いますか？

⑩なぜ、ペトロは激しく泣いたのでしょうか？

⑪あなたがペトロだったら、人々に聞かれたとき、どうしたと思いますか？

⑫ペトロに対するイエス様の気持ちを考えてみましょう。

⑬この話を通して感じたことを分かち合いましょう。

# 11月29日　救い主の約束　　聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書 9章9〜13節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問25
参照教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問20

問25　神さまは、このような罪人となった私たちを、ほろびるままにお見捨てになりましたか。
答　いいえ。神さまは、私たちをあわれんで、救い主によってご自分の子どもに回復しようと、御心のままにあらかじめおさだめになりました。
この救い主によって、神さまは私たちを罪とほろびから救い出してくださいます。

**〈聖書テキストの解説〉**

ここは、主イエスが徴税人マタイに出会い、「わたしに従いなさい」と招かれた場面。と同時に、カリラヤ湖周辺における律法学者・ファリサイ派との対立、その二つ目の場面。

**Ⅰ　徴税人マタイの召命**

福音書は、徴税人マタイの召命について、そこにあったはずの驚きや感動というマタイの内面については何も記さない。この福音書が記すことは、主イエスが (1)「通りがかりに」に、マタイを (2)「見かけて」、(3)「わたしに従いなさい」と声をかけられたこと。その声に、マタイは (4)「立ち上がって」従ったことだけである。

**(1)「通りがかりに」**

福音書がこのように記すのは、マタイが座る収税所が道路に面していたから。主イエスは、何かのついでに収税所に立ち寄ったのではない。

**(2)「見かけて」**

「見かけて」という言葉からは、ともすると、“たまたま”、“ちらっと”という印象を受けるが、ギリシア語「ホラオー」は普通、単に「見る」という意味で使われ、そうであれば、主イエスはここでしっかりとマタイを見ておられることになる。

**(3)「わたしに従いなさい」**

この言葉をもって主イエスはマタイを捉える。それは一方的なもの、独占的なものであり、そこに恩寵がある。主イエスはマタイを召す理由を一切語られない。ただ一言、この強烈な招きの言葉を放たれ、マタイの反応を待たれる。

**(4)「立ち上がって」**

マタイは、主イエスの言葉に応え、座っていた収税所の椅子から立ち上がった。

そこには二つの意味がある。第一に、「徴税人」をやめたということ。一度やめれば、二度とその職務に戻ることはできない。その決意がここにはある。第二に、主イエスと共に在る新しい生に生き始めたということ。マタイは過去を断ち切り、主イエスにかける、新しい生へと立ち上がった。

以上、このマタイの召命記事には、主イエスの弟子のなり方とも言うべき、その要素が簡潔にあらわされている。私たちも聖書の御言葉を通して、同じことを経験する（した）。すなわち、それは主イエスが私たちに迫り、見つめ、「わたしに従いなさい」と声をかけてくださり、その声に立ち上がるということである。礼拝において、その主イエスの声を聞き続けたい。響かせ続けたい。

**Ⅱ　ファリサイ派との対立**

徴税人をやめたマタイであったが、周囲はそう見ない。過去を断ち切るということを周囲はそう簡単にはゆるさない。徴税人はとかく嫌われがちな存在であった。その理由はおもに二つある。

一つは、徴税人が、その地方の「公務員」ではなく、ローマ帝国に雇われた「民間業者」であったこと。当時、パレスチナ地方を支配、統治していたローマ帝国は、税金の回収を中央（ローマ）から直接、役人を派遣して行うのではなく、現地の事業者に委託して行っていた。そこには、現地からの不満を幾分かでも分散させる狙いがあった。その狙いはある程度成功し、人びとの苛立ちはまず徴税人へと向けられた。人びとは、徴税人を、自分たちを苦しめるローマ帝国に味方する「裏切り者」と見なし、また、特に、宗教者たちは、

異教の国・民ローマと頻繁に接触する「汚れた者」と嫌った。

もう一つの理由は、徴税人のなかに、回収した税金のなかからピンはねをし、私腹を肥やす者がいたこと。徴税人のなかには教養のある者が多かったが、その教養が悪用され、規定以上の税金を、ローマの権威を傘に多く集め、ふところに入れる者たちが多くいた。人びとはそのことに気づいており、徴税人を「盗人」と嫌った。

そのような徴税人であったマタイと、主イエスが共に食事をすることが問題視された。ファリサイ派は、その名前の意味「分離した者」が示すとおり、日々の生活のなかで、「汚れ」から離れて生きることに人生をかけていた人びとである。彼らは、「汚れ」である徴税人と罪人を嫌った。

以下、主イエスとファリサイ派とのやりとりについて、三点のことに注目したい。

**(1) ファリサイ派の嫌悪**

ファリサイ派は、主イエスが徴税人や罪人と一緒に食事をすることが理解できなかった。ここで使われている「罪人」という言葉の意味は広い。犯罪人や娼婦の他に、ファリサイ派が語る律法の説明が難しく理解できない人びと、結果、律法に違反しているとみなされた人びとも含まれていた。ファリサイ派は、人びとを神の愛に招くことよりは、離すために、律法を用いる傾向があった。

**(2)「わたしが求めるのは憐れみ」**

そのようなファリサイ派に対して、主イエスは、ホセア書6章6節の御言葉をもって教えられた。注目すべきは、「憐れみ」という言葉である。ホセア書の方では、「愛」と訳されている。そこに使われている「ヘセド」というヘブライ語は、まず神から人間へと注がれる恩寵をあらわす語であり、そして、その恩寵に信頼する人間の心をあらわす語であり、神と人間との愛の交わりをあらわす豊かな語である。主イエスは、その「ヘセド」を学ぶようにファリサイ派に教えられた。

神は「ヘセド」をもって、罪人をも招かれていること（その招きを主イエスは食事を共にされることであらわされている）。そして、罪人が、その招きに、信頼して、「ヘセド」をもって応えること、そのことこそを神は喜ばれること。大切なことは、見せかけのふるまいではない。立派な行いをすることではない。神の招きを知り、心から応え、立ち上がることであることを主イエスは示された。

**(3)「わたしが来たのは」**

そのために、主イエスは来たと言われる。「正しい者はいない。一人もいない」（ローマ3:10）。すべての人が、神の御前に罪人。主イエスはそのすべての罪人に、神の「ヘセド」を伝えるために来られた。その罪人が立ち上がり、神に信頼して歩む出すために来られた。人を分けるのは、神の御前に正しいかどうかではない。主イエスの言葉に信頼するかどうか、主イエスを通して大きく開かれた神の招きに応えるかどうかである。この主イエスの呼びかけに、私たちの救いの道がある。

**〈子どもカテキズムの解説〉**

**Ⅰ　私たちをあわれんで**

神が私たちに向けられる思いはただ憐れみである。愛である。慈しみである。その思いのもとに神は時に怒られ、試練をお与えになることもある。しかしすべては神の温かい思いに包まれている。そこに私たちの信仰・希望・愛がある。

**Ⅱ　ご自分の子どもに回復しようと**

神は、憐れみをもって、人間をご自身に「かたどって」創造された。その存在は、「極めて良かった」。今、私たちの目に、人間の姿、また自分自身の存在がどう見えようが、しかしそれは、もともと極めて良かったものである。その良さを、神は私たちの手にも取り戻させようとしてくださる。主イエスにおいて、新しくされた人とは、創造の日の「良さ」、人間存在のすばらしさを、回復させられた人である。そして、神の御子主イエスのもとで、「神の子」とされた人のことである。

**Ⅲ　御心のままにあらかじめ**

私たちは、救いに“たまたま”、あるいは“運良く”招かれたのではない。神は、私たちを、その生れる前から、憐れみにおいて、捉え、見つめておられた。それゆえに、私たちの救いは揺るがない。私たちが神を愛する前に、神が私たちを愛し、救い出すことを定めておられたので、神と私たちの結びつきは何者にも消せない。

**Ⅳ　この救い主によって**

神の御子なる主イエス・キリスト、この方以外に、私たちの救い主はおられない。　（柏木貴志）

11月29日　救い主の約束　　説教展開例

テキスト　　マタイによる福音書 9章9〜13節
教理問答　　子どもと親のカテキズム 問25

**〔単元のねらい〕**

子どもたちには、主イエスの言葉を通して、神様の選びと招きの大きさに触れてほしい。そして、自分の小ささに気づいてほしい。それは自分に与えられている賜物を過小評価することや、また自分の存在に卑屈になることではない。自分の小ささを通してあらわされる神様の大きな愛に触れてほしい。その大きな愛の中で、自らの罪、主イエスを通してゆるされる罪を見つめる勇気を育んでほしい。きっと、その勇気が、他者を認め、受け止め、またその他者を神様の愛へと招く、柔らかい思いを培うはず。

# イエスさまは、ずっとみんなのお友だち

**Ⅰ　はじめに**

みなさん、おはようございます。今日も一緒にイエス様のお話を学びましょう。

みなさん、先週の一週間は楽しかったですか？

ずっと楽しかったという人もいるでしょうし、嫌なことや悲しいがあったという人もいるでしょうね。もしかすると、お友達を傷つけてしまった人、ゆるせないことがあった人、あるいは、お父さん、お母さんの言うことを、うるさいなあと、ちゃんと聞くことができなかった人もいるかもしれません。みなさん、どうですか？ 少し手を胸に当てて、目を閉じて、考えてみましょうか。この一週間はどんな一週間だったか。みんなはどんなことをしたり、お話をしましたか？

**Ⅱ　「正しい者はいない」**

改めて、どうですか。この一週間、ずっと自分は正しいことをし続けた、おうちのお手伝いもちゃんとした、宿題だって忘れなかった、みんなに優しくした、大丈夫だという人はいますか。

逆に、あれも、これもと、今、心がチクチクと痛くなっている人もいるかもしれません。

その人は、「罪人」ですね。そんなこと言われるとドキッとしてしまいますね。でも、聖書にはこんなふうに書いています。「正しい者はいない。一人もいない」(ローマ3:10)。

なんと、聖書は、みんなが、大人も子どもも、先生もみんなも、罪人だ。正しい人は一人もいないと書いています。みんなが、心にチクチクと痛みを覚える人たち。あんなことやらなければいいのに、言わなければいいのに、でもしちゃうのが人間なんだと聖書は教えています。

じゃあ、そのままでいいか。よくないですよね。よくないと私たちは思っている。心にチクチクと痛みがあるのは気持ち悪いとも思っている。

**Ⅲ　徴税人マタイ**

今日のお話にも、そういうみんなと同じ「罪人」であるマタイさんが出て来ていました。

マタイさんは「徴税人」というお仕事をしていました。「徴税人」というのは、みんなから税金を集める人たちなんだけれど、どうやらただ集めていたのではなかったようです。「徴税人」の中には、悪い人もいて、決まったお金よりも、もっとたくさんのお金を集めて、ずいぶんとお金持ちになってしまう人がいました。それで、みんなから嫌われていたんです。あいつは本当の「罪人」だと。

でもね。イエス様は、そういう「徴税人」のマタイさんのところにやって来て、マタイさんをじっと見つめられるんです。そうして、言われたんです。「わたしに従いなさい」と。わたしと一緒に生きていきましょうと。イエス様は、「罪人」マタイさんのお友達になろうとされる。

マタイさんは、よっぽど嬉しかったんでしょうね。やったあ!! とばかりにすぐ立ち上がって、

「徴税人」のお仕事をやめてしまいます。イエス様と一緒に生きていくことに決めたんですね。

でも、そんなマタイさんのことを、まだ悪く言い続ける人たちもいました。ついでに、その人たちは、そのマタイさんとお友達になったイエス様のことも悪く言い始めていました。

## Ⅳ　罪人を招く

その人たちにイエス様はこんなふうに言われました。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(9:13)。

マタイさんのことを悪く言っている人たちは、自分たちは「正しい人」だと思っていました。自分は、「徴税人」のように、人からお金をだまし取っていない。神さまの決まりだってちゃんと守っている。自分たちはなんて正しい人たちなんだと。

あれ!? でも、人のことを悪く言う人は本当に「正しい人」なのかな？ 違うよね。本当に「正しい人」、そんなふうに胸を張って言える人は一人もいないのでした。み～んなが「罪人」。

でも、イエス様は、その「罪人」のために、わたしは来たんだ、みんなに会いに来たんだと言われる。それは、その「罪人」が誰も神さまに見捨てられていないんだということを知るためにです。

神さまは、「罪人」が、あんなこともしてしまった、こんなこともしてしまったと、ちゃんと悪いことに気づいて、神さま、助けてくださいとお願いすることを喜んでくださるお方です。そのことを、みんなが知るために、伝えるために、やって来たんだと言われます。

だから、みんなが「罪人」で大丈夫なんです。むしろ、自分は「正しい人」で、悪いところは一つもないって言い張ることを、神さまは悲しまれます。私たちは、気づかないうちに、お友達を傷つけたり、お父さんやお母さんを悲しませたりしてしまっています。そういう一つ一つのことに気づける人になること、神さまにごめんなさい、お友達にもごめんなさい、そう言える優しい子になることを神さまは喜んでくださいます。

それはとても勇気のいることですけれども、でも、イエス様がみんなの勇気になってくださいます。イエス様はみんなのお友達です。

みんなが、イエス様のことを知る前に、イエス様は、みんなのことを見つめられて、じっと大切に見つめられて、お友達になろうと決めておられました。みんなが「罪人」であっても、悲しいことがあっても、とにかくみんなが大好きだ、ずっと一緒にいて、いつまでも守ろうと決めておられました。イエス様は一度、決めたことを絶対に変えられません。誰が何と言おうと、どう見ようと、関係ありません。イエス様は、ずっとみんなのことを大切な人として見つめ続けてくださいます。これからもずっとそうです。そういうイエス様の大きな愛情のなかで、そういうイエスさまとずっとお友達から大丈夫だと、一つ一つ、少しずつ自分の、「罪」を、うまくいかなかったこと、失敗したことを見つめていきましょう。

先生もまだその途中なんですけれど、一緒にイエス様に守られながら、悪いところを少しずつよくしていきましょう。

それから、お友達のこともゆるしてあげましょう。みんな、同じ「罪人」、同じイエス様のお友達、同じ神さまの子どもなんです。みんなが失敗することもあれば、お友達が失敗することもあります。ゆるしてあげましょう。ゆるしてもらいましょう。そうやって、みんなで、イエス様に守られて、歩んでいきましょう。

## Ⅴ　おわりに

さあ、新しい一週間が始まりました。神さまの、イエス様の大きな愛情を、いっぱいっぱいに受け取る週間です。また、悪いことをしちゃうかな。心配はいりません。み～んながお祈りしています。なんたって、イエス様がついています。いつも心にイエス様を思い浮かべながら、一日一日を、大切に歩んでいきましょう。　（柏木貴志）

---

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 9章13節 b

わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。

---

## 11月29日　救い主の約束　　小学科下級

**マタイ9:9〜13**

①登場人物を挙げてください。

②「私に従いなさい」と言われたマタイは、どうしましたか？

③「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」とありますが、ファリサイ派の人々は何が言いたかったのでしょうか？

④あなたは、自分自身が「正しい人」「丈夫な人」「病人」「罪人」のどれに当てはまると考えますか？

⑤神様は、罪人に対してどうされる方ですか？

**■□案内者のために□■**

中学科質問⑥についてはホセア書6:6、ミカ書6:8などを参考に。事前によく学び黙想することをお勧めします。

## 11月29日　救い主の約束　　中学科

**マタイ9:9〜13**

①登場人物を挙げてください。

②時刻は何時頃だったと思いますか？

③「私に従いなさい」と言われたマタイは、どうしましたか？

④徴税人や罪人が大勢「やって来て」とありますが、なぜ、彼らはやって来たのでしょうか？

⑤「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」とありますが、ファリサイ派の人々は何が言いたかったのでしょうか？

⑥「私が求めるのは憐れみであっていけにえではない」とはどういう意味だと思いますか？

⑦「正しい人」とはどういう人でしょうか？

⑧「丈夫な人」とはどういう人でしょうか？

⑨「病人」とはどういう人でしょうか？

⑩あなたは、自分自身が「正しい人」「丈夫な人」「病人」「罪人」のどれに当てはまると考えますか？

⑪神様は、罪人に対してどうされる方ですか？

## 12月6日　二性一人格　聖書黙想

テキスト　ヨハネによる福音書 1章14〜18節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問26
参照教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問22
ハイデルベルク信仰問答 問16,17

問26　私たちを、罪とほろびから救い出してくださる救い主とはだれですか。
答　イエス・キリストです。この方は、父なる神さまの独り子であり、まことの神さまです。また、私たちの救いのために、聖霊によっておとめマリアより罪のない方として生まれ、まことの人となってくださいました。イエスさまは、まことの神さまであり、まことの人です。

**〈はじめに〉**

カテキズムは、「イエスさまは、まことの神さまであり、まことの人です」と語ります。

今日のテキストである、ヨハネ福音書1章14節から18節を通して、神さまと共におられた、神さまの独り子が、低くへりくだって、私たちのところに来てくださったお恵みを伝えましょう。

救い主が、どうしてまことの神さまでなければならないかは問27で、どうしてまことの人でなければならないかは問28で、取り扱われます。また、イエスさまが、イエス・キリストと呼ばれる理由については、問29で取り扱われます。また、イエスさまが低くへりくだされた状態については、問30で取り扱われます。

それで今日のテキストでは、できるだけカテキズムの流れを先取りしてしまわないように注意することが必要です。

**〈聖書テキストの黙想〉**

「言（ことば・ロゴス）」は、1節から5節で語られているとおり、①初めから、②父と共におられ・働いた、③神です。そしてこの方の内に、④私たちを神の子とする命があり、⑤この命に与るときにのみ、私たちの暗闇が光に変わります。この「言（ことば・ロゴス）」は、イエスさまです。

イエスさまが、「言（ことば・ロゴス）」であると言われる理由は、18節で語られているとおり、「いまだかつて、神を見た者はいない」のに、「父のふところにいる独り子である神」が私たちのところにまでおいでくださったことによって、決定的な仕方で「神を示された」からです。それは、「わたしを見た者は、父を見たのだ」（14:9）と言い得るほどに決定的な、父なる「神を示された」行為、神さまの啓示です。それほどに神さまが示されたとは、別の言葉で言うと、暗闇に閉ざされていた私たちが、神さまを知り、愛し、信じる道が開かれたということでしょう。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」とあります。神さまの独り子であるお方が、私たち人間と同じ肉体を取って、私たちのもとにおいでくださいます。そのようになさらなければ、私たちには、父なる神さまに至る道が閉ざされていたのです。

閉ざされていたとは、私たち自身が、神さまに背いて、神さまに対して自分を閉じていた、ということです。けれども、イエスさまは「わたしたちの間に宿」ってくださいました。「宿る」とは、直接にはテントを張って、住み込む、ということです。

神さまに背き、神さまに対して自分を閉じ、暗闇に住んでいる私たちの只中に、イエスさまはご自分からおいでくださり、住み込んでしまわれるという仕方で、父なる神さまに至る道を切り拓き、造り出してくださいました。

この切り拓かれ、造り出された道で、私たちは「栄光」を見ます。栄光という言葉は、聖書の中にたくさん出てきますが、ヨハネ福音書では特別な仕方で用いられます。何とイエスさまは、いよいよご自分が十字架に死なれるときに、「人の子が栄光を受ける時が来た」（12:23、13:31,32）と

言われます。イエスさまにとっての栄光とは、罪人である私たちが、イエスさまを信じ、赦されて生きる者とされるために、ご自分のお命を献げることなのです。私たちが見る「栄光」は、私たちを赦し生かそうとする、イエスさまの愛です。

また私たちは、この道で、「栄光」の中に「恵みと真理」が満ちていることをも知らされます。この「恵みと真理」は、旧約聖書では「慈しみとまこと」と訳されている、聖書特有の言葉遣いです。この言葉が意味しているのは、私たちの側で契約に忠実でなくても、神さまは契約に忠実でいてくださる、ということです。私たちを赦し生かそうとするイエスさまの愛を突き動かしているのは、父なる神さまの恵みと真理、忠実、なのです。

恵みの契約の中で、私たちがイエスさまを信じ、神さまの子どもとなって生きることができるように、神さまはあくまでも契約に忠実でいてくださいました。そして神さまが遣わされたイエスさまは、私たちの罪が赦され、生きる者となるために、十字架に死なれることを喜びとなさいました。

そのような驚くべき愛によって、神さまの独り子である「まことの神さま」は、ナザレのイエスという「まことの人間」となり、私たちの間に住み込んでくださったのです。

このイエスさまと出会うことは、「わたしを見た者は、父を見たのだ」(14:9) というイエスさまの御声を確かに聴くことと同じです。

**〈子どもカテキズムの解説〉**

最初に書きましたが、関連する問答である問27、問28、問29、問30で教えられることと重なり合わないように、ここでは特に「父なる神さまの独り子であり、まことの神さま」である方が、「私たちの救いのために……まことの人となってくださいました」という部分に焦点を当てています。

それで、この問26を通して、子どもたちに知って欲しい聖書の真理は、①私たちの側から神さまを知り信じる道は閉ざされていたこと、②父なる神さまの独り子が、神さまのもとから、私たちのところにおいでくださることによって、道が開かれたこと、③そして、その道は、父なる神さまの契約への忠実と、イエスさまが十字架を栄光としてくださることによって、確かなものとなったこと、です。　（安田直人）

12月6日　二性一人格　説教展開例

テキスト　ヨハネによる福音書 1章14〜18節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問26

**〔単元のねらい〕**

ここでは特に「父なる神さまの独り子であり、まことの神さま」である方が、「私たちの救いのために……まことの人となってくださいました」という部分に焦点を当てています。

それで、この問26を通して、子どもたちに知って欲しい聖書の真理は、①私たちの側から神さまを知り信じる道は閉ざされていたこと、②父なる神さまの独り子が、神さまのもとから、私たちのところにおいでくださることによって、道が開かれたこと、③そして、その道は、父なる神さまの契約への忠実と、イエスさまが十字架を栄光としてくださることによって、確かなものとなったこと、です。

# 私たちのところに来てくださったイエスさま

小さい頃、お祈りの仕方を、教えてもらったことがあります。皆さんは、どんなふうに教えてもらっていますか？

先生が教えてもらったお祈りの仕方は、まず聖書を読んで、それからお祈りをしなさいというものでした。お祈りは、神さまとお話をすることです。そのとき、まず神さまの御声を聞いて、御声に答えて、罪を告白したり、感謝したり、お願いをしたりするといいですよ。

本当にそのとおりだな、と今も思います。お祈りが自分勝手なお願いになってしまわずに、神さまとのお話になるためには、まず神さまの御声を聞くことが大切です。

そして、このお祈りの仕方という秘密は、実は、私たちがイエスさまを信じること全体にかかわっている秘密と同じだと思います。

聖書から神さまの御声を聞く。それから、聞いた御声に応答してお祈りをする。そうしないと、私たちのお祈りが、自分勝手なお願いばかりになってしまう。

同じことが、イエスさまがどのような方であるかを知り、信じ、父なる神さまの子どもとなって生きるときにも、起こります。

私たちから出発すると、自分に都合の良いイエスさまや、父なる神さまを造り出してしまいます。神さまの子どもとなって生きることについても、自分勝手な生き方を認めてもらいたいと考えることから始めてしまいます。

やはり、聖書から神さまの御声を聞く。それから聞いた御声を受け入れて、イエスさまがどのようなお方であるかを知り、信じ、父なる神さまの子どもとなって生きることが重要なのです。この順序が、「秘密」ですね。

さて、先ほど読んだ聖書の中に、「言（ことば）は肉となって」と書いてありました。

日本語で、普通に「ことば」というときには、「言葉」と書きます。「ことのは」、つまりさまざまなことばの葉っぱ、という意味です。

ですから、「葉」が付かない「言」というのは、ただ一言で、そのあらわしたいものをあらわす、究極の「ことば」だ、ということでしょう。

イエスさまは、そのような意味で、「ことば」そのものでいらっしゃるお方です。何をあらわす「ことば」なのでしょうか。

18節をもう一度見てみましょう。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」。

父なる神さまと、一緒におられた独り子である神さま。この方は、父なる神さまとの、深い愛の交わりの中に生きていらっしゃいました。

もちろん、神さまがお造りくださった人間も、神さまとの交わりを持つことができました。罪を犯して、神さまに背いた後も、神さまはなお呼びかけてくださり、語りかけてくださいました。

それでも、「いまだかつて、神を見た者はいない」というのは、本当のことです。神さまの独り子が、父なる神さまとの深い愛の交わりの中にいて、日々に御顔を仰ぎ、御声を聞いているのと同じように、「神を見た者はいない」のは、当然です。

それでも、父なる神さまを本当に知り、信じて、神さまの子どもとなって、神さまと一緒に生きることこそが、私たちの幸せです。私たちの側からは、神さまを見ることができないのであれば、どうすれば良いでしょうか。

イエスさまを見つめればよいのです。私たちの間に人間となっておいでくださり、そればかりか私たちの内に住み込んでくださったイエスさまは、「ことば」そのものとして父なる神さまがどのようなお方であるかを、はっきりとお示しくださいました。

イエスさまを見つめると、父なる神さまが分かる。はっきりと示される。どのように分かり、どのように示されるのでしょうか。

ひとつは、父なる神さまが、愛そのものであるということが分かります。

14節を見ると、イエスさまが私たちの間に人間となっておいでくださり、私たちの内に住み込んでくださったとき、「わたしたちはその栄光を見た」と書いてあります。

「栄光」という言葉は、聖書の中にたくさん出てきますね。神さまが神さまであることの重み。そういう意味もあります。でも、ヨハネ福音書では、イエスさまは、「栄光」という言葉を、こんなふうにお用いになるのです。

十字架に死なれる直前に何回も繰り返されたイエスさまのお言葉です。「人の子(イエスさま)が、栄光を受ける時が来た」。

私たちの罪が赦され、イエスさまの復活のお命をいただいて、神さまの子どもとされて生きること。そのことが起こるために、私は自分が十字架に殺されることを、この上もない栄光とする。イエスさまがおっしゃっておられるのは、そういう意味ですね。何という途方もない愛でしょうか。

そして、その栄光について、14節で更に、このようにも語られています。「それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」。

「恵みと真理」とは、父なる神さまがどういうお方であるかを示すものです。イエスさまの愛の背後には、父なる神さまがいらっしゃるのです。父なる神さまの「恵みと真理」とは、どんなに私たちが背いても、御声に耳を閉ざしても、父なる神さまの方では、私たちと結んでくださった契約に、忠実でいてくださった、という意味の言葉です。

イエスさまが十字架に進んで行かれ、ご自分のお命を献げられる。その深い愛の背後には、何とかして、私の子どもたちに、罪の悔い改めを与え、罪を赦し、私の前に子どもとして立たせたい。この契約への忠実が、あるのです。

こうして、神さまの独り子でありながら、私たちのところに来てくださったイエスさまを見つめると、イエスさまの「栄光（愛)」と、その愛を生み出した父なる神さまの「恵みと真理（契約への忠実)」が、鮮やかに見えてきます。

イエスさまは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ18:20）と教えてくださいました。

私たちの献げる礼拝の中心には、十字架に死なれ、復活なさったイエスさまが、聖霊によっていてくださいます。私たちは、礼拝で、このイエスさまから御言葉をいただき、このイエスさまに賛美と祈りを献げるのです。

そこには、必ず、神さまの独り子でありながら、私たちのために人となられたイエスさまの愛と、父なる神さまの恵みと真理が、輝き出ます。

（安田直人）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 1章14節

言葉は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。
それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

## 12月6日　二性一人格　小学科下級

**ヨハネ1:14〜18**

①モーセを通して与えられたものは何ですか？

②キリストを通して表れたものは何ですか？

③私たちが受けた「恵み」を挙げてみましょう。

④18節によると、「この方」の役割は何だと思いますか？

⑤あなたが今までに聞いたことのある「神様」とキリストの違いは何だと思いますか？

**■□案内者のために□■**

・ヨハネに言及すると混乱しそうなのであえて外しました。

・中学科質問⑨で「二性一人格」に導ければなお良いでしょう。

## 12月6日　二性一人格　中学科

**ヨハネ1:14〜18**

①「肉」を別の言葉で言い換えてください。

②私たちが受けたものは何でしょうか？

③モーセを通して与えられたものは何ですか？

④キリストを通して表れたものは何ですか？

⑤「この方の満ち溢れる豊かさ」という言葉から、何を思い浮かべますか？

⑥私たちが受けた「恵み」を挙げてみましょう。

⑦18節によると、「この方」の役割は何だと思いますか？

⑧キリストを表す言葉を探してみましょう。

⑨あなたが今までに聞いたことのある「神様」とキリストの違いは何だと思いますか？

## 12月13日　キリスト・真の神　　聖書黙想

テキスト　ガラテヤの信徒への手紙 4章4〜7節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問27
参考教理問答　中高生のための教理入門「主は羊飼い」17
ウェストミンスター小教理問答 問21,22
ハイデルベルク信仰問答 問16〜18

問27　どうして救い主はまことの神さまでなければならないのですか。
答　まことの神さまである方だけが、私たちの罪を完全につぐない、私たちを神さまとの交わりへと回復し、神さまの子どもとしてくださることがおできになるからです。

「イエス・キリストは神でなければならない」との主張は神学論争の賜物であって聖書の中に直接的にそう言われているわけではありません。聖書は端的にイエスを神の子と呼び、御子は永遠の昔から天の父と共におられた神です。その神であるお方が、低く下って来られて、地上で人間になったことが受肉の恵みです。ですから、「神でなければならない」第一の理由は、聖書がそのように証言しているからです。これは先立つ三位一体の教えの解説ですでに述べられたとおりです。

イエスがお生まれになった経緯もそれを証ししています。処女降誕の教理が大切なのは、それによって神が人となる奇跡が保持されているからです。イエス・キリストは神の救いのご計画を果たすために世に送られたエージェントですから、その出生に当たって罪の汚れが及ぶことないよう聖霊に守られていました。

イエスを人間の一人にすぎないとみなし、その神性を十分に評価できないのは、聖書に証言されたイエス・キリストの啓示の中から、不信仰のメガネで人間イエスの姿だけを選り分けようとするからです。真の神であるイエスが全き人になられたのは神の必然であって、私たち人間の側で考える「ねばならない」が先立つものではありません。

主イエス・キリストが「まことの神」であることは、その神としてのお働きを通して知られます。それはこの問答が記すとおりの救いのお働きです。

第一に、キリストは「私たちの罪を完全につぐなう」お方です。イザヤ書53章に預言された苦難の僕の姿は、福音書が記すイエス・キリストの生涯に成就しています。引照聖句にあるその10節では、イエスが神の御旨を果たすためにご自分を罪の償いの献げ物とした、と述べます。罪の裁きに服する人類全体の中で、神の御旨を予め知って自分からそれを果たすことのできる人間は一人もいません。神の救いのご計画を知る御子であるお方が外からやって来ること以外に、罪の贖いを果たすことはできません。ヨハネの手紙一2章2節にあるとおり、イエスは「全世界の罪を償ういけにえ」になりました。

「完全に償う」との言葉はヘブライ人への手紙10章14節から来ています。「キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさった」とあります。キリストの救いを信じて十字架の贖いに与ったキリスト者も、未だ罪を犯し続けながら神の御前を歩む罪人です。けれども、キリストが私たちの代わりに完全な犠牲となっていてくださいますから、私たちはキリストの故に完全であるとみなされます。そして、真の完成を目指す信仰の道の只中にあります。

第二に、キリストが神の力をもって私たちに働いてくださる恵みは、「交わりの回復」です。創世記が記すように、エデンの園で犯された違反の故に、神と人間との交わりは決定的に壊されました。その後も人間に対する神の憐れみは離れませんでしたけれども、罪を宿した人間は神の裁きの下にあり、度重なる契約の恵みによっても完全にはその壊れた絆は回復されませんでした。それを修復するための働きを、御子キリストが十字架で

果たされたわけです。使徒パウロはコロサイの信徒への手紙1章22節でこう告げています。「今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました」。

神との和解が成立して、人は再び神との交わりを回復しました。ルカ福音書にある放蕩息子の譬えを思い起こしてもよいと思います。罪を悔い改めた息子を迎えて、父は大いに喜んでいるわけです。その交わりは、まずは贖い主であるキリストとの交わりです。私たちはイエスの招きによってイエスの弟子となり、兄弟とされ、友と呼ばれます。その私たちのために主は死なれ、聖霊を送って私たちの命をご自身のものと一つにされます。イエスを私の救い主と信じる信仰は、私たちをイエス・キリストとの交わりに招き入れます（コリントー1:9)。

その主との交わりをもって、私たちは天の父と御子との親密な交わりにも加えていただきます。主イエスが天の父の御旨を知って、それをこの世に現そうと働いておられるのと同じように、信じる私たちもまた主イエスを通して父の望むことを知り、主と共にあって父の御前を歩みます。信じる者に与えられる永遠の命は、三位一体の神との交わりに生きる豊かな命です（ヨハネー1:3)。

第三に、イエスが神の子として私たちに与えてくださる恵みは、「神の子の資格」です。イエスを信じて、イエスとの交わりに招き入れられた信仰者は、主イエスと共に神の子とみなされます(引照聖句3参照)。イエスが神の子でなかったら、ここで言われる「神の子」とは例えでしかありません。しかし、イエスは真に神の子ですから、主イエスと結ばれた私たちも真に神の子です。「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです」（ヨハネー3:1)。罪人である私たちに初めからその資格があるわけではありませんでした。しかし、神は永遠の昔から私たちが神の子となるように計画しておられて（エフェソ1:5)、主イエスとの交わりに私たちを招き入れ、主イエスと共に天の父を見上げて「父よ」と呼ぶことのできる心を回復させて、私たちを神の国の後継としてくださいました。これらはすべて、イエスが真の神であるからこそ、私たちに与えられた恵みです。

純粋なキリスト論の子どもたちへの解説は、あまりに抽象的で理解するのが困難でしょう。これは新約の物語ではなく書簡に記された信仰の論理も同じです。ですから、論証に力を注ぎすぎないように注意して、主イエスの恵みに絞って語り、子どもたちが素朴な信頼を主イエスに向けることができるように導きたいところです。そのために本27問と28問は区別して、本問答ではイエスの神性だけを強調してもよいと思います。主イエスが神の子であるがゆえに、私たちはその尊さをいただける、ということを丁寧に伝えるよう心がけたいところです。（牧野信成）

12月13日　キリスト・真の神　　説教展開例

テキスト　ガラテヤの信徒への手紙 4章4〜7節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問27

**〔単元のねらい〕**

イエス様は私たちの神様であることを知ろう。そして、イエス様と共に天の父なる神様の子どもとされることの素晴らしさを分かち合おう。

# イエスさまは神さまです

イエスさまは神さまです、ってみんな本当に思っている？ では、イエスさまは人間です、ってこともわかっているかな？ どっちなんだろう、って迷うことはない？ そういうことを教会は昔から大切に考えてきました。それで今私たちが信じているのは、イエスさまはまちがいなく神さまです、ということ。それからイエスさまはまちがいなく人間です、ということ。その両方です。今日はその「イエスさまは神さまです」ということをお話しします。

イエスさまがこの世に姿を現したとき、周りの人びとはイエスさまのことを「ナザレのイエス」と呼びました。イエスさまがナザレという村で暮らしていたからです。つまり、誰もイエスさまが本当は神さまなんだということに気がつきませんでした。それも無理もないことかもしれません。というのは、イエスさまは大工のヨセフの子どもでしたし、イエスさまには弟や妹たちもいました。それに、ユダヤの人たちは、「人間は神さまではない」ということを聖書から厳しく教えられていました。だから、イエスさまがどんなにステキな人であったとしても、神さまだとは誰も思わなかったに違いありません。

でも、クリスマスのお話にあるように、マリアとヨセフは知っていたはずです。天使のお告げがあって、イエスさまは特別な仕方でお生まれになりました。それは、普通の生まれ方ではなくて、マリアさんは聖霊によって身ごもって、イエスさまを産みました。だから、みんなは知らなかったのだけれども、イエスさまが神の子であることは大きな秘密だったんですね。

でも、その秘密はお弟子さんたちに明かされました。イエスさまは天から送られてきた神の子でした。その神の子としての特別な力で、病気の人を治したり、湖の上を歩いたり、悪霊を追い出したりしました。初めはお弟子さんたちにもよくわかりませんでした。確かにイエスさまの奇跡はたくさん見たのだけれども、人間が神さまであるはずはありませんから、心から信じることができたのはずっと後のことです。また、福音書に出てくる律法学者やファリサイ派の人びとも、イエスさまを神の子とは認めませんでした。むしろ、そんないい加減なことを言う人間は許さない、と怒って、ついにはイエスさまを裁判にかけて、十字架で処刑してしまいました。けれども、イエスさまは死んで三日目に復活なさいました。天の神さまがイエスさまをよみがえらせて、イエスさまが神の子であることを証明されました。そうして復活したイエスさまにお会いして、弟子たちもイエスさまが神の子であることを本当に信じるようになりました。

ですから、イエスさまを信じて救われるかどうか、ということは、イエスさまを神さまと信じるかどうかにかかっています。では、イエスさまが神さまであることが、どんなに素晴らしいことかをお話しします。今日は「カテキズム」の問27です。まず、「まことの神さまである方だけが、私たちの罪を完全につぐなうことができる」とあります。私たちには罪があります。罪を犯さない人は地上にだれもいません。だから、誰もが自分

の罪のために死ななくてはなりません。私が死なないで済むように、私に代わって死んでくれる人はだれもいません。たとえ誰かがあなたを愛するために身代わりに死んでくれたとしても、あなたもまたいつか死ぬことには変わりがありません。本当にそれができるのは神さまだけです。そしてイエスさまが、まさにそのために十字架にかかって死んでくださいました。私が生きるために死んでくださるお方は神の子イエスさまよりほかにありません。イエスさまは私たちのために十字架で罪の罰を受けてくださいました。だから、私たちの罪は許されて、たとえ死んでも生きる、復活の命をいただくことができます。

イエスさまを神さまだと信じることができないうちは、天の神さまを知ることができません。イエスさまこそ、天の神さまの心を映すお方だからです。そしてイエスさまを信じて弟子になる人は、イエスさまとつながります。イエスさまの兄弟姉妹になります。イエスさまの友達になります。そうして、イエスさまは私たちを愛してくれます。私たちもイエスさまを愛するようになります。そうすると私たちも、イエスさまと一つですから、神の子です。本当は罪人ですから、神の子であるはずもありません。罪の子です。神さまに愛されていてもそれがわかりません。けれども、イエスさまと一つになれば、私たちは神の子になります。なぜなら、イエスさまが神の子だからです。私たちはいつも罪を犯してしまうのですけれども、天の神さまが私たちのお父さんですから、天のお父さんが、イエスさまと一緒にいる私たちを見て、許してくれます。「もうするな」と言って、また、やり直すことができるようにしてくれます。私たちと神さまとは家族みたいです。天のお父さまがいて、長男のイエスさまがいて、私たちがそこにいます。天の父や御子イエスさまはそして絶対に私たちを裏切りません。

そうしてイエスさまは本当の神の子ですから、私たちも本当の神の子にしていただけます。人間にはそんな力はありません。パウロ先生は言います。「あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです」(ガラテヤ4:7)。人間は神さまの奴隷なんかじゃありません。でも、人間は人間のことを奴隷にしようとします。アメリカやイギリスでは黒人が奴隷にされたことがありましたね。日本でも朝鮮人や中国人を奴隷のように扱ったことがありました。聖書の中にも奴隷は出てきますね。昔、イスラエルの人びとはエジプトで奴隷にされていました。そこから助け出してくれたのが、モーセを遣わした神さまでした。でも、聖書の神さまを知らないままだと人間は奴隷のままです。罪の奴隷です。死の奴隷です。本当の自由を知らないまま死んで行かねばなりません。けれども、イエスさまに出会って、イエスさまが十字架にかかってくださったことに感謝して、イエスさまの弟子になった私たちは、パウロ先生が言うように神さまの子どもです。「相続人」ってわかりますか？お父さんの財産を受け継ぐのは子どもですね。大抵は長男が家や土地や仕事を譲り受けて、お父さんの後継になるわけです。それと同じように、イエスさまは天の神さまの長男であり、後継です。そして私たちもイエスさまと一つですから、後継になるわけです。では、神さまが私たちに譲ることになる財産とは何でしょうか。それは神の国です。人間の罪が滅ぼされて、神さまの善い御旨だけが広がる世界です。それは、やがてこの世界が終わりにたどり着くところで、天に昇ったイエスさまとともに私たちのところにやってきます。その終わりの時、私たちはたとえ死んでいても、イエスさまのように復活して、天の父なる神さまから、神の国を、新しい世界を譲り受けます。神の子ですから、イエスさまと一つになって生きる私たちにはその権利があります。これらの素晴らしい恵みが私たちのもとに届くのは、すべてイエスさまは神さまであるからです。　　(牧野信成)

---

〔今週の暗唱聖句〕　　コリントの信徒への手紙一 1章9節

神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、
わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。

---

## 12月13日　キリスト・真の神　　幼稚科

**ガラテヤ4:4〜7**

①御子はどのような方法で遣わされましたか？

②神が御子を遣わされたのは何のためですか？

③私たちの身分は、何から何になりましたか？

④「奴隷」と「子」の違いを挙げてみましょう。

⑤「贖い出す」とはどういう意味でしょうか？

**■□案内者のために□■**

質問⑤（中学科質問⑧）については12月27日の聖書黙想を参考に。「贖い出す」「律法」など、子どもの生活になじみのない言葉が多いので、子どもたちに解る言葉に置き換える工夫を。

# 12月13日　キリスト・真の神　　中学科

**ガラテヤ4:4〜7**

①御子はどのような方法で遣わされましたか？

②なぜ、御子は律法の下に生まれたのでしょうか？

③神が御子を遣わされたのは何のためですか？

④私たちが子であることはどうやってわかりますか？

⑤私たちの身分は、何から何になりましたか？

⑥子であることで与えられる権利は何ですか？

⑦「奴隷」と「子」の違いを挙げてみましょう。

⑧「贖い出す」とはどういう意味でしょうか？

⑨どうすれば「相続人」になれますか？

# 12月20日　キリストの降誕　　聖書黙想

テキスト　　ルカによる福音書 2章1〜7節
教理問答　　子どもと親のカテキズム 問26
参考教理問答　　ハイデルベルク信仰問答 問15

## 〈聖書テキストの解説と黙想〉

### 1. 構造

(1) 歴史的背景（1〜3節）
(2) ヨセフとマリアの旅路（4,5節）
(3) 御子の誕生（6,7節）

### 2. 語句について

1節　「アウグストゥス」……もともとは皇帝の権威ある称号。この時には個人名として扱われるほどの有名なローマ皇帝。つまり圧倒的な権力者。当時の記録は、「全世界の救い主」と呼んでいた。

2節　「キリニウス」……アウグストゥスの信頼を得た政治家。この人物も伝記に出てくるほど有名。
「住民登録」……国家の主権者が主に徴税目的で、領土内の人口を確認するために度々行われた制度。

4節　「ダビデの家」、「ダビデの町」……メシアは「ダビデの子」から生まれるという預言（イザ9:6、エゼ34:23, 24、37:24等）を参照。「ルカの第一の目的は、イエスがベツレヘムにいたことと、彼がダビデ王家の系列にあったことを確証することにあった」（クラドック『現代聖書注解 ルカによる福音書』）とも言われる。

7節　「布にくるんで」……ここでいう「布」は「産着」のこと。
「飼い葉桶」……イザ1:3参照。

### 3. テキストの背景と方向性

ルカは、ある面では歴史家として歴史的背景を描き出すが、それは現代でいう時代・年代的正確さを求めてのことではない。彼はそれより、神の救いの歴史を描き出す詩人と言える。それは神が私たちの救いのためにご計画された真理を鮮やかに指し示す「福音書」記者の務めであった。そのためそれぞれの歴史的名称（固有名詞）は、救い主誕生に集中するための道具となる。

「皇帝アウグストゥス」の時代は、美徳によってもたらされた平和な世界として、その支配の黄金時代として宣伝された。紀元前13〜9年には、アウグストゥスに由来する平和のための大きな祭壇が建立された。また小アジアのギリシアの町々は、彼の誕生日（9月23日）を元旦とした。彼は、「全世界の救い主」としてあがめられ、プリエネ碑文には「神の誕生日は世界に良き訪れの始まりを印した」と宣言している（レイモンド・E・ブラウン『降誕物語におけるキリスト』）。

このような世界史の背景の中で、救済史は小さな土地へ向かい、乳飲み子を目指している。当該箇所の前半部分と後半部分の言葉は綺麗なコントラストとそこからの逆説を形作っている。つまり全世界の救い主は、「アウグストゥス」ではなく、この飼い葉桶に寝かされた御子である、と。そしてこれらの言葉の間を結んでいるのがヨセフとマリアの小さな旅路である。この神の言葉の中で、ヨセフとマリアは「初めての子」へと向かっている。

私たちも私たちの言葉は（むしろ私たち自身の存在は）、どこから来てどこへ向かうのかを吟味したい。

## 〈子どもカテキズムの解説と黙想〉

参照教理問答で挙げられている子どもカテキズム問26は、いわゆるイエス・キリストの二性一人格について扱っている。答の「……イエスさまは、まことの神さまであり、まことの人です」という締めくくりの言葉は、当該テキストとその背景を思い巡らすなら、「イエスさまこそ」という勢いが加味されてよいようにも思われる。

「まことの神」だからこそ、「まことの人」にな

ることができる。「まことの人」だからこそ、「まことの神」へと私たちを導いてくださる。

「真理」や「まこと」が見えにくい時代だからこそ、人はそれぞれに自分のまことの神や人やモノを「所有」しているのかもしれない。

この教理問答の引照聖句の一つヨハネ1:14には、独り子は「恵みと真理とに満ちていた」と書き記されている。旧約の伝統以来、まことは「恵み」と密接に結びついている。恵みは、神の自由のもとに私たちに与えてくださる神の義である(ローマ5:21)。これは御子の受肉によって、具体化された（ヨハネ1:16～18)。私たちは、単なる観念的な空を打つような言葉を信じているのではない。「罪とほろびから救い出してくださる救い主」、肉となった言「イエス・キリスト」を信じ告白している。

教会は、この世界の中でこの歴史的事実を告白し続けていく。

### 〈子どもたちと共に〉

ある子どもたちを教える立場にある方が、スマホを小さい頃からいじっていた子は、文章を読んでもなかなか想像ができないんです。そして一つの文章を読んだだけでも、疲れた～と言うんですと困った顔でおっしゃっていたことを度々思い出す。

言葉が通じない。分からない。知識としては、理解できるが想像できない。むしろ映像化され、視覚的に訴えやすいものがまことであるような錯覚に踊らされている現実が目の前にある。教師も例外ではない。このような環境の中で、私たちはただ批判するだけでなく、子どもたちと共に歩む姿勢が問われている。

御子は、あらゆるものに逆らって生まれたのではなかった。上記の時代背景の中で、そして「住民登録」に従っている両親のもとに、しかし「聖霊」によって（1:35）誕生した。世にありながら、しかし世とは全く違う視点に立つこと。世の言葉を用いつつ、それがどなたに用いられるのかを注意したい。「全世界の救い主」という言葉も、「神の誕生日は世界に良き訪れの始まりを印した」という宣言も、まさにまことの神であり、まことの人であるイエス・キリストにのみ当てはめられる言葉である。ここに堅く土台を据える時、世の言葉や動きに目が開かれ、それに抗う（プロテスト）勇気と力が与えられる。それは、小ささの中に、弱さの中に見出される福音である。

ある方は、「教会は、分かりきったかのようにイエス・キリストの御名をみだりに唱えている」と批判された。ときに教会も、教師も大きさの中に、強さの中に自らを見出す誘惑にかられてしまう。そこから祈りをもって御言葉に聴き、自由にされて愛する御子を子どもたちと共に見つめたい。この愛する御子のうちにこそ、私たちの居場所があった。宿屋ではなかった。この御子のうちにこそ、私たちが憩う安らぎがあることをまず語る者自身が味わいたい。

私たちは、子どもたちと共にヨセフとマリアになって、「初めての子」を目指して歩む旅路を重ねていく。　（片岡　継）

12月20日　キリストの降誕　　説教展開例

テキスト　　ルカによる福音書 2章1〜7節

**〔単元のねらい〕**

まことの神であり、まことの人であるイエス・キリストは、「私たちを、罪とほろびから救い出してくださる救い主」（子どもと親のカテキズム問26）である。そのお方がどういう状況で誕生されたのか、私たちが置かれている状況と重ね合わせながら、このお方の所にのみ、私たちの憩いの場所があることを覚えたい。

# 全世界の救い主の誕生

今日はクリスマスですね！　祝会やプレゼントが待ち遠しいかもしれませんが、この時は、目に見えないとっても大切なプレゼントをもらいましょう。そのプレゼントは、全世界で、どんな状況でも、そしてどんな人でも受け取れるプレゼントです。

うすうす気づいていると思いますが、それは御言葉です。神さまの言葉です。もっと言えば、イエスさまです！先ほど読んだ箇所には、まさにイエスさまが誕生された場面が最後に出てきましたね。

最初には難しい名前の人たちも出てきました。この最初に出てくる「皇帝アウグストゥス」という人は、とても偉い人でした。ローマという大きな国の一番偉い人でした。まさに「神」とまで呼ばれていた人です。ですから、この人の誕生日は(9月だったのですが)、お正月になってしまうくらい、みんながその日をお祝いしたのです。祝日になってしまう天皇の誕生日みたいですね。

その偉い皇帝アウグストゥスが、全領土の住民に命令を出しました。「住民登録」をせよ、という命令です。これはみんなから税金を集めるために、どれくらいの人たちが、どこにいるかという調査でした。今もみんながどこに住んでいるか、というのはこの町に登録されていますよね。そのような感じです。

ともかく、この時は、この住民登録のために自分の町へ帰らなければなりませんでした。休みの時の帰省ラッシュみたいに。その多くの人たちの中に、ヨセフさんとマリアさんがいました。もうこの時のマリアさんは、イエスさまを身ごもっていたのです。とても大変な旅だったと思います。そして、住民登録をしたベツレヘムという小さな町で（旧約聖書で預言されていたこの場所で)、イエスさまはお生まれになりました。このイエスさまのベッドは、飼い葉桶でした。なぜですか？それは、「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったから」です。

これが今日読んだクリスマスの場面です。みんなも降誕劇や映画などでも見たことがあるかもしれませんね。それを見てイメージすることも大切ですが、今日は最初に言ったように見えないプレゼント、イエスさまを受け取りましょう。テレビやスマホがなくてもこの聖書の言葉が開かれて、聴かれるところは、聖霊なる神さまを通して、イエスさまが私たちの心の中に現れてくださいます。なぜならこのお方こそが、「私たちを、罪とほろびから救い出してくださる救い主」だからです。この罪もほろびも、すぐには目に見えないことですね。私たちの心の状態と深く関わっているからです。

けれども、最初に出てきた皇帝アウグストゥスは、目に見える形で、「救い主」とわかる人でした。長く続いていた戦争（百年にもわたってローマ領を荒らしていた市民戦争）を終わらせることができたり、戦いのための神殿（ヤヌス神殿）を閉鎖したりもしました。ですから、この皇帝のおかげで、国はほろびの危機から救われて、平和が訪れ

たのです。多くの人たちは喜びました。とても素晴らしい皇帝だ！　この方こそ全世界の救い主だ！　と。そうしてまさにこの人は、「神」と呼ばれるようになり、人びとからあがめられたのでした。

でも聖書はそんなこと言ってませんよね。いくら素晴らしい皇帝でも、先生でも、神さまにはなりません。私たちと変わらない、神さまに造られた人です。もちろんだからと言って、こうした人たちの言うことを聞かないということではありません。ヨセフさんもマリアさんもこの皇帝の出した「住民登録」という命令に従いました。私たちは、皇帝や天皇など「人間を」あがめなさい、という命令には従い得ませんが、神さまの御心に適う範囲では、この社会のルールにそって歩んでいます。この時も平和を与えてくれた皇帝の命令だから、ということで多くの人は住民登録に行ったのでしょう。

そういう私たちにとっても変わらない、平和な日常で、でも一方で皇帝のような偉い人があがめられているような雰囲気の中で、イエスさまがお生まれになりました。私たちが今生活しているこの日常は、どんな雰囲気でしょうか。イエスさまは、全然目立たない、小さなベツレヘムという町の、宿も借りることのできない、そういう状況で誕生しました。「彼らの」と書いてあるとおり、ヨセフさん、マリアさん、イエスさまも「泊まる場所がなかった」のです。

しかしこの小さく誕生されたお方こそ、全世界の救い主でした。皇帝ではありません。この無力に見えるかもしれない救い主こそが、「罪とほろびから救い出してくださる」のです。

どんな人でも、私たちのうちに潜む真っ黒な罪は解決できません。私たち自身でもできません。神さま、イエスさまごめんなさい、と言いながら、また同じようなことを繰り返したりします。この深いほろびにつながる罪を解決してくださるお方は、ただお一人、イエスさまだけです。

イエスさまは、まことの神さまであるからこそ、まことの人となられました。聖霊によって、罪はない仕方で、しかしヨセフさんとマリアさんの子どもとしてお生まれになったのです。誰にも見向きをされなかったかもしれません。けれども、そういうまことの神さまでありまことの人であるイエスさまだからこそ、見向きもされなかった人に近づくことができたのです。事実この後、主の天使たちは、見向きもされなかった、羊飼いたちに「あなたがたのために救い主がお生まれになった！」（11節）と伝えます。

見た目にだまされてはいけません。偉いと呼ばれる人も、先生も、みんなイエスさまを必要としています。誰もイエスさまなんていらないと言える人はいません。それは、みんな罪人だからです。皇帝もどんな偉い人もやがて死にます。しかし死というほろびを超えて、本当の平和を与えてくださるのは、まことの神さまであるイエスさまだけなのです。私たちはこのお方を信じ、あがめます。このイエスさまが、私たちの罪を身代わりとして引き受けてくださるためにお生まれなさいました。このことは、感謝してもしきれません。住民登録はいりません。場所も、国も関係ありません。どんな状況に置かれた人でも、このお方を信じる人には、救いの平和が訪れるのです！

今このクリスマスの時、この御言葉を通して、祈りの中でイエスさまを見ましょう。このプレゼントを受け取りましょう。ここに留まりましょう。宿屋ではくイエスさまのもとに。その時、私たちの心にポッと明かりが灯り、イエスさまの光が、私たちの存在を通して輝いてきます。そしてそのことを認め合いながら、本当のクリスマスをみんなでお祝いしましょう！　（片岡　継）

---

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネの手紙一 4章14節

わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、
またそのことを証ししています。

---

# 12月20日　キリストの降誕　　小学科下級

**ルカ2:1〜7**

①書いている内容は、つくり話だと思いますか？ それとも事実だと思いますか？

②この夫婦はどんな人たちでしたか？

③みなさんのおうちではクリスマスをお祝いしますか？

④クリスマスで楽しみにしていることはありますか？ それは何ですか？

⑤クリスマスプレゼントで欲しいものはありますか？　それは何ですか？

⑥神様が私たちにくださったプレゼントを挙げてみましょう。

⑦あなたが神様からいただいたプレゼントのなかで、一番すばらしいと思うものは何ですか？

**■□案内者のために□■**

質問①については、必要であれば、ルカの冒頭を紹介しましょう。

# 12月20日　キリストの降誕　　中学科

**ルカ2:1〜7**

①書いている内容は、つくり話だと思いますか？　それとも事実だと思いますか？

②どの王の時代ですか？

③登場する夫婦の名前を挙げてください。

④この夫婦はどんな人たちでしたか？

⑤この夫婦が抱える問題は何でしょうか？

⑥みなさんのおうちではクリスマスをお祝いしますか？

⑦クリスマスで楽しみにしていることはありますか？ それは何ですか？

⑧クリスマスプレゼントで欲しいものはありますか？ それは何ですか？

⑨この夫婦は神様からすばらしいプレゼントをいただきました。それは何ですか？

⑩神様が私たちにくださったプレゼントを挙げてみましょう。

⑪あなたが神様からいただいたプレゼントのなかで、一番すばらしいと思うものは何ですか？

# 12月27日　キリスト・真の人　　聖書黙想

テキスト　ローマの信徒への手紙 5章1〜11節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問28
参照教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問22

問28　どうして救い主はまことの人でなければならないのですか。
答　神さまに背き、罪を犯し、神さまの怒りと裁きをまねいたのは私たち人間です。
救い主は、罪のないまことの人として私たちにかわって罪をつぐなう必要があったからです。

**〈聖書テキストの解説及び黙想〉**

ローマの信徒への手紙の5章1〜11節を取り扱う。

この箇所であるが、特に6節以下において、キリストが私たちの罪のために死んでくださったことをパウロは力強い筆致で語る。特に、9節においては、キリストが十字架上で死んでくださり、その結果、神の怒りから免れると語る。こうして、神と人との間に和解＝仲直りが実現し、神を信じるものは御子の命によって救われる（10節）。

このように、イエス・キリストにおいて、罪の赦しと神さまからの怒りの回避が起こるのは、キリストが救い主として、まことの神であり、まことの人であるからである。

キリストが救い主として十字架につけられた結果、神さまは罪の赦しをもたらした。キリストが、本来は罪人が犯した罪の刑罰を身代わりになってうけてくださったからである。これが、贖い（償い）である。贖いは、借金を返済するという意味もある。負債を返済するということ、とも言い換えられるだろう。神は、憐れみ深いお方である。しかし、それはただ単に刑罰を免除するという仕方において起こるのではない。神の義（正しさ）はあくまでも罪に対しての完全な贖いを要求する。ところが、人間は罪があるので、自分たちの罪深さの故に、自らの罪を償うことはできない。しかし、他の被造物によって肩代わりをさせるということもできない。罪に対する罰はただ罪人にだけ課せられる。しかも、その刑罰は無限の刑罰である。人間はその罪を有限であるがゆえに全てを負うことはできない。

こうして、人間が罪を償うということ、他の被造物が代理となって人間の贖いとなることは排除される。そうなると、人びとを救い得るのは、人間でありながらも、神さまのご性質を有するお方である。それは、人間であるのと同時に神であることを意味する。

イエス・キリストは、父なる神と本質が同じである、まことの神である。そのお方が、肉を取られたのは、まさにこうした救い主としての条件を満たすためであった。

人間の罪のために、神さまに負債を支払うお方は、罪なき人間でなければならない。それと同時に、すべての罪を背負いきる無限の方でなければならない。

こうして、救い主としてのイエス・キリストのお働きは、信仰者の罪を償うのに十分なものとなる。そして、そのために、キリストは人となられたのである。そして、十字架についてくださった。ここに、神の愛がある（8節）。なんとかして罪人を救いたいという神のあくなき愛は、神を人とするという、人間が思いつかないような仕方で実現した。

パウロは、信仰者における希望を雄弁に語る。それが、1節から4節まで。そして、その希望の根拠として、キリストの贖罪の御業（5〜11節）がある。キリストの贖罪は、私たちに対する神の愛であり、その神の愛を知っているが故に、神を誇りとすることができるのである。

**〈子どもカテキズムの解説〉**

問28は、それ自体独立した問答ではあるが、問26と27とセットで考えると良い。そうでないと、キリストがまことの人、ということは確認で

きても、それだけでは救いはなしえない。キリストがまことの神であること、人であることはセットである。説教においても、改めてキリストがまことの神であることに触れても良いだろう。前回からの繰り返しになるが、正しい理解のために繰り返すことは決して無駄ではない。

問28を正しく理解するために、キリストがまことの人であることを理解しなければならない。実際の説教で、こうしたことを詳しく話す必要はないかもしれない。しかし、説教者自身が確信をもって語るためにも、是非ともキリストが人間であること、罪を持たないことを確認したい。

### 1 キリストの人間性

キリストがまことの人間であることは、以下の聖書の記述から確認できるので、参考までに挙げておく。

(1) 肉体をとられた。これは、マリアから生まれたということからも明らかである（マタイ1:1)。

(2) 人格的に成長した。キリストは聖霊によってマリアから超自然的なかたちで誕生した。しかし、成長の過程は他の人びとと同じように育ったのである。それは、肉体的、社会的、霊的な面における成長である（ルカ2:40)。

(3) 肉体的特質
キリストは、人間がもっている弱さを経験された。それは、空腹（マタイ4:2)、疲れ（ヨハネ4:6)、渇き（ヨハネ4:7)。また、さまざまな喜怒哀楽の感情があったことがわかる。

### 2 キリストの無罪性

次にキリストの無罪性について、聖書からわかることをまとめておく。

(1) 聖霊により、処女マリアから生まれたということ。こうした出生の仕方で生まれることによって、人間のあらゆる遺伝的な腐敗から、守られた。

(2) 罪意識。キリストからは、ご自身が罪意識をもっていたということを見いだすことができない。また、他の人からも罪によって咎められることはなかった(ヨハネ8:46)。

(3) 直接の言及。聖書のいくつかの箇所で、キリストには罪がないことが直接言及されている（コリント二5:21、ヘブライ4:15、ペトロ一2:22、ヨハネ一3:5)。

こうした聖書の記述から、キリストが罪のない、まことの人であることがわかる。こうして、キリストは、救い主として、まことの人であり、まことの神であるという要件を満たされたのである。

### 〈子どもたちに対して〉

キリストがまことの人であるということは、これ自体はにわかに信じられないことであり、人間の理性を超えたものである。しかし、私たちの罪からの救いということを考えたときに、まさにキリストがまことの神であり、まことの人であることが求められる。キリストが、人となってくださったということは、無限なるお方が有限になったということである。ここに、神の愛がある。そしてその愛はこのお方が十字架につけられるという仕方で極致に達した。そのご愛を知ることは、子どもたちの信仰の土台でもある。　　（小宮山裕一）

12月27日　キリスト・真の人　　説教展開例

テキスト　ローマの信徒への手紙 5章1〜11節
教理問答　子どもと親のカテキズム 問28

**〔単元のねらい〕**

キリストが人となってくださったことのすばらしさを子どもたちに伝えたい。ローマの信徒への手紙の5章は、キリストが死んでくださったことにより、神の怒りから私たちを救ってくれたことを語る。そこに、神の愛がある。クリスマスと連続する時でもあるので、改めてキリストがこの地上にきてくださったことの感謝を子どもたちが感じてくれたらと思う。

# 私たちの救いのために

みなさん、おはようございます。今日も子どもと親のカテキズムから、イエス様についてのお話しです。

イエス様がお生まれになった日のことを御祝いするクリスマスを、先日、一緒に覚えました。イエス様がマリアさんをお母さんとしてお生まれになったということを、これまで教会にきていたお友達は何回も聞いていると思います。

そして、イエス様がマリアさんから、生まれながらも、聖霊なる神さまの力によって、罪のない仕方で生まれたということも、とても大切な聖書の教えですね。そして、イエス様はまことの神さまとして、この地上にお生まれになったのでした。そして、イエス様は地上で人間として過ごされて、私たちの罪のために十字架についてくださったのです。それが、そのようにして、イエス様を信じる私たちが、救われて、神さまと共にいることができるようになりました。

でも、少し不思議なのは、どうしてイエス様は人間としてお生まれになったのでしょうか。神様が人間になる。それは私たちと同じ体と心をお持ちになる、ということです。どうして、イエス様はこのようにお生まれになったのでしょうか。神さまのままで、人びとを罪から解放することはできなかったのでしょうか。

イエス様が人間になられたのは、罪を犯したのが人間だからです。人間が罪を犯した以上、その罪の責任を取るのは、人間です。何か悪いことをした時に、他の人がその責任を取るということは、いけないことです。自分がした悪いことは、自分で責任をとらなければいけません。ですから、罪がある以上、その罪をなんとかするのは人間に与えられた責任なんです。そして、イエス様が人間になられたということ、それは人間として、罪を背負うために、罪の責任を取るために人間になってくださったのです。

罪を持つということは、神様からの怒りと呪いを受けるということです。それくらい、神様は罪をお嫌いになります。神様はただしいお方ですから、罪を持っていないのはもちろん、罪を罰するお方なのです。人間は本来、罪に定められています。罪とは神さまの言葉を信じないで、離れることでした。そして神様との親しい交わりから排除されることでした。罪がある以上、人間は神さまに近づくことはできません。

でも、まことの神様であり、まことの人であるイエス様が、十字架についてくださり、死んでくださいました。それは、私たちの罪の故です。イエス様は罪の責任をとるために、十字架についてくださいました。それは、イエス様を信じる私たちの身代わりになるためでした。

本来、十字架につかなければならないのは、罪を持っている私たち一人一人です。でも、イエス様が十字架についてくださったので、イエス様を信じる時、私たちはもう十字架につけられる必要はありません。それだけではなく、神様のことを

心から礼拝することができるようになるのです。

イエス様が死んでくださったのは、私たち一人一人が、罪から来る呪いから解放されるためです。それは、神さまと仲直りすることでもあります。

パウロさんは、今日の聖書箇所で、このように私たちのために死んでくださった神様に感謝して、神さまの愛が、こうしてしめされたと語っています。イエス様が人間になってくださったこと。そこに、神の愛があるのです。

神の愛に満たされた私たちには、神さまからの平和があります。そしてそれは、神さまの栄光に与ることでもあるのです。

神さまとの平和にいれられた私たちは、どのような試練にも耐えることができます。それは信仰にある希望をいただけるからです。私たちが希望を失うことなく歩むことができるのは、イエス様が人となってくださり、神さまからの呪いを引き受けてくださったからなのです。　(小宮山裕一)

---

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙 5章9節

それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、
キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

---

# 12月27日　キリスト・真の人　　小学科下級

**ローマ5:1〜11**

①私たちは何によって義とされましたか？

②何を通して、今の恵みに導き入れられましたか？

③苦難が生むものは何ですか？

④忍耐が生むものは何ですか？

⑤練達が生むものは何ですか？

⑥私たちのためにキリストがしてくださったことは何ですか？

⑦御子の死によって、神と私たちの関係はどうなりましたか？

## 12月27日　キリスト・真の人　　中学科

**ローマ5:1〜11**

①私たちは何によって義とされましたか？

②義とされることで得たものは何ですか？

③何を通して、今の恵みに導き入れられましたか？

④私たちが誇りとしているものは何ですか？

⑤苦難が生むものは何ですか？

⑥忍耐が生むものは何ですか？

⑦練達が生むものは何ですか？

⑧神の愛は何によって私たちの心に注がれていますか？

⑨私たちのためにキリストがしてくださったことは何ですか？

⑩神の愛は、何によって示されましたか？

⑪私たちは何によって義とされましたか？

⑫御子の死によって、神と私たちの関係はどうなりましたか？

# 2016年1～3月カリキュラム（第60号）

―『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル　第1年―

| 月　日<br>教会暦・行事 | 主　　題 | 子どもカテキズム | 参照教理問答 |
|---|---|---|---|
| | | 聖 書 箇 所 | 暗 唱 聖 句 |
| | 単 元 の 目 標 | | |
| 1月3日<br>新年 | 教会とともに歩む一年 | (問4) | ウ小57～62、ハイ10 |
| | | 出エ20:8～11、申5:12～15 | 出エジプト20:8 |
| | 主の日を大切にし、そこに現れる神さまの恵みの大きさを受けとめて歩む | | |
| 1月10日 | イエス・キリストとは | 問29 | ウ小21～26 |
| | | マタイ福音書1:18～26 | マタイ1:18 |
| | イエスさまこそが、キリストであり、私たちの救い主であることを確信する | | |
| 1月17日 | キリストの高い状態と<br>低い状態 | 問30 | |
| | | 使徒2:32～36 | 使徒2:36b |
| | へりくだされても王として私たちのために働いてくださる主イエス | | |
| 1月24日 | 預言者なるキリスト | 問31 | ウ小24、ウ大153～160、ハイ31 |
| | | ―テサ2:1～13 | ローマ10:17 |
| | 神の言葉の働きが顕在化する礼拝の説教を受け入れる | | |
| 1月31日 | 祭司なるキリスト | 問32 | ウ小25、27 |
| | | イザヤ52:13～53:12 | イザヤ53:12 |
| | 救い主の犠牲の大きさを感じ、その恵みを喜びとして覚える | | |
| 2月7日 | 王なるキリスト | 問33 | ウ小26、ウ大45 |
| | | コロサイ1:13, 14 | 詩編97:1 |
| | 主が王として私たちを支配してくださる事を喜びとして覚え讃美をもって讃える | | |
| 2月14日 | 聖霊・ただ恵みによって | 問34 | ウ小29、30、ウ大58 |
| | | マルコ10:17～27 | テトス3:5, 6 |
| | 自分の力で救いを手に入れることはできない | | |
| 2月21日 | 聖霊・キリスト<br>との交わり | 問35 | ウ大58、59、76、155、178 |
| | | ルカ5:1～11 | ミカ3:8 |
| | 聖霊は私たちの心に働きかけ、罪の自覚と悔い改めを促し、イエスに従えるよう変えてくださる | | |
| 2月28日 | 救いとは何か | 問36 | ウ告11:1、12:1、ウ小33、34 |
| | | エフェソ1:3, 14 | コロサイ1:13～14 |
| | 救いとは何かを確認し、喜びと感謝にあふれて主を信じ生きていく | | |
| 3月6日<br>レント | 聖化の歩み | 問37 | ウ小35、ウ大75、ハイ32 |
| | | ニコリント3:18 | ニコリ3:18 |
| | 聖霊の働きによって私たちは神さまの子どもらしくされていく。その恵みの中を生きていこう | | |
| 3月13日<br>レント | 救いの確かさ | 問38 | |
| | | ローマ8:26, 27 | |
| | 私たちの救いは神様のお働き。特に私たちの中で働いてくださっている聖霊のお働き | | |
| 3月20日<br>受難週 | 十字架のキリスト | (問27、28) | ウ小27、ハイ37 |
| | | ルカ23:44～49 | ―ヨハ2:2 |
| | どんな時でもイエスさまがいてくださる。気持ちを分かってくださる | | |
| 3月27日<br>復活祭 | 復活のキリスト | (問40) | |
| | | ヨハネ20:19～23 | |
| | イエスさまからの命の息吹を礼拝において吹き入れられる | | |

# 2015年度 年間カリキュラム（第57～60号）

―『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル―

（2015年4月～2016年3月）

| | 月　日 | 教会暦・行事 | 主題 | 子どもカテキズム |
|---|---|---|---|---|
| 2015年 | 4月５日 | 復活祭 | 復活されたキリスト | |
| 第57号 | 4月12日 | | 神と共に歩む | 問1 |
| | 4月19日 | | 神の子とされて | 問1 |
| | 4月26日 | | 神を知る喜びに生きる | 問2 |
| | 5月３日 | | 神と人に仕えて歩む | 問2 |
| | 5月10日 | | イエスさまを信じる | 問3 |
| | 5月17日 | | 神の子とされた喜び | 問3 |
| | 5月24日 | | 呼び出されて生きる | 問4 |
| | 5月31日 | | 派遣されて生きる | 問4 |
| | 6月７日 | 聖霊降臨祭 | キリストの教会のはじめ | |
| | 6月14日 | | 愛に生きる | 問5 |
| | 6月21日 | | 祈りに生きる | 問5 |
| | 6月28日 | | 神の御言葉 | 問6 |
| 第58号 | 7月５日 | | 人生の光 | 問6 |
| | 7月12日 | | 聖書の内容 | 問7 |
| | 7月19日 | | 人格としての神 | 問8 |
| | 7月26日 | | 神の属性 | 問8 |
| | 8月２日 | | 唯一の神 | 問9 |
| | 8月９日 | | 偶像礼拝の空しさ | 問10 |
| | 8月16日 | | 三位一体・神の本質 | 問11 |
| | 8月23日 | | 三位一体・神の経綸 | 問12 |
| | 8月30日 | | 父なる神の本質 | 問13 |
| | 9月６日 | | 創造者なる神 | 問14 |
| | 9月13日 | | 摂理の神 | 問15 |
| | 9月20日 | | 父なる神の親心 | 問16 |
| | 9月27日 | | 人間・神のかたち | 問17 |

| 年・号 | 月　日 | 教会暦・行事 | 主題 | 子どもカテキズム |
|---|---|---|---|---|
| 第59号 | 10月４日 | | 人間・神と人と共に | 問17 |
| | 10月11日 | | 人間の使命 | 問18 |
| | 10月18日 | | 人間・罪の起源 | 問19 |
| | 10月25日 | | 罪とは何か | 問20 |
| | 11月１日 | | 罪人の悲惨 | 問21 |
| | 11月８日 | | 罪人の歩み | 問22 |
| | 11月15日 | | わたしの罪　神の怒りと裁き | 問23 |
| | 11月22日 | | 完全な堕落　キリストの贖罪 | 問24 |
| | 11月29日 | 待降節 | 救い主の約束 | 問25 |
| | 12月６日 | 待降節 | 二性一人格 | 問26 |
| | 12月13日 | 待降節 | キリスト・真の神 | 問27 |
| | 12月20日 | 降誕祭 | キリストの降誕 | (問26) |
| | 12月27日 | | キリスト・真の人 | 問28 |
| 2016年 | 1月３日 | 新年 | 教会と共に歩む一年 | (問4) |
| 第60号 | 1月10日 | | イエス・キリストとは | 問29 |
| | 1月17日 | | キリストの高い状態と低い状態 | 問30 |
| | 1月24日 | | 祭司なるキリスト | 問31 |
| | 1月31日 | | 預言者なるキリスト | 問32 |
| | 2月７日 | | 王なるキリスト | 問33 |
| | 2月14日 | | 聖霊・ただ恵みによって | 問34 |
| | 2月21日 | | 聖霊・キリストとの交わり | 問35 |
| | 2月28日 | | 救いとは何か | 問36 |
| | 3月６日 | レント | 聖化の歩み | 問37 |
| | 3月13日 | レント | 救いの確かさ | 問38 |
| | 3月20日 | 受難週 | 十字架のキリスト | |
| | 3月27日 | 復活祭 | 復活のキリスト | |

# 救済史に基づく二年サイクル

| | 月　日 | 教会暦・行事 | 主題 | 子どもカテキズム | バックナンバー |
|---|---|---|---|---|---|
| 2015年 | 4月５日 | 復活祭 | 復活されたキリスト | | |
| 第57号 | 4月12日 | | 世界の創造 | 創世記1:1～2:3 | 第30, 54号等 |
| | 4月19日 | | 人間の創造 | 創世記2:4～25 | 第30, 54号等 |
| | 4月26日 | | 人間の堕落 | 創世記3:1～24 | 第9, 54号等 |
| | 5月３日 | | カインとアベル | 創世記4:1～16 | 第30, 46号等 |
| | 5月10日 | | ノア契約 | 創世記6:5～9:17 | 第37号 |
| | 5月17日 | | バベルの塔 | 創世記11:1～9 | 第21, 37号等 |
| | 5月24日 | 聖霊降臨祭 | キリストの教会のはじめ | 使徒2:37～42 | |
| | 5月31日 | | アブラハム契約 | 創世記11:27～12:7 | 第38, 55号等 |
| | 6月７日 | | イサク誕生 | 創世記18:1～15, 21:1～8 | 第38号等 |
| | 6月14日 | | キリストの名による宣教 | 使徒3:1～10 | 第27, 53号等 |
| | 6月21日 | | 教会への迫害の始まり | 使徒4:1～22 | なし |
| | 6月28日 | | 教会の理想的姿と問題 | 使徒4:32～5:11 | 第18, 27号 |
| 第58号 | 7月５日 | | 教会組織のはじめ | 使徒6:1～7 | なし |
| | 7月12日 | | 教会の殉教者のはじめ | 使徒6:8～7:60 | 第12, 27号 |
| | 7月19日 | | エルサレム外への宣教はじめ1 | 使徒8:1～25 | なし |
| | 7月26日 | | エルサレム外への宣教はじめ2 | 使徒8:26～40 | 第7, 12, 29号 |
| | 8月２日 | | パウロの回心 | ガラテヤ1:11～24 | なし |
| | 8月９日 | | 異邦人への使徒・信仰による義 | ガラテヤ2:1～21 | なし |
| | 8月16日 | | 天上のキリスト | 黙示録1:9～20 | 第28, 54号 |
| | 8月23日 | | あらゆる国民による賛美 | 黙示録7:9～17 | 第32号 |
| | 8月30日 | | 新しいエルサレム | 黙示録21:22～22:5 | なし |
| | 9月６日 | | キリストの再臨 | 黙示録22:6～21 | 第28号 |
| | 9月13日 | | ハンナの祈り | サムエル上1:1～20 | なし |
| | 9月20日 | | サムエルエルへの主の語りかけ | サムエル上3:1～21 | 第8, 20, 41号 |
| | 9月27日 | | サウル、王とされる | サムエル上8:1～10:27 | 第41号 |

| 年・号 | 月　日 | 教会暦・行事 | 主題 | 子どもカテキズム | バックナンバー |
|---|---|---|---|---|---|
| 第59号 | 10月４日 | | 主に従わなくなるサウル | サムエル上<br>14:47～15:35 | なし |
| | 10月11日 | | ダビデ、油を注がれる | サムエル上<br>16:1～13 | 第42号 |
| | 10月18日 | | ダビデとゴリアト | サムエル上<br>17:1～58 | 第25, 42号 |
| | 10月25日 | | ダビデを憎むサウル | サムエル上<br>18:6～30 | なし |
| | 11月１日 | | サウルを敬うダビデ | サムエル上<br>24:1～23 | なし |
| | 11月８日 | | ダビデ、神の箱をエルサレムへ運ぶ | サムエル下<br>6:1～23 | なし |
| | 11月15日 | | ダビデ契約 | サムエル下<br>7:1～17 | 第42, 56号等 |
| | 11月22日 | | ダビデの罪 | サムエル下<br>11:1～12:24 | なし |
| | 11月29日 | 待降節 | 救い主の約束 | 問25 | |
| | 12月６日 | 待降節 | 子なる神・二性一人格 | 問26 | |
| | 12月13日 | 待降節 | 子なる神・真の神 | 問27 | |
| | 12月20日 | 降誕祭 | キリストの降誕 | (問26) | |
| | 12月27日 | | | | |
| 2016年<br>第60号 | 1月３日 | 新年 | 教会と共に歩む一年 | (問4) | |
| | 1月10日 | | 少年イエス | ルカ2:41～52 | 第23号 |
| | 1月17日 | | 洗礼者ヨハネの証言 | ヨハネ1:19～34 | 第11号 |
| | 1月24日 | | 主が誘惑を受ける | ルカ4:1～13 | なし |
| | 1月31日 | | 主が来られた目的 | ルカ4:16～30 | なし |
| | 2月７日 | | 主が病人を癒す | ルカ4:38～41 | なし |
| | 2月14日 | | 漁師を弟子にする | ルカ5:1～11 | 第47号 |
| | 2月21日 | | 敵を愛しなさい | ルカ6:27～36 | 第29号 |
| | 2月28日 | | 五千人にパンを与える | ルカ9:10～20 | なし |
| | 3月６日 | レント | 山上の変貌 | ルカ9:28～36 | なし |
| | 3月13日 | レント | 主の晩餐 | ルカ22:14～23 | なし |
| | 3月20日 | 受難週 | 十字架のキリスト | | |
| | 3月27日 | 復活祭 | 復活のキリスト | | |

# 子どもと親のカテキズム

## 神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

### 『子どもと親のカテキズム』の目指すもの

～「あとがき」より～

このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子ども伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格400円（税込）

書店での販売価格は540円（税込）ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円（税込）です。

申込先　E-mail　naoto@yasudafam.com　安田直人

振込先　00130-7-485942　安田直人

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

教文館　〒104-0061　東京都中央区銀座4-5-1　TEL03-3561-5549　FAX03-5250-5107
HPをご利用ください。http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/　【呈・図書目録】

〈執筆者・編集者よりひとこと〉

●教会の 未来をつなぐ 教案誌　執筆大変やりがい多し　（小宮山裕一）

●「言のうちに命があった。命は人間を照らす光であった」（ヨハ1:4）このヨハネによる福音書冒頭の、不可思議で、しかし、あたたかく、勇気が湧いてくる言葉。この『教会学校教案誌』を通じて、御言葉とそれを伝える教理の、広さと、ぬくもりと、その光とに、共にあずかりたいと願っています。　（柏木貴志）

〈あとがき〉

●第59号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●「教会学校教師のための神学講座」として、吉田隆先生の「全生活にわたる感謝～『十戒』を生きる」を連載しています。これはかつて成人課の教案として掲載されたものの再掲です。子どもたちのためのみならず、70周年宣言に備えるためにも、また教師会での学びのためにもお用いください。吉田隆先生に感謝いたします。

●「教会学校訪問」を執筆をしてくださった徳島教会教会学校教師会の皆様、寺内実和姉に感謝いたします。

●4月から『子どもと親のカテキズム』を用いたカテキズムカリキュラムが始まっています。必要な場合は、大会教育委員会を通してくださると、定価540円(税込)のところ、400円(ただし送料別)で、お買い求めいただけます。
問い合わせは、安田直人（田無教会）まで。
E-mail:naoto@yasudafam.com

●「分級展開例の新しい試み」にもありますように、今号から分級展開例が変わります。子どもたちと共に、御言葉を読み、御言葉の真理を発見していく営みが祝福されますよう祈ります。執筆をしてくださった、島野美佳子姉、愛智愛姉に感謝いたします。

●『子どもと親のカテキズム』解説を大会教育委員会から今秋出版の予定でしたが、来秋に園長となりました。今しばらくお待ちください。

●救済史カリキュラムの表を、巻末につけてあります。対応する過去の巻がある場合には、指示があります。それぞれの教会学校の状況に合わせて、カテキズムカリキュラムだけではなく、救済史カリキュラムも用いたいとお考えの場合、参考にしてくだされば幸いです。

●今号も、IBUKIの中村未生兄、高橋乃亜兄が表紙デザインのためにご奉仕くださいました。感謝いたします。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部から提供させていただいています。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。問い合わせは相馬伸郎まで。
E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

〈購読の申し込み先・自由献金送付先〉

●教案誌を自由献金をもってお支えください。
送金先　郵便振替　伊藤治郎
00890-2-148183

●『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。
バックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。
大垣伝道所　辻幸宏まで
〒503-0996 大垣市島町283
Tel/Fax. 0584-91-3538
E-mail:yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき
　相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）
巻頭説教
　長田詠喜（新所沢伝道所宣教教師）
分級展開例の新しい試み
　安田直人（田無教会牧師）
子どもたちの学校生活を通して見たアメリカの教育事情
　望月　信（休職教師・カルヴィン神学校）
教会学校訪問
　徳島教会教会学校教師会
徳島教会 Happy Kids
　寺内実和（徳島教会信徒）
絵本に心を耕されて
　望月鈴子（浜松伝道所信徒）
教師の声
　渡辺史朗（名古屋岩の上教会信徒）
　齋藤厚子（浜松伝道所信徒）
子どもメッセージ
　保田広輝（長丘教会信徒・神学校聴講生）
教会学校教師のための神学講座
　吉田　隆（神戸改革派神学校校長）
聖書黙想・説教展開例
　芦田高之（新浦安教会牧師）
　木下裕也（名古屋教会牧師）
　赤石純也（伊丹教会牧師）
　相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）
　赤石めぐみ（伊丹教会信徒）
　大西良嗣（滋賀摂理教会牧師）
　袴田清子（北神戸キリスト伝道所信徒）
　長田詠喜（新所沢教会牧師）
　柏木貴志（岡山教会牧師）
　安田直人（田無教会牧師）
　牧野信成（西神教会牧師）
　片岡　継（徳島教会牧師）
　小宮山裕一（ひたちなか教会牧師）
分級展開例
　愛智　愛（新座志木教会信徒）
　島野美佳子（坂戸教会所属新潟伝道所信徒）
イラスト作画
　表紙　中村未生（春日井教会信徒・IBUKI）
　　高橋乃亜（湘南恩寵教会信徒・IBUKI）
　本文　岡野美佳（青葉台キリスト教会信徒）

☆ 編 集 部 ☆

| | |
|---|---|
| 相馬伸郎（長） | 名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会 |
| 芦田高之 | 新浦安教会牧師・大会教育委員会 |
| 大西良嗣 | 滋賀摂理教会牧師・大会教育委員会 |
| 長田詠喜 | 新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会 |
| 安田直人 | 田無教会牧師・大会教育委員会 |
| 木下裕也 | 名古屋教会牧師 |
| 辻　幸宏 | 大垣伝道所協力牧師 |

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会『教会学校教案誌』
2015年10・11・12月号（季刊）
第59号
2015年8月25日発行

発行　日本キリスト改革派教会　大会教育委員会
発行所　日本キリスト改革派教会　大会教育委員会
名古屋岩の上教会　牧師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座　00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷　株式会社あるむ
頒価　900円（本体価格）

Reformed Church in Japan
Board of Education

２０１５年１０～１２月号（２０１５年８月２５日発行）　発行：日本キリスト改革派　大会教育委員会